# CureRebellion Episode:Blood

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＣｕｒｅＲｅｂｅｌｌｉｏｎ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：Ｂｌｏｏｄ

【Ｎコード】

Ｎ６０２８Ｗ

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

怨念の集合体として蘇り、七人の僕を率いて国を次々に滅ぼしていく雨牙真夜＝キュアリベリオン。世界への絶望しか抱いていない彼女はある時濃霧に閉じ込められた小さな島に到着する。その島は、島民を不死身の生命体＝アンデッドへと生体実験を行っていく魔女とレジスタンスとの戦いが続いていた。島から脱出するため、真夜は魔女に戦いを挑むが・・・。これはまだ全ての世界を地獄に変える少し前の、自ら死神と呼んだ少女の哀しき物語。

## まえがき

本作は私の小説第三作「プリキュアオールスターズＤＸ２ＴＨＥＬＡＳＴ　光と闇☆最後の戦い」の前日譚となります。なので初めて読む方は上記作品を先に読んでもらえれば数倍楽しめると思いますが、本作を読んだ後に読んでもらっても構いません。

しかし、本作は筆者初の残酷描写作品と指定しており、本当に過激な描写が出てきます。なので本当に苦手な方は無理をせずに読まないでください。

それでも、と思う方はどうぞお楽しみください。

## 登場人物紹介

雨牙真夜／キュアリベリオン

悪のプリキュア。人間年齢では１７歳。

キク

マイナス七人衆の一人。１８歳。千里眼能力とサーベルを駆使した剣術の持ち主。本名は宇都宮菊（うつのみや キク）。

ミチ

マイナス七人衆の一人。１７歳。水を生み出し、操る能力を持つ。本名は流禅師美智（りゅうぜんじ ミチ）。

スズ

マイナス七人衆の一人。１３歳。帯電体質。本名は折部鈴（おりべ スズ）。

ヨツバ

マイナス七人衆の一人。１７歳。凶悪科学者（マッドサイエンティスト）。本名は村雨四葉（むらさめ ヨツバ）。

ツバキ

マイナス七人衆の一人。１５歳。敵をクリスタルのような物体に封じ込め、物体ごと爆破させる能力を持つ。本名は相楽椿（さがらツバキ）。

カノン

マイナス七人衆の一人。１４歳。季節や場所に関係なく、多種の花を咲かせ、触手や燐粉、毒針等で攻撃する。本名は法月華音（ほうづきカノン）。

アキラ

マイナス七人衆の一人。１４歳。全身からコードのような大量の触手を生やす能力の持ち主。本名は藤堂亜綺羅（とうどうアキラ）。

ヤミ

ヨツバに生み出された戦闘型の自動人形（オートマトン）。人間年齢では１７歳。

ノヴァ

トモス島を支配し、島民をアンデッド生誕の生体実験に使用する黒魔女。推定年齢２０歳前後。

ウェンディ

ノヴァに対抗するレジスタンスの主導者（リーダー）。医者でもある。１７歳。

ジャン

ノヴァに対抗するレジスタンスの少年。１３歳。

グロウリー

ノヴァの用心棒を務めるアンデッド。剛力の持ち主。

レベッカ

ノヴァの用心棒を務めるアンデッド。俊足の持ち主。

# プロローグ

朝の五時。
まだ陽も出ていない時刻に“私”はむくりとベッドから起き上がる。
真夜はまだ深い眠りから覚めそうにない。傍らで寝転がっている彼女の相棒（パートナー）、ロモモも同様だ。ふたりの寝顔を見て、私は小さくため息を吐く。
全く、よくまあ、こんなふたりでこの私を止められたものだ・・・・・。
カーテンを開き、藍色になりつつある空を眺める。
綺麗で、静寂で、今日も世界は平和だ。
けれど、この世界のどこかではきっとまだ多くの人が泣いている。傷ついている。死んでいる。
私は、その人たちの想いを背負って、この世界を二度壊そうとした。けれど、壊せなかった。
プリキュアという、光のおかげで。そのひとりが、目の前にいる真夜だった。
雨牙真夜。またの名を、全てを希望へ導く救世の光、キュアセイバー。
一度は私を捨てた彼女は、私をもう一度受け入れるために決死で戦い、大切なものを守り、勝利した。私はそんな真夜の想いを受け入れ、ともにこの世界を守った。
そして、いつか優しい世界を作るという真夜に任せ。
私は世界から消えた・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
私が本能に任せ、一度は世界に災厄をもたらしたことについては

言い訳しないし、後悔もない。
けれど、目を瞑れば思い出す。あの過去(とき)のことを。
もし、あの過去が私にとって、本当に何らかの分水嶺(ぶんすいれい)に位置づけられる、記念碑的な出来事だったら、私も憎悪や復讐に囚われず、別の生き方を選んでいたのかもしれない。
なぜなら。
この私が、たった一度だけ、少しでも世界を壊さなくていいかもしれないと思った出来事だから。
これは真夜も知らない、あなただけに明かす死神の、唯一光り輝いたかもしれない物語。
もしあなたにその物語のページをめくる覚悟があるのなら、この私自身があなたをその瞬間へと、招待(アジャスト)しよう。
ああ、そうそう、危うく忘れるところだった。
私の名前は、雨牙真夜(アマキマヤ)。
またの名を、全てを無へ誘(いざな)う漆黒の堕天使、キュアリベリオン。
世界を二度も滅ぼそうとした史上最悪最凶のプリキュアにして、雨牙真夜(キュアセイバー)のもう一つの姿。
さあ、準備はできた？
なら、早くページをめくりなさい。
私にとって、いい思い出で。
悪い夢の中へと。

## 深夜

R国。午前二時。

丑三つ時の時刻になってもなおネオンが消えることなく、人や車が行き交う眠らない街。

そんな街の中に存在する一際高い高層ビルの４４階の一室に禿頭の太った４０過ぎの男は一気に街を見下ろせるガラスを背に、照明も点けずに高級そうな椅子に一人で腰掛けていた。

いや、正確には一人ではない。禿頭のすぐ手前の机（デスク）にもう一人、誰かが足を組んでさも当然のように座っている。

両端を黒のリボンで結んだポニーテール。

腹部に描かれた蛇眼を印象（イメージ）させる紋様。

白地のシャツに結ぶことすら面倒くさいというかのようにぞんざいに掛けられたネクタイ。

黒と白のチェックのスカート。

まるで存在そのものが永遠の「闇」を表す漆黒の衣装。

海賊のような黒い眼帯で右目を隠した１７歳程度（くらい）の日本人の美少女。

しかし、少女は今、座ったまま禿頭の喉元に右手に装備された三本の鋭利な鉤爪を突きつけ、左手で数枚の用紙をぱらぱらと一枚ずつ目を通している。やがて全ての用紙を読み終えた黒い少女は、ふぅ、と息を吐くと、どろどろと汗が止まらない禿頭にようやく顔を向けた。

「・・思った通りね。橋の工事の入札額を特定の業者に漏洩して見返りに賄賂だけじゃなく自分の家まで建てる、陳情による違法な口利きに交通違反のもみ消しで見返りにまた賄賂、廃棄物業者と結託して改竄（かいざん）したデータで工場の誘致・・・さらには選挙の票の取りまとめもカネで頼んでいる。そんでもって表の世界では真面目で謙虚と支持を得て国民を騙してるんだからあなたも相当なワルね、大臣」

「・・な、なぜそれを？」
喉に鉤爪を突きつけられ、少しも身動きできず、今にも殺されるかもしれない恐怖に怯えながらやっとのことで禿頭＝大臣は少女にそう問う。少女は冷たい左目を禿頭から逸らすことなく、用紙を持った左手を少々左右に振って答える。
「これ？あなたの優秀な秘書さんが持っていたＰＣのデータを全部プリントアウトして要点まとめておいたのよ。ついでに詳細なデータもＣＤ－Ｒに焼きつけておいてね。これが全部バレたら、当然あなたは失脚どころかブタ箱行き決定ね」
「も・・目的は金か？」
汗だくだくのまま、自問するように再び問う禿頭。少女はしばらく「う～ん・・」と考え込んでから答えた。
「そうね・・・すぐにでも記者会見でも開いて大臣辞退を表明したら面白いかな？」
「な、何だとっ！？」
「そうすれば、もちろん命は取らないし、この用紙（プリント）だって渡してあげてもいい」
「わ・・私に一文無しになれと？」
「だって、今までずっと甘い汁を吸ってきたんでしょ？でもあなたはその汁を独り占めしすぎたのよ。その報いとして、これくらいで済むのだからいいでしょ？・・・さ、どうする？大臣」
用紙をひらひら見せられ、「くっ・・」と唇を噛む禿頭。しばらく沈黙し、考え込んだが、ようやく意を決したらしく、口を開いた。
「・・・わ、分かった。すぐに会見を開いて大臣を辞退する」
「本当？」
「あ・・・ああ」
少女はようやく禿頭から左目を逸らし、喉から鉤爪を離して机（デスク）から降りた。
「じゃあ、信じるわ。でも会見が終わるまでは用紙（これ）は預かっておくから・・・」

用紙を見せながら、禿頭に背を向けて入口へと歩み出す少女。恐怖と緊張から解放された禿頭は安堵の息を吐いて、ハンカチで汗を拭くと、

「ああ、分かった・・・・・・・・・・・・なんて言うと思ったか、小娘がっ！」

引き出しから機関銃（マシンガン）を掴み取り、少女が振り返る前に発砲した。

ガガガガガガガガガガ・・・・・と何発なのかも分からないくらいありったけの弾丸が小刻みな音を立てながら矢継ぎ早に発射される。無数の弾丸は全て少女に浴びせられ、瞬時に大量の硝煙が禿頭の視界を支配した。

「ふ・・・はははははははっ！バカめが！大臣を辞退しろなどふざけたことをほざきおって！この私を強請るからこうなるのだ。おまえともども消してしまえば、証拠も何も残らん！最後の最後でとんだ間抜けをしでかしてしまったことを地獄で後悔するんだな！はははははははは・・・・は？」

硝煙が晴れ始め、禿頭の笑いが止まる。数秒後には裸眼が剥き出しになり、顔から血の気がみるみる引いた。

「ばばばばばば・・・・バカな！？」

少女は生きていた。しかも全くの無傷だった。衣服にも用紙にも損傷した跡がない。

弾丸（タマ）はどこに消えた？すると、少女はその疑問に答えるかのように両手を開いた。じゃらじゃらじゃらじゃら・・・・と、なかば潰され、変形した21個の弾丸が床へと一つずつこぼれていく。

まさか全部掴み取ったというのか！？

数十のボディガードの間をすり抜けてここまで来た腕前といい、一体この少女は何者なのか？

様々な疑問が思い浮かぶが、禿頭はすぐにそれを恐怖に変えた。少女は再び右手の鉤爪を煌かせ、ゆっくりと接近してくる。

「く・・・・来るなあっ！」

再度機関銃（マシンガン）を構える禿頭だが、トリガーを引くよりも早く少女は

一瞬で眼前に現れた。
「ひっ・・・！」
あっという間にひったくられ、形勢が逆転する。少女は銃口を向けたまま、あいかわらず冷酷な左目で禿頭を見る。
「残念ね。私としては命だけは本当に助けてあげようと思ったんだけど、やっぱり馬鹿は死ななきゃ治らないみたいね」
ズガガガガガッッ！機関銃（マシンガン）が火を噴く。禿頭はとっさにかがんだが、弾丸は全て彼の背後のガラスに激突した。当然ガラスは粉々、細かな破片と塵と化して地上へと降下していく。禿頭はなおも銃口を向けている少女に急いで平伏し、涙ながらに懇願した。
「た、頼む。やめてくれ。騙して悪かった。今度こそ本当に大臣を辞職する！金も欲しいだけやる！だから・・だから、殺さないでくれ！」
「は？殺す？何言ってるの？私は殺したりなんかしないわよ」
「え？」
思わず顔を上げた禿頭に、少女は膝を折り曲げて目線を合わせ、右目の眼帯に手を伸ばした。外れ、瞳も見えず、ただ血みどろのように紅い眼が露になる。少女はその緋色の眼で禿頭の両目を覗き込み、囁くように言った。
「あなたはね、自殺するのよ。・・・ただし、自我は残したままね」
瞬間、禿頭はゆっくりと立ち上がる。
そして、そのままくるりと振り返り、割れたばかりのガラスへと歩み始めた。
「ひっ、何だこれは？体が・・・体が勝手にぃぃっ！」
意識ははっきりしているのに、身体が言うことを聞かない。まるで操られているかのようだ。ガラスまであと数メートルもない。禿頭は最後の力で唯一動かせる首をねじり、ほんのりと赤く染まっている両目から涙を溢れさせながら少女に精一杯訴えた。
「た・・助けてくれ！もうその用紙もバラしてもいい！死にたくない！死にたくないよお・・っ！」

だが、少女は動かない。紅い眼をさらし、微塵にも微動しない表情でただ見つめているだけだった。
生きているはずなのに、まるですでに死んでいるかのような無表情。
一体、何があれば人間は、しかもこんな少女が残酷な表情ができるのかと、死を目前にしながら禿頭の脳内は皮肉にも恐怖より疑問が勝っていた。
「お・・おまえは、何なんだ・・・・？」
それが最後の言葉だった。
直後に禿頭は宙への第一歩を踏み出した。
「うわあああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」
すぐに視界から消え、小さくなっていく禿頭の声。彼が地上に激突し、肉片の塊と化するも時間の問題だろう。少女は眼帯をもとの右目に戻し、持っていた機関銃(マシンガン)をその場に軽く投げ捨てた。直後に背後に気配を感じ、振り向く。憲兵を印象づける軍服を身に纏った背の高い少女がそこに立っていた。
「・・キク、いきなり後ろに立たないでくれる？いくら私でも心を見透かされそうで、怖いわ」
「申し訳ございません」
「・・そっちのほうは片付いたみたいね」
「はい。下の者は私たち七人衆が全て制圧しました。ただ、スズだけがまた今度もうまく力を発揮できなかったようで・・」
「そう、まあ仕方ないわ。あの娘(こ)は新入りだし、歳も一番下だから。本来なら子供はとっくに寝てる時間でもあるしね」
「それはそうと、そちらも悪(ゴミ)掃除終わったみたいですね？」
軍服の少女が聞くと、黒い少女はゆっくりと、首を左右に振った。
「いえ、まだよ」
「え？しかし・・」
刹那、軍服の少女はその闇(くら)い瞳から彼女の本意を知った。その瞳

に宿したものに、震えが来る。愁(うれ)いが来る。
「まさか、あなたは・・・」
彼女の言葉を遮り、少女は割れて風が入ってくるガラスから下界を見下ろした。赤黒の血が広がり、肉片の塊と化した禿頭の周囲に警察と救急、そして大勢の人が集まってきている。数分後にはここに捜査の手が伸び始めるだろう。だから、その前に・・・・。
「まだあるでしょ？少しだけ大きい悪(ゴミ)が・・」

数分後。
都心を包み込む紅蓮。炎はあっという間にさっきまで賑わっていた繁華街も火の海にし、何もかも燃え尽くしていく。悲鳴をあげ、逃げ惑う人々。消防が駆けつけるが、どんなに放水しても炎は鎮火するどころか激しさを増す。
「どうなっているんだ！？火が全然消えんっ！！」
「至急！至急応援頼みます！」
「家が！俺の家があっ！！」
「会社が・・会社が、燃えていく！」
「うわああっ！これからどうやって暮らしていけばいいんだあっ！？」
命からがら避難所に逃げたものの、突然の原因不明の火災に全てを奪われ、唖然としていく人々。炎は人々の絶望を生み出し、勢いを増していく。鎮火する頃にはこの国は跡形もなく焼け野原となっているだろう。
そんなR国の「地獄」を黒い少女は背後に立つ八人の少女たちとともに遠くから眺めていた。
「ひょー。メッチャ燃えてんな～、こりゃ」
立ち膝座りの姿勢で眺めていた野球帽の少女が感嘆のため息を吐く。
「・・無駄よ。私の炎は陽が昇るまで消えやしない。その頃にはこ

の国は何もかも失い、文字通りこの世からなくなる」
「だけど・・・どうして、国まで消しちゃうの？」
少女たちの中で一番背が低い、ビニールのレインコートを着た少女が黒い少女に尋ねた。両目が少々潤んでいる。彼女にはどうしてここまでする必要があるのか理解できないようだった。
「あの・・その・・消すんだったら、その大臣さんだけでよかったんじゃ？だって、国の人たちは何も悪いことしてない・・・」
「スズ！おまえはまた・・」
「ひっ・・ご、ごめんなさ・・」
「べつにいいわ。答えてあげるよ、スズ」
キクと呼ばれた軍服の少女がスズと名を呼んだ少女を嗜（たしな）めようとしたが、黒い少女が制した。少女は腰と膝を少し曲げてレインコートの少女と目線を合わせて口を開く。
「スズ、確かに国民は何も悪いことしてない。でも、国民があの大臣を選んだのよ。そして、政治を全てあの大臣に任せたから、この国は腐りに腐っていった。それに気づかないまま・・・いえ、気づいていながらずっと無視して少しも動かなかったのよ。人もダメになった今、あの国に未来なんかない。だから全て燃やしたのよ、大きな悪（ゴミ）としてね」
「で、でも・・！」
「スズ、あなたは忘れたの？あなたがいた世界があなたにしてきたことを。あなたはあなたが見た現実を最初からなくしたくて、私の手を握った。違う？」
「そ・・それは」
彼女が返答に戸惑っていると、少女は鉤爪を装備していない左手で優しく頭を撫でた。
「どうしても分からなかったら、分からなくてもいい。私がやっていることも悪に違いないもの。正当化するつもりはないし、理不尽と言われても構わないわ。でも、私は今のところ、止める気はさらさらない。あなたたちの願いを叶えるために・・・世界を全て壊す

ために・・・・！」
少女は頭から手を離し、すっくと立ち上がる。全員に「行くわよ」と声をかけ、今も火の手が上がり続ける国を背景に闇へと歩き出した。
どうなろうと知ったことではないと、興味を失ったかのように。
ただ一度も振り返ることもなく。
『お・・おまえは、何なんだ・・・・？』
禿頭の最後の言葉が脳裏に蘇る。
少女は口角を上げてくすりと笑うこともなく、無表情のまま返事した。
「死神よ」

少女の名は、雨牙真夜（アマキマヤ）。またの名を、キュアリベリオン。
伝説の戦士と呼ばれるプリキュアの中で唯一人間でありながら闇に魂を売り、誕生した史上最悪最凶のプリキュア。
かつての自分が抱いていた世界への絶望から生まれ、地球へと降りた彼女は次元を転々としながらやがて異能力を持っていたために世界から拒絶されたマイナス七人衆と呼ばれる七人の少女たちを僕にし、各国を滅ぼしていく。
その目的は、全世界の破壊を成就するため。そして、もうひとりの自分に復讐を果たすため。
物語は、彼女が全ての世界を地獄に変える少し前から始まる。

## 不時着

高度上空一万キロメートル。

雲よりも高い空間を鷹に似た形状の巨大な機体が、グゥングゥン、とエンジン音を響かせて飛行している。機体は航空機よりも大きく、戦闘機よりも速い。空の旅を楽しむためのものではないのは明らかで、その証拠に機内にいる乗員はみな窓から壮大な下界を眺めることなく、座席に着いていた。

乗員は全部で九名。みな独特の衣装を身に纏っている。

一番後部座席に腰掛けているのは白シャツを半脱ぎ状態に着、黒の短いスカートを穿いた１７歳程度の黒い長髪の少女。名前はヤミ。どこから見ても人間の少女だが、驚くなかれ正体は戦闘型の自動人形（オートマトン）。高い戦闘力を持ち、闇の力を増幅した技も編み出す彼女は常に尖兵の役割を持つ。ただし、闇の力も加わって開発されたため、強大な光の力が弱点。現時点では彼女一体のみが存在。

隣に座るのが常に白衣を着、牛乳ビンの蓋に似たぐるぐるメガネを掛けたおさげ髪の１７歳の少女。名前は村雨四葉（むらさめヨツバ）。通称ヨツバ。天才的頭脳を持つ科学者で、ヤミを開発した張本人。もとは福祉や子守のために有能な人形（ロボット）を開発していたのだが、才能を妬まれた他の科学者たちに嵌められ、さらには研究所も失った衝撃で豹変、怪しげな薬品や開発に従じる凶悪科学者（マッドサイエンティスト）に変貌を遂げる。

彼女の斜め前の窓際の席に後頭部に両手を回して座っているのが少年服を着、野球帽を被った短髪の１４歳の少女。名前は藤堂亜綺羅（とうどうアキラ）。通称アキラ。全身から黒いコードのような不気味な触手を大量に生やすという特異能力を持っていたために実の両親からも忌み嫌われ、捨てられる。そのため、自分が認めた仲間以外に心を許さず、人や世界を卑下している。

彼女の隣にモーなんとかという偉大な音楽家の伝記を読み、優雅に腰掛けているのがネクタイの掛かっていない黒のスーツを着た１

５歳の短髪の少女、相楽椿（さがらツバキ）。通称ツバキ。態度も言葉遣いも丁寧で今時珍しい紳士的な人間だが、指を鳴らすだけでクリスタルのような物体で人や物を封じ込め、爆破させる異能力を持つ。人命救助のために人々の前でその力を見せたことが誤解を生み出し、激しく非難を浴びせられ、人間不信となる。そのため、今では本当に心を打ち解けられるのは彼女が信じた仲間のみである。

さらにその隣でフランス人形を抱いている金髪の黒いゴスロリ風の１４歳の少女が法月華音（ほうづきカノン）。通称カノン。季節や場所に関係なく、多種多様の花を咲かせる能力の持ち主で、当初は人を喜ばせるために力を披露したのだが、それがかえって人々から化け物扱いを受け、同じく人間不信となり、無口のうえに無表情・無感動・無愛想の「三無主義」に変わる。仲間の前でもその表情を崩したことはほとんどない。

彼女の前の座席に緊張気味に座っているのが常にビニールのレインコートを着た、藍色のセミロングの１３歳の少女、折部鈴（おりべスズ）。通称スズ。実は帯電体質で、激情に駆られると身体から強力な放電が迸る。その体質のせいで多くの人を傷つけ、忌み嫌われた彼女は人と世界に居場所のない恐怖を抱く。そのせいか、おどおどとした臆病な性格は今も治っていない。

その隣に座っているのが水に浮かぶ蓮華の絵が描かれた黒い和服のおかっぱの１７歳の少女。名前は流禅師美智（りゅうぜんじミチ）。通称ミチ。水を生み出し、操る異能力の持ち主で、過去妹ともに曲芸を披露しながら旅をしていたが、力が生まれもってのものだと知られたために人々から無視され、挙句の果てに最愛の妹を病で亡くし、世界に深い絶望を抱く。

さらにその隣に堂々と座っているのが憲兵を印象づける衣装を纏い、黒の長髪を後ろで縛った１８歳の背の高い少女、宇都宮菊（うつのみやキク）。通称キク。相手の心を見透かす千里眼とサーベルを使った高度な剣術の持ち主で、過去にはある大富豪の主人の騎士（ナイト）を務めていた。しかし、主人とこのうえ親しくしているのが嫉妬深い夫人の怒りを買っ

て罠に嵌り、誤って主人に刃を向けたことから罪悪感に苛(さいな)まれて館から去り、方々を旅するようになる。
　そして、一番前の座席に座り、肘掛を利用して退屈そうな表情で頬杖を着いている黒い制服を着、右目を眼帯で隠した１７歳の長髪の少女の名は、雨牙真夜(アマキマヤ)。もうひとつの名を、闇のプリキュア、キュアリベリオン。かつて世界を滅ぼそうと実行した雨牙真夜(キュアセイバー)の忘れ形見である憎悪からさらに多の怨念が集結した結果誕生し、且つヤミを除く七人の少女たち「マイナス七人衆」を率いて各国を滅ぼしながら全世界の破壊だけを目標に歩んでいる史上最悪最凶の戦士。つい八時間前にＲ国を地獄絵図に変えた彼女は、今乗務しているこのスペースホークＡ(エース)で次の目的地を示して移動している最中だった。
　が、表情にこそ出さなかったものの、真夜は内心焦りが募っていた。各国を地獄に変え、次々と滅ぼしているが、このようなやり方ではおそらく全世界の破壊に繋がることももう一人の自分に復讐を果たすこともまだまだ遠い未来(さき)になるに違いない。かといって、自身の中に眠る絶大な闇の力を容易く解放することもできない。
　もし、そんなことをしてしまったら、彼女たちの命を私が預かった意味がない。
　だから、彼女は危険な封印をギリギリまで解かずになお且つできるだけ早く世界と自分に復讐を果たさなければならなかった。だが、それも容易いことではないというのも百も承知。何か打つ手はないものかと悩むが、何も思いつかず、考えるのに疲れた真夜は思考を停止させてふと、窓から機外を覗いた。
「？・・・・何これ？」
　真夜の声に七人衆全員が反応して窓を見やる。機体はいつの間にか濃霧に包まれ、完全に閉じ込められていた。
「おいっ、何なんだよこの霧！？」
　下も上も少しも見えない白銀の世界にアキラが叫ぶ。すると、人の声が二重三重に重なったような声が突然機内に響いた。
「オジョウサマ、コノキリハ、ツヨイデンジハガフクマレテイマス。

ネンノタメ、シートベルトノソウチャクヲオネガイシマス」
人工頭脳も搭載したスペースホークA(エース)のいかにもな機械音声に真夜は少し不機嫌そうに表情を歪めると、
「お嬢様はやめてくれない？機械の声で呼ばれると正直反吐が出るわ」
「モウシワケゴザイマセン。シカシイマ、キョウダイナデンジハノセッキンヲカンジマス。アンゼンノタメニシートベルトヲ・・ギャギャッ！？」
突如、濃霧から発生した強力な電磁波が機体に激突し、宇宙船自体が悲鳴をあげる。大きく揺れる機内。衝撃で壁の一部が剥がれるように破壊される。電磁波はよりにもよって乗員全員が座るこの空間に巨大な穴を空けた。途端に凄まじい強風が吸い込まんと全員を襲う。みなはシートベルトを締め、強風に耐え始めた。
「コノキタイハ、デンジハノショーゲキニヨリ、ヤムヲエズフジチャクイタシマス。ショーゲキニソナエ、シートベルトハケッシテハズサナイデクダサイ。クリカエシマス。コノキタイハ・・・」
強風の威力に機内が滅茶苦茶にさらされる中、機械音声が聞こえるもすぐに掻き消される。
「えっ・・や・・きゃあああああああああああっ！？」
そして、遂に犠牲者が出た。あまりの強風にシートベルトが耐えられなくなって切断され、スズがあっという間に吸い込まれて機外に放り出されたのである。自分たちより年下の少女が最初の犠牲(リタイア)になったことに、ほとんど全員が驚愕の声をあげる。が、次の瞬間、彼女たちはさらに「驚愕」を目にした。
「・・ちっ」
軽く舌打ちが聞こえたと思うと、真夜が即座にシートベルトを解除し、自ら穴に飛び込んだのである。
「なっ、キュアリベリオン！？」
主(あるじ)の突然の行動に誰もが動けず、唖然とする。だが、真夜は機外に一歩を踏み出した途端、一瞬にして彼女たちの視界から消えた。

直後に機体が上下を激しく繰り返し、震動が伝わる。みな必死にシートベルトに命を預け、肘掛を両手で強く?んだ。
「キュアリベリオンとスズはどうするんですか！？」
「後だ！今は私たちが一人として死者を出さず、生き残ることが先決だ！」
ツバキの問いにキクが舌を噛まぬように気をつけて応答する。
激しい震動に耐えながら、全員次に来るであろう事態に万全の姿勢で備えた。
数分後、機体は海面に激突した。

「・・なさい、スズ。起きなさい！」
頬を軽くはたかれ、スズは両目を開いた。すぐ視界に無表情な真夜の顔が見えた。
「え・・・キュアリベリオン？あ、あれ？」
上体を急いで起こし、周囲を見やる。周辺はまだ霧が深く立ち籠っていたが、どうやら砂浜のようだ。すぐ目の前には波が軽い音を立てながら寄せたり戻ったりしている。
確か、私はあのスペースホークから外に放り出されたんじゃなかったっけ？
ふと、真夜に視線を移すと、彼女の制服と長髪が少々濡れていることに気づいた。
「まさか、キュアリベリオン・・・？」
真夜は、ふぅ、と軽く息を吐いた。
「全く、帯電体質のあなたが海にドッボーンってなったら、いくら私でも怪我じゃ済まないわよ・・・・・お礼の言葉は？」
「あ・・ありがとうございます。・・・あの、ここはどこですか？」
「後ろを見なさい」
言われてスズは背後を振り返る。霧で視界はほとんど遮られるが、わずかに見える景色がスズに解答へと導いた。

アマゾンのジャングルのような深い森。色鮮やかで濃い緑が誘っている。
前は海、後ろはジャングルとくれば、ここはもう・・・。
「そうよ」
真夜が濡れた黒髪を片手でさらして言った。
「ここは・・島よ」

# 遭遇

ちゃぷ、ちゃぷ・・・。

撃墜した宇宙船から七人の少女たちが降りて、浅い海面を進む。自動人形（オートマトン）のヤミ以外はみな、幸い軽傷で済んだが、傷口にちょっとでも海水が沁みると痛い。しかし、海面が浅いのならきっと陸地は近いはずと確信を得てみな濃霧が漂う中を、前へ前へと目指した。

やがて視界に浜辺が見え、全員が陸地に到着する。まずはヨツバがわずかに持ってきた治療薬で全員の傷口を塞いだ。

「ってーな、ちっとは優しくしろよ」

「これくらいの怪我、どうってことない！」

傷が沁みた痛感で文句を言ったアキラだが、ヨツバはぐるぐるメガネの度を変えることなく治療を済ませると、最後に傷口をぺしっと叩いた。

「っってぇーっ！何すんだよ、鬼か！」

「凶悪科学者（マッドサイエンティスト）よ！」

「仲いいですね、あのふたり♪」

「・・・眼科、行ったほうがいい」

ヨツバとアキラの遣り取りをヤミから治療を受けながら見ていたツバキが涼しげな笑みで呟いたが、同じくふたりの遣り取りを無表情のまま見つめていたカノンはぼそっと毒舌を吐いた。

「ヨツバ、スペースホークはどうなんだ？」

アキラから離れたヨツバにキクが声をかける。ヨツバは今もなお濃霧に包まれている海を振り返ったが、すぐに彼女に向き直った。

「人工頭脳は健在ですから、すぐに自動点検・修理機能は働くでしょう。ただ、それが何日かかるかが問題なのですが・・」

「しばらくはこの島で厄介になるということか・・」

「キュアリベリオンは大丈夫でしょうか？スズのことも心配です」

「だったら任せてください。ヤミちゃん、あなたの力でキュアリベ

リオンの生存を確認して♪」
「了解シマシタ、ドクター」
ミチの心配に応えたヨツバがヤミに命じると、彼女は両目を閉じ、闇の力も加わった全機能を集中させた。人間の倍以上の視力、聴力、嗅力さらには第六感が働いて、真夜の放つ闇の力を的確に捉える。数分後、強大な闇の力を捕捉(キャッチ)したヤミは人形とは思えない透明の裸眼を開いた。
「タッタ今、強大ナ闇ノ力ヲ島内ニテ確認シマシタ。私ガヨク知ル闇ノエネルギーデス。キュアリベリオンニ違イアリマセン。スズモ一緒デショウ」
「本当か？」
「ハイ」
「さっすが私のヤミちゃん！ほんっっっと、あなたは優秀な自動人形(トン)ね！」
己の開発した人形の完璧度に感激し、賞賛を贈るヨツバ。しかし、ヤミは話を続けた。
「タダ・・・少シ気ニカカルコトガアリマス」
「気にかかること？何？」
「・・キュアリベリオントハ別ノ、強大デ邪悪ナ力モ島内デ感ジマシタ。ソレモ危険ナ・・」
「どういうこと？」
「マダ分カリマセン・・・」
「だったらすぐ行くぞ、キュアリベリオンの元に」
キクが憲帽のつばを摘まんで目の前の深森に体勢を変え、先頭に立った。腰に差したサーベルの刀身がわずかに抜かれている。みなが彼女の背中に注目していると、首をねじり、振り返った彼女は全員に伝えた。
「私たちは私たちの願いを叶えるためにキュアリベリオンとともに進んでいくと決めたはずだ。もし、キュアリベリオンの身に危険が迫っているのなら、私たちがその危険を払い除けねばならない。全

ては私たちの願いと、混沌とした世界を『なかったこと』にするために、私たちはキュアリベリオンを失うわけにはいかない。・・・・そうだろう？」

「「「「「！・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

キクの言葉に「再確認」という衝撃が全員の頭を殴る。

確かに、自分たちにはキュアリベリオンを信じて預けた願いがある。それを果たさぬまま、主（あるじ）を失うわけにはいかない。彼女だけが、途方もない絶望に暮れていた自分たちを救い、願いを叶えると約束を交わしてくれた唯一の“希望”なのだから。

自分たちに、安らかな永遠を与えてくれるために。

混沌に満ちた世界を「無」に戻してくれるために。

今、その“希望”を失うわけにはいかない。

彼女たちはキクの言葉に力強くうなずくと、深森へと一歩を踏み出した。

約一時間浪費して、やっとのこさで森を抜け出した真夜とスズを次に待っていたのは町だった。平屋建ての家、低い塀の町並み、殺伐とした灰色の壁を真夜は知っている。まだ雨牙真夜が憎悪の闇に染まる前、両親とともに世界各国を旅していた時に見た貧困差の激しいスラム街に似ていた。

だが、そんなスラム街でも多くの人が苦しみながらも生活をしていた。しかし、ふたりの前に存在する町には人が暮らしている様子はない。それどころか、どこもかしこも無人で、ゴーストタウンと化していた。町は残り、人だけがきれいさっぱり消えてしまったかのようで、どことなく不気味さも漂わせていた。

みな、この町を捨て、どこかへと移り住んだのかしら・・・？

だとしたら風雨をしのげても、食糧は期待できそうにないと真夜は思った。

ふと、真夜の黒い瞳に何かが映った。

最初は何かの見間違いかと思ったが、すぐにそうではないと気づいた。
人影が一体、よろめくような動きで真夜とスズのふたりに接近している。外見は「人」で、性別は男性のようだが、表情が明らかになった途端に真夜は確信を持った。「これ」は人じゃないと。
意思のない目。血の気が失せた顔。だらしなく開けた口元にや衣服に赤黒に付いているのは何のシミだろうか。とにかく「これ」は人じゃない。こんな、生きているかも忘れた人など・・・。真夜がそこまで思った時、
「「！」」
突然、「これ」がよろめくような動きをやめ、ふたりに襲いかかってきた。
「ちっ・・」
二度目の舌打ちをし、すぐに隣の１３歳の少女の身体を片手で弾く。きゃっ、とスズは小さく悲鳴をあげて背中から倒れたが、これで少女は安全地帯に逃れた。真夜はすぐに前方に振り返り、「これ」と真っ向からぶつかった。
「くっ・・！」
力が強く、押し倒される。「これ」は口を大きく開いて、触れるのも痛そうな牙を曝け出し、噛みつかんばかりの勢いで真夜の皮膚を求めて攻めまくる。だが真夜は敵の毒牙を回避し、腹部に膝蹴りを放って吹っ飛ばした。「これ」は一軒家の壁に衝突し、地面に転倒した衝撃で土煙を上げる。だが効いていないのかすぐに立ち上がり、再び牙を曝して唸り声をあげ、真夜に駆け出した。
「・・調子に乗るんじゃないわよ、人間風情が」
いい加減相手にするのも疲れてきて、真夜は再び接近してくる「これ」に一瞬で懐に潜った。唾を吐きながら肩に牙を食い込もうとした「これ」の胸を目がけて・・・・右手で一瞬で貫いた。
ぴんと伸ばした手刀の尖端が、刃物となって敵の肺と心臓を掻き潰した。左手を腹部に当て、真夜は肘まで埋まった血まみれの右腕

をナイフのように抜き取った。　即座に、どっ、と倒れる「これ」。ぼた、ぼた、と赤黒の血が地面に点々とこぼれる。真夜は紅の右腕を眺めてため息を吐いた。

あ～あ、このシミは取れそうにないな・・・。

何か拭く物はないかとポケットに左手を突っ込むと、隠れて見ていたスズの叫ぶ声が聞こえた。

「キュアリベリオン、後ろ！」

「あ？」

途端、背後に気配を感じ、即座に飛び退く。

倒したはずの「これ」がいつのまにか背後に立ち、あと一歩のところで真夜の首筋に毒牙を食い込もうとしていた。

「なぜ？肺も心臓も潰したはずなのに・・・・」

疑問に思うもすぐに解答が脳内に現れ、真夜は再びその血の気のない表情を冷たく見ながら呟いた。

「そうか・・・・おまえ、生ける屍（アンデッド）か」

アンデッド。吸血鬼などに血を吸われて死んだ死体が呪いによって動き回っては人を襲う最恐の傭兵。頭を潰さない限り、倒しても倒しても何度でも蘇る。ようやく敵の正体に気づいた真夜だが、不死身の相手を前にしてもひるむどころかさらに侮蔑するように呪詛（じゅそ）を吐いた。

「死に損ないが。道理で内臓潰しても平気なわけか・・・でもね」

復活したアンデッドが再び牙と爪を煌かせて接近を試みる。だがその爪が、牙が真夜の皮膚を傷つけるよりもずっと早く、真夜は右足を閃光と化させた。

蹴り。

空手でいう上段廻し蹴りが人間の肉眼では捉えられぬ速度でアンデッドの首に吸い込まれた。

カキーンッ！

まるで野球漫画の擬音が聞こえそうなくらい、アンデッドの頭がホームランボールのように高く飛び、緩やかな弧を描いたと思った

ら、そのまま濃霧に消えていった。瞬時に頭部が消えた箇所から大量の血飛沫(ちしぶき)が噴いて、首なし死体が再び倒れる。けれども真夜は光の宿っていない闇(くら)い瞳で黒の長髪をさらしながら死体を見下ろすと、

「頭と胴が離れていれば、さすがにもう復活できまい・・」

と一言だけ呟いて興味を失ったように目を逸らし、塀に隠れていたスズに視線を移した。

「スズ、怪我はしてない？」

「え？あ・・大丈夫です」

「そう。だったら、すぐこの町から出るわよ。まさか、あれ一体しかいないわけが・・！・・・・ちっ、遅かったか」

スズに手を伸ばそうとして、真夜は本日三度目の舌打ちをする。次の瞬間、町の至る場所から異様な気配がどっと押し寄せ、数十のアンデッドが続々と姿を現す。

「キュアリベリオン・・・・！」

「さすがにこれはキツイわね・・」

数十の生ける屍の御登場に、スズは震えあがり、とうとう真夜の身体に抱きつく。多勢に無勢のうえ、頭以外は攻撃しても何度でも蘇ってくる敵に真夜は懐から一本の漆塗りの美しい口紅を取り出した。

こうなったら、やむをえない。せめてスズだけは守らないと・・・・！

蓋(キャップ)を開け、口紅を高く掲げる。

そして数十のアンデッドを目の前にして、口に出そうとした時。

ドンッ！ドドドドンッッ！！

突如、アンデッドたちの体に次々と数本の矢が突き刺さった。ふたりがハッとなると、矢の尖端(せんたん)に灯してあった火がアンデッドの体に燃え移り、一瞬にして炎に包み込む。アンデッドたちは次々に喘ぎ声を出しながら犠牲になっていく。真夜とスズは突然何が起こったのか分からず、しばし呆然となっていたが、

「！・・・・」

手を?まれ、我に返った。
?まれた手の先には灰色の中東風の服装を着、被り物で顔を隠し、機関銃を背負った誰かが唯一明かしている黒い瞳で真夜に振り返っていた。身長は真夜と同じぐらいか?
「あなた・・・?」
「早く。今のうちにこっちへ!」
誰?と聞く暇もなく、その誰かは女性の声で真夜の手を引っ張って走り出す。
「ちょ、ちょっと・・!」
真夜とスズは訳が分からないまま、彼女に連れて行かれた。

# 反組織

シャーッ、と筒状の1ミリ程度の数点の穴から43℃の熱湯が真夜の黒髪に、肌に浴びせられていく。ハンドソープを右腕に滑らせると、赤黒く変色していた血がみるみる消えていった。

ノズルを反対に回し、真夜はシャワーを止めた。バスタオルで全身を拭き、白地のタオルで顔も拭き終えた真夜は、はぁー・・・っ、とさっぱりした吐息後、もとの黒い制服に着服する。

「どうだった？」

「どうも。おかげで生き返ったわ」

中東風の被り物を脱ぎ、栗色の長髪と涼しげな緑の瞳といった端正な素顔を露にした少女の問いにシャワー室から出た真夜は返答した。少女の隣にはスズが座っている。

少女に手を引っ張られ、ふたりが来た場所は廃墟と化した教会だった。内部の前面中央に説教台、向かって右に聖母マリア像、左に腐敗化してもう音も出ないであろうオルガンが置かれている。過去に賛美歌を斉唱する時の伴奏に使われていたのだろう。真ん中の通路を隔て、左右に三人がけの長椅子が並べられ、その長椅子に人が老人子供合わせて30から40座っていた。ほとんどが少女と同じ中東風の衣装を纏い、銃火器や剣、弓矢といった武器を抱え、一言も喋らずに幾分か緊張気味でいる。壁際には腕や足、片目に包帯を巻いた男たちが寝転ぶなりして休んでいた。これだけで真夜は彼らがさきほどのアンデッドに抵抗している連中だと理解した。

にしても、教会か・・・。

真夜はまだ赤ん坊のイエスを抱いているマリアの像を見上げる。怨念の集合体として蘇ったものの、記憶を失った彼女はとある国の教会にて保護され、しばしそこで暮らしていた。シスターも教会を訪れる人たちもみな親切で、彼女にとって唯一の幸せな「時間」だった。だが、それも長くは続かず、記憶を取り戻し、死神として

覚醒した真夜は自らその国を去った。
まさか、またこんな場所に来るとは、これも自ら死神と呼称している所以なのか・・・。
「そういえば自己紹介してなかったね？」
「は？」
突然声をかけられ、真夜はマリア像から少女に振り向く。少女は微笑を向けて真夜に言った。
「私はウェンディ。こう見えても職業は医者（ドクター）なの。あなたは？」
「・・言う必要があるの？」
「知り合ってしまった以上、名前はお互い知っておいて損はないと思うよ」
「・・・雨牙真夜（アマキマヤ）。こっちはスズ」
「妹？」
「仲間よ。それよりも・・・」
真夜は窓から外を覗いた。館外では火矢に撃たれたアンデッドの残党が炎の中に消えていった。
「あのアンデッドは何？なんであんなのが島をうろついているの？」
すると、微笑んでいたウェンディの表情が翳った。
「ノヴァの仕業なの」
「ノヴァ？誰？」
「この島を支配する黒魔女よ。ノヴァは突然このトモス島にやって来て、領主だった人を簡単に殺して島に住みついたの。そして、怪しげな黒魔術で島民を老人子供関係なくさらっては生体実験と言っては殺し、次々に生ける屍（アンデッド）として蘇らせ、島民を襲っているのよ。アンデッドに噛まれた人も徐々に体が毒に侵されて死に、アンデッドになる。・・・この島はノヴァがやってくる前は千人もの島民がいたらしいけど、みんな次々にノヴァやアンデッドに殺されて、今ここにいるので全部なの」
「『らしい』・・？ウェンディ、あなたはこの島の住人じゃないの？」

ウェンディは首を縦に振った。
「うん。私もあなたと同じ。この島には派遣医師として来たんだけど、すでにノヴァに支配されてて、ここにいるみんなと戦っているの」
「今じゃ、ウェンディが俺たちの“希望”なんだ」
背後から声が聞こえ、ふたりは振り向いた。まだ12、13歳程度の赤毛の少年が拳銃を抱えて立っていた。
「紹介するわね。この子はジャン」
「この島に住んでいた医者（ドクター）は俺たちを見捨てて逃げようとしたんだ。でも一番にアンデッドに殺されてさ、俺らには怪我人を治すことができなかったんだ。でも、ウェンディのおかげでさ、怪我人も病人も治してくれて、みんな感謝してるんだ。それにウェンディは医者なのに凄く勇敢なんだ。今までもさ、身を挺してまで人を助けてくれたことがあって、もしかしたらウェンディは絶望の恐怖から島のみんなを救うために現れた希望かもしれないって思って、俺たちの主導者（リーダー）にしようと決めたんだ！」
「なるほど。反抵抗組織（レジスタンス）ってわけね」
「やめてよ、ジャン。私はそう評価されるほどの人間じゃない・・」
ジャンに絶賛されても表情から翳りが消えないウェンディは力なく首を振った。
「実際救えなかった人や私の代わりに犠牲になった人のほうが多いよ。事実、私が不甲斐ないばかりに島民ももうこれだけしかなくなっちゃったんだから・・」
「で、でも、ウェンディがいなかったら、俺たちはとっくに死んでいたし、戦うことすらできなかったと思うぜ。それに、死んだみんなだって、ウェンディに希望を託して逝ったから、きっと幸せだったはずだ。少なくとも、恐怖や絶望なんて少しもなかったと思うし・・」
「あの・・ちょっと、聞いてもいいですか？」
ずっと黙っていたスズがおずおずと手を挙げた。ジャンは彼女に

目を移した。
「何だよ？」
「あの・・どうして逃げないんですか？」
「・・・は？」
「だ、だって、怖いのなら逃げればいいと思います。いくら島中がアンデッドだらけでもあなたたちは武器は持っていますし、逃げる方法はいくらでもあるんじゃないかと・・・」
「そうね。で、逃げた後に島ごと燃やしたりしてなくしてしまえば、魔女もアンデッドもいなくなって万々歳じゃない？」
「そんなことできるかっっ！！」
怒声が館内に轟いた。
スズは、ひっ、と両目を瞑り、真夜も口を噤む。中央の通路に３０代後半の無精髭の男が額に青筋が浮かび、もの凄い剣幕でふたりを睨んでいた。
「余所者がよくも好き放題言いやがって！俺たちだって、できりゃ逃げてえさ。けどな、たとえアンデッドがうろつこうがここは俺たちの島なんだ！それにアンデッドのやつらももとは一緒に時を過ごした仲間なんだ！俺たちの島に勝手に居座ったうえに仲間を次々に殺してはあんな化け物にしやがった魔女を俺たちは許さねえ！魔女のやつに一泡吹かせるまで俺たちは最後まで戦ってやるんだ！」
「アンデッドの中には私たちの家族や恋人、友達までいるのよ！みんなを見捨てて、私たちだけが逃げるわけにはいかないじゃないっ！」
無精髭の男に続いて２０過ぎの伊達メガネを掛けた女性も叫ぶ。
「逃げるなんて、そんな臆病なことできるかっ！大体逃げようにも逃げれねえんだよっ！」
「？・・・どういうこと？」
耳にピアスをした茶髪の男の言葉に真夜が反応すると、ウェンディが
「マヤ、あなたも島の外から来たのなら見たでしょ？あの霧を。あ

の霧は自然現象じゃない。ノヴァの魔術が生んだものなの。霧は島の周りを包囲していて、逃げようとしても堂々巡りでまたもとの海岸に戻ってしまう仕組みになってるのよ」
「・・・何？」
「だから逃げても無駄なの。ノヴァを倒さない限り、島から一生出られることはない」
「それじゃあ、私たちも・・？」
「・・・気の毒としか言えないよ」
　刹那、真夜は血相を変えた。歯噛みし、眼光も血走っている。握り締めた拳が小刻みに震えていることにスズは気づき、恐怖した。
「・・・ウェンディ、そのノヴァという魔女は今どこにいる？」
「え？あの城に住んでいるらしいけれど・・・」
　ウェンディが窓から指差した方向、町から少し離れた山里に壁面が黒で統一されたいかにも洋風な城が尖塔を天に向けてそびえている。そう大きくはないが小さくもない。もし今雷雲が漂っていて、稲光がピカッとなったら、それだけでダークファンタジーの世界だ。だが、そんな空想を抱いている余裕など、今の真夜には、ない。
　宇宙船がおかしくなったのもおまえの仕業か、魔女！
　訳が分からずにいきなり喧嘩を売り、しかも常に死と隣り合わせの監獄に閉じ込めるというオイタを侵したふざけた看守に少女の中に存在する死神が目を覚まし、狩るべき獲物と判断した。
　真夜はすぐさま扉に向かい、人々の中を突き進んでいく。
「ちょ、ちょっと待って。マヤ、どうしたの？」
　取っ手に手を触れようとした真夜の背中にウェンディが聞く。真夜は振り返らぬまま返事した。
「決まってる。あなたたちが戦っているという魔女を殺す！」
「なっ！？待って！少し冷静になって！私たちもノヴァを倒したいけど、そう簡単にはいかないよ！ここは何か作戦を立てて・・」
「・・・ウェンディ、あなた何を勘違いしているの？」
「え・・・？」

真夜はここでようやく振り返り、冷酷な表情で彼女を見据えた。
「私は一言も『一緒に戦う』なんて言ってないわよ」
「なっ・・・！？」
「私はただその魔女が気に入らないから殺りに行く・・・ただそれだけなのよ。作戦なんて悠長に考えている暇なんかないわ。さっと行ってきて、サクッと殺してきたら、すぐにこの島を出て行く。死にたくなかったら、あなたたちはここでおとなしくしてなさいよ」
「何言ってるんだ！？狂ってんのかおまえは！？おまえのほうが自殺行為じゃねえかっ！！」
さきほどの無精髭の男が怒鳴ったが、真夜は無視し、再び扉に触れようとするが、
「た、大変だあッ！外のやつら、みんな殺られた！！」
「何だって！？」
「そんな・・・！？」
館外で残党と応戦していた島民が先に外から扉を開けて内部に入り、全員に知らせた。報告に全員衝撃で動揺し、緊張と恐怖、そして幾分かの不安が混じる。
「ウェンディ、どうする？」
装弾を入れて拳銃をセットしたジャンが聞く。ウェンディは即座に扉を数センチ開けて外の状況を見た。残り十体ほどのアンデッドたちが血と毒気を吐き、喘ぎながら一歩二歩と教会に近づいてくる。島民に残された最後の希望は背中に背負っていた機関銃の装弾を確かめて、全員に伝えた。
「アンデッドは約十体よ。頭だけを狙って、連射すればきっと生き残れ・・・」
だが。
「ふぅん、たった十体なんだ？じゃあ楽勝ね」
ギィィィィ・・・・・。
教会の扉を開け、真夜が外に出た。
「なっ、バカ！マヤ、戻って！！」

無謀な行為にウェンディをはじめ、全員が驚愕する。いや、スズだけが表情を変えなかった。彼女には分かっていた。今から真夜が何をしようとしているのかを。

突如教会から出てきた一人の少女に、十体ものアンデッドは歩行を止めたが、それも暫時のことですぐに数本の牙をさらし、毒気と血を吐いて咆哮をあげる。彼らからすれば、少女は自分たちに対する恐怖を少しも知らない哀れで、あるいは間抜けな獲物（エサ）に見えたかもしれない。数々の咆哮を轟かすと、我先にと少女を狙って毒牙を飛ばし、走り出した。

だが、アンデッドたちが走り出すよりもずっと、ずっと早く、少女は懐から漆塗りの黒い口紅を取り出した。蓋（キャップ）を開けて頭上に高く掲げる。

それがどういう意図だったのか、すでに死んでいるアンデッドたちに思案する脳味噌はない。

少女は迫り来るアンデッドたちを前にし、瞼（まぶた）を閉じると、呟くようにその言葉を口にした。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

## 殺戮

真夜がその言葉を口にした刹那、一同の目に信じられないものが映った。

口紅から暗黒の闇が泥水の如く大量に溢れ出たのである。闇は左目を閉じている真夜の全身を隈なく包み込み、完全に姿を隠した。突如出現した闇にさしものアンデッドたちも反応し、口を半開きのままとろんとした眼窩（がんか）を剥き出しにして歩行を止める。

闇に包まれた真夜は全身を投げ出して流れに任せ、堕ちていく。堕ちながら真夜は全身に無数の黒いアゲハ蝶を集めていき、衣装へ変えていく。

襟の立った二の腕までの袖の漆黒の服とその下の無地の白いシャツ。

首筋にぞんざいに掛けられた、締まっていないネクタイ。

蛇眼を連想させる腹部の紋様。

その下の黒と白のチェックの短いスカート。

両手・両足に肘まで届く手袋と膝までの高さもあるブーツ。さらに右腕に三本の鋼鉄製の鉤爪が装備される。

最後に髪を掻きあげると、二つの黒いリボンが結ばれてツインテールに変わった。

闇が掻き消され、姿を大きく変えた真夜は眼帯を付けていない左目の瞼をそっと開け、眼前のアンデッドたちを見据えると、

「全てを無へ誘（いざな）う漆黒の堕天使、キュアリベリオン！」

名乗りをあげ、背後から無数の黒蝶を飛び散らせた。

「キュアリベリオン・・・・？」

「まさか・・・・プリキュア？」

「あんな娘が・・・・？」

ウェンディをはじめ、教会内の島民たちが次々に驚きの声をあげる。島民たちもかの伝説の戦士の存在を知っていた。そして、その

戦士が世界を守るために現れるのだということも。

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」

島民たちは目の前に現れたキュアリベリオンというプリキュアの登場になぜか心から歓喜できなかった。彼らがプリキュアの姿を生で見るのはこれが初めてだったたゆえに感動や感激の実感がうまく湧かなかったのもあるだろう。だが、それ以上にキュアリベリオンから発せられるオーラに圧倒され、全身に震えが来ていたのだ。

その震えの正体は「歓喜」ではなく「恐怖」。

そのオーラの正体は「光」ではなく「闇」。

一筋の光さえも射すことを許さない、まるで底なし沼のような深い深い闇が島民たちにも少しずつ伝わり、彼らの中の危険信号が警告を発し続けている。この女、本当にプリキュアなのかと。自分たちを救うために現れたのかと。

島民たちが不信と警戒心を露にしているのを知ってか知らずか、キュアリベリオンに変身した真夜は右腕の鉤爪を手前に曝し、尖端を煌かせた。それを「かかって来い」と挑発を発していたかどうかは知らないが、動きを止めていた十体のアンデッドが瞬時に走り出し、爪と毒牙、棍棒や剣、鉛パイプを曝して一斉襲撃を仕掛ける。

「消えろ、命が・・」

リベリオンは早速毒牙を放とうとした最初の一体の襲撃を軽く避けると。

ピピピッ。

鉤爪でその顔面に赤黒い平行線を三本走らせた。次の瞬間、平行線が走った顔が三つの輪切りになって崩壊し、そのまま横様に倒れ伏す。倒れた一体が持っていた日本刀をリベリオンは左手で?むと、即座に振り返って刀身を閃かせ、背後に接近していた二体の両腕を切断した。

どばっ。

鮮血がロケット花火の炎の如く噴き出し、仲間の足元を激しく濡

らす。悲鳴なのか腕を斬り裂かれた二体が激しい咆哮をあげたと思ったら、一閃で縦に裂けた。理科室に飾られている人体模型の標本のように切断面が披露され、大量の血と内臓を撒き散らしながら、二体のアンデッドは左右へ両開きになって倒れる。二体を唐竹割りで倒したリベリオンはさらにもう一体を横薙ぎに払い、首を刎ねた。ぽとっ、と胴から離れてもなお喘ぎ声をやめない頭をリベリオンはブーツを履いた片足を挙げると、べちゃっ、とヒールでそのまま踏み潰した。

さすがに三体を斬り倒し、鮮血に染まって斬れ味が悪くなってきた刀身をひょいと捨てたが、リベリオンの左目は少しも冷酷さを失っていない。残る六体のうち一体の眼前に一瞬で移動すると、その顔を左手で鷲？みにし、

ぶしゅうううう・・・・ぐちゅっ！

素手で握り潰し、破裂させた。

残り五体。リベリオンは今度は両掌に紫の電流が迸る黒の光球を召喚し、

「リベリオン・デストロイド・ボール」

標的を二体、剛速球で投げる。命中。標的は二体とも頭部が爆破し、仰向けに倒れた。リベリオンはさらに一体を片手で？み、

「飛べ」

上空へ、力一杯に放り投げる。咆哮を響かせながらぐんぐんぐんぐん上昇し、点になっていくアンデッドをリベリオンは真下から狙い、光球を撃った。命中。トモス島上空に血と肉の花火が開いた。まさに木っ端微塵。ぽつぽつと、赤黒の雨がしばし降る。原型の一つさえ残ることなく、不死身の傭兵はあっけなく空に消えた。

残り二体。鉛パイプを振りかざした一体を狙い、凄まじい邪気を両腕に宿らせた。

「リベリオン・デモンズ・カッター」

両腕から無数の邪気の刃が飛び、アンデッドの体を四方八方から斬り刻む。刃が消えた時には手首足首、頭、胴が一瞬で無数の肉片

となって散った。
残り一体。唾を吐き散らしながら襲ってきた最後の一体にリベリオンは肉片とともに飛散した鉛パイプを拾い、両端を握り、ぎゅいん、とU字型に曲げると、瞬時にアンデッドの背後に移動し、その首に鉛パイプを引っ掛けて剛力で両端を交差するように締めた。
ボキ。ボキボキッ・・・・。
巻きついて食い込む鉛にアンデッドは首を掻き毟るように手をやったが、剛力に首骨を破壊され、だらんと体が崩れた。リベリオンはパイプの両端から手を離し、縊(くび)り殺した最後の一体の頭もヒールで踏みにじるように潰した。
皆殺し。
一人残らず、一匹残らず。
まるでたかるハエや蚊を追い払うように。
退屈そうに、面倒そうに。
その表情は冷たく、静かに、残酷に・・・・。
躊躇うことなく。
顔や衣服の至る箇所に返り血を浴びた彼女だが、足元から再び暗黒の闇が出現して身体を覆い隠した。闇はすぐに消され、リベリオンの姿が再び現れたと思ったら、もうその身体には赤黒の液体は綺麗さっぱりになくなっていた。
たった一人のプリキュアによる、信じられない凶行に、ウェンディたちは表情が眉一つ微動できなかった。
死神。
それが最初に抱かせた島民たちの、彼女の第一印象だった。

漆黒に統一された城。
もとは前領主が暮らしていた建造物の一室に、魔女・ノヴァは目の前の水晶玉を通して全て見ていた。水晶にはたった今、十体のアンデッドを容易に血祭りにあげたキュアリベリオンの姿が映し出さ

れている。
「キュアリベリオン・・・闇のプリキュア・・・面白い」
ノヴァは口角を上げて妖艶に微笑むと、水晶から映像を消して立ち上がり、壁に飾られていた黒い巨鎌に手を触れた。

## 魔女ノヴァ

「き・・・貴様あッ！！」
生ける屍（アンデッド）たちを容易く殺戮し、なおかつ無表情のまま屍の上を佇むリベリオンに教会から無精髭の男が憤怒の形相で出てきて、彼女の胸倉を？む。男の突然の行為にさしものリベリオンも少々驚いて左目を瞬きさせた。
「痛い。離して」
「黙れ！何だあれは！？貴様は本当にプリキュアか！？あれじゃ、まるでまるで・・・っ！！」
「大量虐殺・・・・と言いたいの？」
「！？」
男が眼光を見開いたまま茫然とすると、リベリオンは胸倉を？んでいた男の両腕に手をやり、離した。
「言っておくけど、あなたたちの仲間はもうとっくに死んでいるんでしょ？あれは連中の姿を借りた化け物（クリーチャー）よ。私はただそいつらを倒しただけ。ただそれだけなのよ」
「だから・・・・だからって、あんな倒し方があるか！プリキュアなら、まだマシなやり方があるだろ！浄化するとか他の方法が・・っ！」
「浄化、ね。生憎だけど、私にそんな力はないわ。私の邪魔をする奴は容赦なく殺す・・・それが私流の殺（や）り方よ！」
途端にリベリオンの全身から強大な闇がオーラとなって発動する。闇を肌で感じ取った無精髭の男は恐怖し、瞬時に彼女から離れた。が、小石に躓（つまづ）き、転倒する。無様に背中を曝した男にリベリオンは左目で冷たく見下ろしながら、鉤爪を光らせてゆっくりと近づこうとした。
「や、やめて！」
まさか生きている島民をも殺すつもりか。今度はウェンディが教

会から急いで出てきて、リベリオンの前で両腕を広げて男を庇う。ウェンディの表情は嫌悪と恐怖が混じっていた。少しだけ身体が小刻みに震えている。リベリオンは足を止め、ふん、と鼻を鳴らした。

「殺しゃしないよ。・・・てか、この程度で怯えるくらいじゃ、殺す気も起きない」

リベリオンは男を庇うウェンディの傍らを通り過ぎようとして、しかし視線を感じた。

「誰ッ！？」

リベリオンの反応にウェンディと教会で待機している島民たちも一定方向を見据えた。やがて住宅の影から三メートルほどの巨大な肉体を持った男が現れる。彫りの深い面長の顔に、硬そうな長髪を両脇を垂らし、巨体を、引きずるほどの裾の長い灰色の衣服で纏っていた。真っ赤に開いた口からは毒気が吐かれ、牙が光っている。衣服には血のシミが点々と付いていた。

その巨体の背後から対照的に小柄の女性が姿を見せた。顔立ちの整った２０過ぎの女性で、金髪をポニーテールにして、灰色のロングコートを着ている。彼女も口から毒気を吐き、牙が生え、コートに血が付着していた。明らかにこのふたりは新手（アンデッド）の刺客だと一同は判断する。

だが、このふたりで終わりではなかった。女性のアンデッドの背後から、ぬっ、と三人目が現れたのである。それは漆黒のウェットスーツを着た女性だった。両肩に届く黒髪に金色の瞳。赤い唇が少しだけ口角を上げてほくそえむ。漆黒のスーツは非常に薄い生地で、よく見ると所々に墨字で書かれたような呪文字がびっしりとある。

「ノヴァだ！」

ウェンディの背後の無精髭の男が叫んだ。一同の表情に衝撃が走る。リベリオンは男の言葉に反応し、次にウェンディを見た。機関銃を即座に構え、汗が流れながらウェンディは緊張気味に立ち竦んでいた。

「おまえが・・・・ノヴァ？」

リベリオンがウェンディから黒衣の女性に振り返ると、彼女は妖しく微笑を浮かべながらうなずいた。
「いかにも。私こそがノヴァ。この島を支配し、不死身(アンデッド)の傭兵を生む黒魔女・・お会いできて光栄です、伝説の戦士プリキュア。もっとも、あなたは少し違うみたいですが・・」
ノヴァの言葉に、ピクリ、とリベリオンを眉を吊り上げる。
「霧で私の宇宙船を惑わし、操縦不能(コントロール)にしたのはあなたの仕業？」
「だとしたら、どうします？」
「すぐにあの忌々しい霧を消してもらうわ。生憎私はこんなちっぽけな島でお遊戯やってるほど暇じゃないんでね」
「・・・それは困りましたね。私としてはせっかく見つけた玩具をそう易々とあきらめたくはないんですが」
「玩具？・・・へえ」
シャッ、とリベリオンは右腕の鉤爪の尖端を煌かせ、ノヴァを見据えながら言った。
「何？あなた、私が欲しいわけ？」
「ええ、とっても。あなたほどの強い力の持ち主なら、きっと最凶の傭兵(アンデッド)ができそうでしてね♪」
「なるほどね。でもね、お断りするわ。私はもう人形にされるのは懲り懲りなんでね・・」
ふと、脳裏にかつての主(あるじ)に仕えていた記憶が蘇った。自分から全てを奪った世界を滅ぼすために一年間も服従したが、しかしその主(あるじ)こそが全ての元凶であり、自分を便利な人形として利用していたのだ。忌々しい記憶に激しい嫌悪を抱き、リベリオンは胸糞が悪くなる。
「どうしても私が欲しいなら、それなりの覚悟を見せなさいよ。私と本気(ガチ)で殺(や)り合うくらいの覚悟を、ね」
その台詞に、ノヴァはちょっと肩をすくめる。
「タダでいただこうなんて、そう恐れ多いことなど考えてはいなかったのですが、生憎私は戦闘は得意ではないんですの。・・・・で

すから、ご所望とあれば、このふたりがあなたのお相手を致しましょう。グロウリー！レベッカ！」
ノヴァに指名され、巨体アンデッドと金髪女性アンデッドが前に出る。この二体はさしずめノヴァの用心棒といったところか。さきほどの雑魚と比べ、全身から放たれる殺気が全然違う。これは少々歯応えがありそうだな、とリベリオンは思った。
「・・・ウェンディ、早く教会に戻って」
「え？」
「早く。ぐずぐずしていたら、巻き添えを食らうわよ」
「わ、分かった」
促され、無精髭の男を担いで教会へ走っていくウェンディ。
「あいつ・・・ノヴァや用心棒とも戦う気か？」
「無謀だ。いくらプリキュアでも、ノヴァとあの二匹に勝てるはずがない・・」
島民たちが絶望混じりにため息を次々に吐く。島民に混じって魔女と対峙しているリベリオンの姿を、スズは心配げに見つめていた。嫌な予感がする。とてつもなく恐ろしいことが起こりそうな気がする。
「グロウリー、あなたはこれを使いなさい」
ノヴァが、ぱん、と手を叩いた。すると、巨体のアンデッド・グロウリーの前に巨大な鎌が突如出現した。
鎌・・・？
突然の巨鎌の登場にリベリオンもしばし驚く。鎌は柄が三メートル程度、全体が黒く染まり、三日月の如く刃は曲がっている。これで首を刎ねたら、鞠みたいに跳ねそうだ。
「これは・・・？」
「これは、今から百年前に闇と過去のプリキュアたちとの戦いにおいて、何人ものプリキュアを苦しめた悪魔の発明と呼ばれし兵器・・・その名も『希望狩（ウィッシュ・ハント）』！」
「ウィッシュ・ハント？」

「そう。これは当時二本あったもののうちの一本。もう一本はアイスランドのラキ火山の火口湖で未だに眠っているそうですが、さすがに危険なので南西に位置する小さな無人島の洞窟の奥に封印されていたもう一本をあの方が・・！」
ここでノヴァはなぜかハッと、片手で口を塞いだ。が、すぐに離し、言葉を続けた。
「・・“私”が見つけました。しかし、如何せん重量がかなりありましてね、結局グロウリーに譲ってあげましたの。・・・・さあ、お喋りはここまでにしましょう。グロウリー、レベッカ、お客様を存分に楽しませてあげなさい」
瞬間、金髪女性アンデッド・レベッカが跳躍して唾を吐きながら跳びかかった。リベリオンは敵の頭部のみを狙い、鉤爪を放った。これを、レベッカはかわした。驚異的な反射神経だった。レベッカはリベリオンの開脚の間を素早くすり抜けると、再び跳ね上がり、なんと背中にしがみついた。
「ぐ・・っ・・！」
レベッカは右手の爪をリベリオンの右肩に、左爪を脇腹に食い込ませた。深々と皮膚の下に侵入していく鋭利な刃物に、リベリオンは表情が歪む。続いて、レベッカはリベリオンの左肩に噛みつこうと口を大きく開いたが。
「・・調子に・・・乗るなあッッ！！」
左手で、噛みつこうとしたレベッカの顔を鷲?みにし、そのまま身体を宙に浮かせ、背中から地面に強力な一撃を与えた。さしものレベッカもダメージが大きかったらしく、ごばっ、と血を口から吐く。リベリオンは敵が立ち上がる前に頭部を破壊しようと片足を挙げたが、
「！・・・わっ！」
間髪入れずにグロウリーが巨鎌をリベリオン目がけて振り下ろし、鉤爪で防御した。
ガッキィィンッッ・・・・。

衝撃と火花が散り、リベリオンの身体が吹き飛ぶ。地面に激突し、すぐに立ち上がるも鉤爪は三本とも尖端が折れていた。
なんて馬鹿力・・・いや、それもあるが、それ以上にあの巨鎌の威力が凄すぎるのか！？
「希望(ウィッシュ・ハント)を刈り取る大鎌・・・・」
リベリオンが呼吸を荒げながら、グロウリーを見据えたその時、異変が起きた。
が・・あああ・・・・っ。
グロウリーが突然喘ぎ声をあげたのである。見ると、巨鎌の柄を握る両手から濛々と煙が昇っている。両手が焼け爛(ただ)れているのだ。すでに死んでいるはずなのに、痛みを感じるのかグロウリーは両手から巨鎌を離した。ザクッ！と、黒の刃がリベリオンの眼前に突き刺さる。一瞬、漆黒の刃が鏡のように反射し、リベリオンは思わず息を呑んだ。
刃には自分の顔が映っていた。それは驚いている表情ではなかった。無表情だが、冷酷で、この世の全てを激しく毛嫌いしている憎悪の顔だった。
何？まさか、私を求めているの・・・・？
息を呑んだ表情のまま、リベリオンは巨鎌に手を伸ばそうとしたが、
「ちいっ・・！」
ノヴァが再び手を叩き、巨鎌をその場から掻き消した。
「怪力専門のグロウリーならきっと扱えると思ったが、とんでもないシロモノね。レベッカもグロウリーも怪我がひどくて、これ以上は保てないか・・。仕方ありませんね、私自らお相手してあげましょう」
「へぇ、やっと大将のお出まし？でも、悪いわね。サクッて、殺(や)らせてもらうわよ！」
遂に自ら前に出たノヴァの視界からリベリオンは姿を掻き消し、一瞬で背後を取る。瞬間移動し、左目に映ったノヴァの背中はがら

空きだった。
殺(と)った！
尖端は破壊されているものの、まだ十分殺傷力がある鉤爪をリベリオンは高く振り上げた。だが、それよりも一瞬早くノヴァが振り返った。そして、彼女が妖艶な微笑みを浮かべていたことに気づいた。次の瞬間、金色の瞳に光が迸り、リベリオンは一軒家の壁に背中から叩きつけられた。
「がっ・・！？」
そのまま転がり倒れる。全身が激痛に悲鳴をあげ、すぐに動けなかった。ごほごほっ、と咳を吐き、なんとか立ち上がる。
衝撃波。これも魔術なのかどうかは分からないが、ノヴァは振り向き様に金の両眼から強力な衝撃波を発し、自分を吹き飛ばしたと理解する。たとえ瞬間移動で背後を取っても、ほんの一瞬さえあれば殺(や)られる前に闘(や)ることは可能だ。これでは迂闊に近づけない。
「だったら・・・！」
と、リベリオンは闇の力を両腕に溜め、「リベリオン・デストロイド・ボール」「リベリオン・デモンズ・カッター」といった黒の光球に邪気の刃、さらに「リベリオン・ソニック」といった赤黒の衝撃波を発動させ、ノヴァに飛ばす。だが、ノヴァは瞬時に薄い幕が張ったようなバリアを召喚して防ぐと、
「無様に食らうがいい！」
両眼を光らせ、二度三度四度の衝撃波をリベリオンにぶつけた。頭から、背中から撃墜し、深手を負いながらもそれでも傷ついた身体を何度でも立ち上がらせる。島民たちは一人の少女が次々になす術もなく嬲(なぶ)られていくのをただただ教会の中から見ているしかできなかった。スズも動きたくても、身体が言うことを聞かずにいた。五度目の衝撃波を受け、激しく呼吸を繰り返しながらまた立ち上がるが、さすがのリベリオンも遂に限界が迫っていた。
「う・・・」
ぐらり、と視界が揺れた。身体がよろめいたのだ。全身を何度も

強打した影響だろう。
こんな時に・・っ。
立っていられず、額を片手で抑え、片膝を着いた。息も絶え絶えになる。ノヴァの嘲笑がすぐ目の前から聞こえ、顔を上げた。途端に蛇眼の紋様が描かれた腹部に手をかざされた。
「終わりよ、闇のプリキュア・・」
バリバリッ！！
閃光がリベリオンの身体に走った。
「あああああああああああああああっっっっっ！！！」
強力な雷撃が、傷口から侵入し、身体中を駆け巡る。リベリオンは今まであげたこともない絶叫をあげた。視界に閃光が炸裂し、大きく震動する。
やがて、ノヴァは腹部から手を離した。リベリオンは、どさっ、と倒れた。瞬時に変身が解除され、もとの黒い制服を来た雨牙真夜（アマキマヤ）の姿に戻る。島民たちは息を呑んだ。身体からいくつもの煙が立ちながらも、それでもわずかに呼吸を繰り返している真夜の生存を確かめ、ノヴァは再び口角を上げて微笑んだ。
「これで私のモノね、玩具（オマエ）は」
ノヴァの嘲笑が耳に響く。
真夜は虚ろになった左目を閉じ、暫時の闇に堕ちた。

## 遺書

樹林の中を飛び散る血と肉。ナイフをかざした若者の生死人(アンデッド)の額にドンッ！と、煌く刃が突き刺さった。瞬時に眼を剥き出し、両手がだらんとなったアンデッドの額から憲兵の衣服を纏った少女がサーベルを引き抜く。

「・・やっと、終わった」

キクだった。彼女は、びゅっ、と血で濡れた刀身を振り、布で拭き取る。彼女の周囲には同様に突如樹林から現れた数多のアンデッドを相手に善戦していたミチ、ツバキ、カノン、アキラ、ヨツバ、ヤミがほぼ無傷で立っていた（もっとも、非戦闘員のヨツバはヤミの背中に隠れて応援していただけだったが）。

「おまえたちも無事のようだな？」

「ああ。けど、どーなってんだよ、この島はよ！化け物だらけじゃねえか！」

「どうも私たちはとんでもない場所(エリア)に足を踏み入れてしまったようですね」

キクの問いに答えた後、アキラが混乱したように叫んだに対し、ツバキは顎に手をやりながら大量の屍を冷静に見ながら呟く。

「でも生ける屍(アンデッド)かぁ～。ん～・・・一体くらい標本にして持ち帰りたいわね」

と、ヨツバも屍を気味悪がるどころか興味津々の目でピンセットで飛び散った細かな肉や血液を採取し、ビンの中に詰める。逆にカノンは少しも興味なさげに屍から目を逸らし、フランス人形を抱いたまま一言も喋らなかった。

「キク、どうします？キュアリベリオンもスズもこの島にいるということは・・・」

「分かっている。ぐずぐずしている暇はない。キュアリベリオンはともかく、スズが心配だ。それに時間的にもそろそろヤバい・・」

ミチに返事した後、キクは空を見上げた。島が深い霧に包まれていても陽の暮れ様は判断できる。西側の空は橙色に染まり、東側は黒く変色し、星も見え始めていた。リベリオンとスズのことも心配だが、このままだと自分たちも危うい。夜は不死身の傭兵たちにとっては絶好の機会。突如夜襲を仕掛けられたら、いくら異能力と卓越した戦闘力を持っていても防御に徹することすら難しい。

「キク様・・」

突然、ヤミが傍らに来て声をかけた。

「いきなり何だ？ヤミ」

「アソコヲ・・」

そう言って、指差した方角には岩壁があった。よく見ると、岩壁に一人ずつなら出入りが可能な空洞が存在している。洞窟だ。

「今日ハアノ洞窟デ体ヲ休メマショウ。見張リハ私ガ務メマス」

「何を勝手なことを言っている！早くここを脱出してキュアリベリオンのもとに急がねば・・・」

「いえ、ここはヤミの言うこともっともです」

キクが喝を飛ばしたが、ツバキがヤミの肩を持った。

「ただでさえ未知の領域に足を踏み入れたうえに暗くなってしまったら、いかに私たちでも長引けば不利です。どこからアンデッドが来るか分からないのですから・・」

「し、しかし・・」

「キク、あなたの気持ちも分かる。私たちも同じ思いですのよ。けれど、私はキュアリベリオンを信じております。私たちの願いを叶えるまではきっとキュアリベリオンも死ぬわけにはいかないでしょう。私たちはキュアリベリオンを信じ、そして願いを託してともに行くことを決めた・・・そうじゃありませんの？」

「そ・・・それは、そうだが」

ツバキに続いてミチにも諭され、言葉を濁す。

「そんな私たちが無理してここで力尽きるわけにはいかないでしょう？キュアリベリオンもスズもきっと大丈夫です。ふたりのことを

信じましょう・・」
「わ・・分かった。だが朝になったら、すぐ行くからな」
ようやく折れ、キクは洞窟に足を向けた。
同時に歩き出したツバキの後ろで、あ～、これでやっと晩飯が食えるわ、とアキラが空かした腹を抑えていた。

「・・・・・って、なんで私が先に洞窟の中を見に行ってこなきゃなんねえんだよっ！？」
「ジャンケンで負けたんだから、しょーがないでしょ」
「一人で行けって言うのかよ？こんな真っ暗な中を」
「アンデッドが潜んでないか確かめなきゃ洞窟で夜を過ごす意味ないじゃない。懐中電灯は貸すし、そんなに奥まで行かなくていいから・・・・・・・・それとも、やっぱり怖い？」
「所詮は女」
ニヤニヤと、あからさまに嫌な笑みを浮かべているヨツバの後ろでカノンがまたもぼそっと毒舌を吐いた。顔を真っ赤にし、頭から湯気も少々立ち昇っているアキラは
「ちっっっっっとも、怖かねえよ！分かったよ。行けばいいんだろ、行けば！」
ヤケクソ気味でキクが差し出した懐中電灯をかっぱらうように取り、ブツクサ呟きながらわずかな光を頼りに洞窟内に足を踏み入れた。キクが「気をつけろよ！」と伝えたが、聞こえなかったようだ。
懐中電灯があるとはいえ、その程度の光では暗黒の世界を照らし出すことはできず、前から後ろから何か得体の知れないものが近づいてきているような衝動に危うく駆られそうになる。ぴちゃん、ぴちゃんと岩を打ちながら音を立てる水もたった一人で歩いているアキラに少なからず恐怖心を与えていた。
やっぱり、誰か一人付いてきてもらえればよかったかも・・・。
たとえ男の格好をし、言葉遣いも男に変えてもカノンの言ったと

おり、所詮自分は女だと悔しいが、アキラは認めた。もっとも、だからといって、このままだと自尊心(プライド)が許さないからすぐに引き返すわけにもいかないけれども。
「うおっ！？」
何かに躓(つまづ)いた。バランスを崩したが、危うく転倒は避けた。
何だ？石か？
振り返り、懐中電灯の明かりを照らした。
「！！？」
顔色が変わった。両目は限界にまで広がり、鼻から上が徐々に青(あ)褪(おさ)めている。
「ぎ・・・ぎ・・・ぎっやあああああああああああああっっっっっ！！！」
洞窟内にアキラの絶叫が轟いた。すぐにそれは外にいたキクたちの耳に届き、全員すぐさま仲間の救出に突入する。すぐにキクが腰を抜かしているアキラを見つけた。
「どうした、アキラ！？」
「あ・・・あれ・・・・あれ！」
震えながら前方を指差す。転がっていた懐中電灯で照らした。
「「「「！！？」」」」
一同もアキラと同様の表情に変化した。
彼女たちの視界に映ったのは、一体の白骨死体だった。遺体は最近のものではないが、そう古いものではなく、まだ頭部には毛髪が数多く付着しているし、骨の体に損傷はそんなにない。何よりも着ている衣服がボロボロになりつつあるとはいえ、まだ綺麗だった。
「ふむ・・・大体死後一年か二年ってトコですかね？」
表情をもとに戻し、白骨死体に近づいて冷静に判断するヨツバ。
そこで彼女は遺体の傍らに一冊の本が転がっていることに気づいた。表紙は赤い布地で覆われ、金文字で「Ｄｉａｒｙ」と記している。つまり日記だ。裏表紙には「Ａｌｆｒｅｄ　Ｇａｉｎｅｒ」。持ち主である遺体の名前だろうか。ヨツバはそれを拾い、ページを開い

た。多少損傷や汚れが激しいが、読めないことはなかった。
『〇月×日　金曜日
私は１４になる実の娘におそらく近いうちに殺されるだろう。どうしてこうなってしまったのか。娘は黒魔術に魅入られて以来、人が変わったように残酷になりはて、命を命とも思わなくなった。挙句、人体実験だと言っては生ける屍（アンデッド）の研究などを進めている。私は娘を止めようと思ったが、娘は父親でもある私を邪魔に思い、本気で殺そうとしている。逃げようにも逃げられない。黒魔術を完全にマスターした今、どんなに遠くに逃げても娘は必ず私を見つけて殺すに違いない。今はこの洞窟に隠れているが、時間の問題だろう。ならば残された時間、私にできることはこの日記を遺書として残し、後世の人々に真実を伝えるのみだ』
「！・・・・・・・・・・・・」
ページをめくるにつれてヨツバの鼓動が早くなる。速読で読み、次々にページをめくっていった。
「お・・おい、ヨツバ、一体どうした？」
「黙って！」
彼女の様子に気づいたキクが声をかけるが、ヨツバは一喝し、日記に書かれた文字を一文字ずつ読み飛ばしていく。
そこには、恐るべき「真実」が書き残されていた。

## 拷問

真夜は目を覚ました。
明瞭となった視覚が最初に捉えたのは白い天井だった。それだけは間違いない。手術台のようなベッドに身体を固定され、仰向けに寝かされていたのだから。
瞳だけを左右に動かして部屋全体を見通す。
すぐ真横に、女性の遺体が真夜の眼球に突き刺さった。
「！！・・・」
女性は今の真夜と同様ベッドに身体の自由を奪われたままの状態で死んでいた。頭部を生きたまま刃物で切り裂かれたらしい。泥々しく赤黒の液体が横一文字に斬られた額の傷口から流れ、両目からは、さぞや痛かっただろう、涙の痕跡が生々しく残っていた。生気のない口は半開きになっており、涎（よだれ）が垂れている。さすがの真夜もこの汚物の塊に気分を害して瞳を逸らした。
が、すぐに一つの考えが浮かぶ。まさか自分もこの汚物と同じ扱いを受けるのではないかと。
途端に戦慄が真夜の身体を襲った。しかし、恐怖ではなく、屈辱によるものだった。
冗談じゃない。この私がこんな汚らわしい存在（もの）になってたまるか。
まだ、何も果たしていないのに。
少なくとも、こんな訳の分からない場所でまだ死ぬわけにはいかない。
真夜は両手両足首を縛っている拘束具を力ずくで外そうと躍起になったが、変身していない今、彼女がどんなに暴れても拘束具は解けなかった。
ギィィィッ・・・と、部屋の扉が開き、誰かが入ってくる。しばらくして真夜の視界にノヴァの微笑が映った。
「ノヴァ・・！」

「お目覚めになったのね？」
「・・・ここはどこなのよ？」
「ここは、あの方・・いえ、“私”の実験室ですの。・・・・・不死身（アンデッド）の傭兵を生み出すためのね」
「！・・・・じゃあ、私の隣にいるのは？」
「この女性（ひと）ですか？この方は昨日私が実験してみましたの。しかし、失敗しましてね。アンデッドになることなく、そのまま死んでしまいましたの。少し勿体無かったですね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
最悪。その二文字が頭に思い浮かぶ。
しかし、その二文字を口に出すことはできない。
自分だって、人のこと言えないかもしれない。何よりも最終（ゴール）目標が世界の滅亡なのだから。
だからと言って、魔女（こんなやつ）と同類に思われたくないけれども。
真夜は胸糞悪い考えを頭から追い出し、誤魔化すように別の質問を投げかける。
「どうしてアンデッドを次々に生み出していくのよ？」
「お知りになりたいですか？」
ノヴァは少しだけ真夜に顔を近づけてから返答した。
「いいでしょう。教えてさしあげます。私は何も趣味でアンデッドを生み出して、島民を襲わせているのではなくてよ。・・・本当の目的は、ハピネスランドに眠る強大な魔王を蘇らせ、全ての世界を恐怖と混沌に満たすことですの」
「ハピネスランド？魔王？」
ふたつのキーワードに、真夜は表情を訝しげに変える。すると、ノヴァはちょっとだけ眉を吊り上げた。
「あなたもプリキュアなのでしょう？知りませんの？」
「何を？」
「その魔王を眠らせたというのは、当時大勢いたプリキュアらしいですのよ」

「・・・何？」
「伝説によれば、敗れた魔王の邪悪なエネルギー生命体はプリキュアたちによってペンダントに封じられ、後々ハピネスランドを建立して王位に即した方に預けられたらしいですの。また、プリキュアたちは万が一、魔王が蘇った場合を考えて天空に神殿を作り、選ばれた方のみが手に取ることができる金と銀の剣が未だに待ち人を待っているらしいということも聞きましたわ。伝説が本当なら、私はぜひともその魔王を蘇らせて世界中を恐怖に平伏させたいんですの。つまり、狂気の沙汰ですわ」
「・・仮にその魔王が眠るペンダントを手に入れたとして、どうやって蘇らせるのよ？」
「私は魔女でしてよ。この本に描かれている儀式を行いますわ」
ノヴァは本棚から一冊の緑の分厚そうな本を取り出すと、ページを開いた。そして、６６ページ目を開いて真夜に見せる。そこには魔王復活の儀式を行うための魔法円があり、何やら難しそうな文字や記号が複雑に描かれていた。
「もっとも、この儀式はさらに皆既月食の日を選び、悪魔の数字つまり６６６の時刻ぴったりに行わなければならないと色々大変でもありますがね」
「・・・なるほど。不死身（アンデッド）の傭兵を生み出しているのは、そのハピネスランドとかいう国を攻めるためというわけね」
「その通り。しかし、今のようではダメ。たとえ頭を破壊されてでも血と肉を求めて動くようにしないと、私ごときが大国を相手にはできません。だから、ここで毎度毎度さらってきた島民で最強の傭兵を生み出せるように実験を繰り返してるのですが、如何せん難しくてですね、しかし・・・・闇の力を持つプリキュアのあなたなら、もしかしたら成功するかもしれませんわね」
「！・・・・」
さすがに真夜の顔が強張った。ノヴァは彼女の反応を楽しそうに眺めた。

「安心してください。『まだ』実験はしませんよ。実験するにあたって、あなたにはお聞きしたいことがありましてね・・・・」
ノヴァは懐に手を入れ、すぐに取り出した。紫の光球の中に真夜の変身アイテム・怨恨口紅(グラッジ・ルージュ)が封じ込まれていた。ノヴァは光球を片手で？んだまま、真夜に尋ねる。
「あなたがプリキュアに変身するためのこの口紅は一体何ですの？触れようとしたら、もの凄い叫びやら何やらが体中を駆け回りましてね、やむをえずこうでもしないと持っていけなかったのですの。あなた、何か知っていらして？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
そりゃそうだろう。その口紅はこれまでの恨み辛みが今も宿っている呪われた口紅なのだから。
その口紅が力を貸すのを認めた相手が雨牙真夜(キュアセイバー)だ。ただし、全世界を破壊し、口紅に宿っている怨念たちの想いを晴らすという大きな代償付き。だが、真夜(セイバー)はその契約を踏み潰し、怒りに駆られた怨念たちが生み出したのが今の雨牙真夜(キュアリベリオン)なのだ。
彼女の中には数々の怨念が今も息を潜めている。それはもう二度と雨牙真夜が同じ裏切りを犯さないためであり、死ぬことも許されずに憎しみの十字架を背負わされた真夜(リベリオン)は怨念たちとの契約を破棄した真夜(セイバー)を激しく憎悪している。
いわば今の真夜は怨念の塊そのもの。魔女とはいえ、世界を恐怖で満たしたいという狂気ごときで扱える道具ではない。
しかし、だからといって、ノヴァにそれを説明する気はない。自分の中にある激しい憎悪も知らないくせに秘密を提供するなど、屈辱以外に表現の仕様がない。真夜が黙秘を決め込むと、ノヴァは軽くため息を吐いた。
「教えてはくれません・・・・ですか。仕方ありませんね。このような横暴は使いたくありませんのでしたのけれど」
ノヴァは本棚の下の戸棚から小さな黒い十字架を取り出した。魔女が十字架？と、真夜は怪訝に思ったが、ノヴァはそのまま仰向け

になっている真夜の前に戻ると、それを真夜の胸に押し当てた。十字架を押し当てられた胸が煙を噴いた。
「ぎゃ・・・・あああああああああああああああああああああああっっっっっ！！！！！」
熱い熱い熱い！胸が灼ける灼ける灼けるッ！
身体全体が絶叫し、両手両足がばたばたと暴れた。しかし、それでも拘束具は解けない。
骨まで灼けてしまうかと思えそうな激痛だった。
「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」
ようやくノヴァが十字架を胸から離した。真夜はまだ続いている苦痛に耐えながら呼吸を繰り返していた。
「どう？この十字架は人に苦痛を与えるためのものでしてね。あなたにも効くかどうかは分かりませんでしたが、効果は抜群のようですね。それで、どうですか？少しは話す気になりましたか？」
き・・・・貴様ァッ！
そう言いたかったが、あまりの激痛に言葉が出ない。その代わり、怒りに燃える左目の眼光をノヴァに飛ばした。魔女はそれだけで真夜の意志を理解したようだ。
「そうですか。まだ話す気になりませんか・・・・じゃあ、もっと苦しめ！」
豹変し、さっきよりも強い力で十字架を胸に押し付けた。
身体中が燃え上がる痛みに、真夜の絶叫が城中を轟き渡った。

それから何時間が経っただろうか。
「しぶとい女め。一言も口を割らなかった・・・・」
十字架を握り締めたまま、ノヴァが言葉に出す。
身体中どころか本当に骨まで灼けてしまいそうな激痛を胸に受けたというのに真夜は最後まで口を割らず、気絶さえしなかった。小さく呼吸を繰り返す状態だけになりながらも、その不屈の精神力に

驚かされる。
　普通の人間なら、激痛に耐え切れずに口を割るか、気絶するだろう。だが、彼女はどちらも選択しなかった。どちらも選ぶことを矜持（プライド）が許さなかったのだろうか。
　それは、プリキュアとして、か。
　あるいは、闇の意思として、か。
　いずれにしても、これ以上拷問を続けたら、死ぬ・・・・とまで行かないかもしれないが、これほどの精神力を持つのなら、秘密を守るために自ら舌を噛み切る行為を取る可能性もある。こんな貴重な玩具を手に入れたというのに、そう易々と壊したくはない。
　仕方ない。一度休憩を入れて、別の方法を考えるか。自白剤を注入することも検討してみよう。
　ノヴァは口紅と十字架を懐に戻し、「実験室」を出た。
　視界が朦朧としたまま、ノヴァが去ったことを感じた真夜は、そのまま意識を失った。
　・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
　・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
　・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
　扉が開き、足音が聞こえる。ノヴァがもう戻ってきたのか？真夜は左目をそっと開けた。
「大丈夫？」
　優しげに微笑む１７歳の少女の表情が視界に入る。ウェンディだ。
「・・ウェンディ？どうしてここに・・？」
「助けに来た。遅くなって、ごめんね。ちょっとじっとしてて・・・・」
　ウェンディは拳銃を使用して拘束具を次々に破壊した。身体が自由になった真夜を担ぎ、ウェンディは急いで「実験室」を出て行く。
「こっち！こっちの方向に出口があるから。だから、頑張って。死なないで・・・・」
「・・・・・・・・・」

どうして、私を助けるの？
当然の疑問が浮かぶが、声が出ない。
真夜を担いだまま、ウェンディは誰にも見つかることなく、魔女の城を脱出し、町へ戻った。

## 独白

魔女の城を脱出し、町へ戻ったウェンディはひとまず胸の火傷の治療のためにジャンの家を借りることになった。ベッドに真夜を寝かせ、医療道具に手を触れる。真夜が戻ったことを聞いたスズは彼女のそばにいたいと訴えたが、治療の邪魔をしてはいけないとジャンに宥(なだ)められ、やむをえずともに外で待つことになった。

「ほれ」

ジャンが座り込んでいるスズに頬張っていたパンを半分に割って差し出す。

「腹減ったろ？少しゃ食っとかねえと倒れちまうぞ」

「ありがとう・・」

スズは小さく答えて受け取ると、ほんの少しだけ齧(かじ)った。パンを口にしたのを確認して、ジャンもスズの隣に座る。

「それにしても凄えな、おまえのお姉ちゃん。たった一人でノヴァに喧嘩売るなんてよ」

「お姉ちゃん・・・？」

突然ジャンがそう言い出し、頭に疑問符を浮かべるスズ。

「あの黒いプリキュアになった人だけど・・・姉妹(きょうだい)じゃないのか？」

「あ・・うん。違う。キュアリベリオンは私のお姉ちゃんじゃない」

「じゃ、何だ？」

「・・私を助けてくれたたった一人の人」

「へえ・・・・じゃあ、おまえにとっちゃ大切な人なんだな」

「うん。でも・・・」

スズは声が低くなった。陰鬱(いんうつ)そうな表情を浮かべている。

「キュアリベリオンは私を助けてくれたのに、私はキュアリベリオンのために何の役にも立てない。それは・・・私が臆病で、いつも怯えているから。キュアリベリオンの役に立てたらいいのにと思っ

ても、私は全然ダメ。こんな自分が・・・嫌い」
ジャンはスズの話を聞き、視線を頭上に見やった。濃霧が漂う夜空に一つ二つ、わずかながらも星が光っていた。
「・・・あのさ、俺初めてキュアリベリオンの姿を見た時、正直言って怖かったんだ」
夜空を見上げながら呟いたジャンの言葉にスズは振り向く。
「いくらアンデッドになったとはいえさ、一緒に島で暮らしてきたみんなを少しも躊躇うことなく、無表情で血祭りにあげていく様子はさ、なんていうか到底信じられなかったんだよな。たぶん、伝説の戦士プリキュアだから、きっとみんなを救ってくれるという期待感が心のどこかにあったんだろうな」
「ご、ごめんなさい。島のみなさんを・・」
スズが謝ったが、ジャンは瞬きした両目で彼女を見た。
「なんでおまえが謝るんだよ？おまえは何もしてないだろ？」
「それはそうけど・・」
「まあ確かにひでえと思ったし、本当にプリキュアかよとも思ったけどさ・・・なんでかな？キュアリベリオンに対して少しも怒りが湧いてこなかったんだ。それはたぶん、キュアリベリオンの心の闇を垣間見たせいかもしれねえな」
「キュアリベリオンの・・・心の闇？」
「ああ・・・・」
ジャンはスズから目を逸らし、前を向いた。
「アンデッドと戦っている時のキュアリベリオンさ、無表情だったけどなんか寂しそうに見えたんだ。まるで何かとても大切なものを投げ打ったような・・・非情で残酷にも見えたのは見えたけど、あそこまで躊躇いなく殺せるようになるにはきっと過去によほどの何かがあったんじゃないかと思うんだ」
「キュアリベリオンの過去に・・・？」
「ああ。たぶん、それはこの島で起こっていることよりも深くて大きい・・・・そんな気がする。だから、俺はキュアリベリオンに怒

りも憎しみも湧いてこなかった。でも、キュアリベリオンは大切なものを全部なくしたわけじゃない。少なくとも一つはまだ持っている。それが何だか分かるか？」
「？」
「おまえだよ」
「えっ・・・？」
今度はスズが瞬きした。
「きっとさ、キュアリベリオンにとっておまえの存在は生きる希望になっているはずなんだ。だから、その希望を失いたくなくて、キュアリベリオンは戦い続けていると俺は思う。おまえは自分は役に立っていないと言うけど、キュアリベリオンのそばにいるだけで十分役に立っているはずだぜ」
「そばに・・・いるだけで？」
「ああ。だからさ、おまえはキュアリベリオンが死ぬ時までそばにいてあげろよ。おまえにとってキュアリベリオンが大切な人と同時にキュアリベリオンにとってもおまえは大切な存在になっているはずだ。一分でも一秒でもいい。大切な人とは長くいてあげろよ」
「ジャン・・・・・ありがとう」
「いいっていいって。それより早く晩飯食えよ」
「うん♪」
ジャンが歯を見せながら笑って言うと、スズも微笑を浮かべて両手に持っていたパンを頬張った。

「とりあえず、これで化膿は防いだ」
ウェンディは医療道具を鞄に仕舞った。真夜はシャツのボタンを外してさらした胸に手をやり、屈辱の烙印を忌々しく触れた。
「あの魔女・・！」
「マヤ？」
振り返ると、真夜が憤怒の形相で上体を起こし、ベッドから降り

ようとしていた。彼女の行為にウェンディは慌てて真夜の身体を抑える。
「ちょ、ちょっとマヤ、まだ動いちゃダメ・・・・！」
「離して。助けてくれたことには礼を言うわ。でも、私はあの魔女を今すぐズタズタに引き裂かないと気が済まないのよ」
「そんな体じゃ無理だよ。そもそも変身しても勝てなかったじゃない。今度こそ殺されるよ」
「うるさい！こんな屈辱を受けておとなしくできるわけが・・」
「いいから寝ておきなさいっ！」
一喝され、左眼を大きく開けた真夜はウェンディに即座にベッドに戻された。表情を変えないまま、再び枕の上に頭を乗せた真夜は彼女に疑問を投げた。
「どうして、私に構うのよ？」
「私は医者よ。患者の面倒は責任持って看るのは当然でしょ？」
ふぅ、と息を吐き、額を拭いだウェンディに真夜は小さく一言、
「お節介・・」
と呟いた。

「実験？」
「そう。頭を破壊されても動ける最強の傭兵（アンデッド）を生み出すためのね。そのハピネスランドとかいう国を傭兵軍団で攻め入るためにノヴァは島民をさらい、実験を繰り返してるのよ。つまり、あなたたちはノヴァにとってちょうどいい実験体（モルモット）なワケ」
「そんな・・・・」
上着を脱いで綺麗な肌をさらした背中を拭きながら、真夜からノヴァの話を聞いたウェンディは一瞬にして顔色が蒼白になった。よほど衝撃的だったのだろう。自分たちはいつ死ぬかもしれない今日を生き抜き、自由になれるかもしれない明日を求めて戦っているというのに、魔女からしてみれば本当に重視していたのはそのハピネ

スランドという国であって、自分たちの命など蟻程度にしか見られていなかったのだ。
「どうして・・・・どうしてノヴァも私も同じ人間のはずなのに、そんなひどいことができるの？」
「人間だから、よ」
ウェンディの疑問に対し、真夜はさも当然のごとく答えた。
「人間はね、理性のたかが届かない心の底に化け物を飼っているのよ。『快楽』とか『欲望』とかいう化け物をね。この化け物のためなら、自分以外の生き物の命なんて砂漠の砂粒以下なのよ。何の罪もない人を生きながら引き裂くなんて朝飯前。どんな聖人君子でもひと皮剥けばみんなその実体は屍肉にたかる虫ケラも同然なのよ。こんな化け物に歯止めすらかけられない下等生物の分際で地球の支配者とほざくなんて・・・・・本当に虫唾が走る！」
語尾の台詞に歯噛みした真夜に、ウェンディは彼女から並々ならぬ怒りを感じた。いや、怒りではない。これは憎悪。見る者を後退りさせるほどの憎しみと悲しみが混じり合って身体全身から放出されている。彼女に一体何があったのだろうか。背中を拭く手が震えるが、ウェンディは下腹に力を込めてなるべく口調が震えないように努めて聞いた。
「・・・・マヤ、あなたは人間が嫌いなの？」
「あん・・？」
ウェンディに背中を預けている真夜は少しだけ首をねじり、左眼を彼女に飛ばしたが、すぐに戻して「ええ、そうよ」と返した。
「人間なんてバカばっかりよ。そのうち、このバカが余りに余って爆発を起こし、滅んでしまうかもしれない。でも、それでいいわ。一度滅んでしまったほうがいいのよ。私は、人間なんて大ッ嫌い！」
「・・・・何か、あったの？」
「は・・・？」
「そこまで人間を憎むのは、きっと理由があるんでしょ？聞いてもいいかな？」

「・・あなたに話す必要があるの？」
と、真夜は言ったが、ウェンディは、
「話したくなかったら無理にとは言わないけれど、話したら少しはスッキリするかもしれないよ。ストレスは健康の大敵だから」
さらりと返した。
おかしな娘(こ)だ。というより、このお節介さは誰かに似ているような・・・・。
ふぅーっ、と真夜は長くため息を吐いた。
「まあいいわ。話したって、どうってことはないわけだし・・・・・・私はね、戦災で両親と友達を目の前で失ったの」
「え・・・？」
「私の両親は国際医療団体の一員として世界中で貧困や戦災などに苦しむ人たちを救ってきた。私も両親とともに世界中を回って人々を助ける手伝いをしてきたわ。時にはその国で友達もできた。でもある日、その国に戦災が降りかかって、父も母も友達もみんな目の前で死んでしまったの。生き残ったのは私だけだった・・・」
正確には全員の命を奪ったのは宇宙から地球に舞い降りた邪悪な闇の力を持つ悪魔であり、後に真夜が一年も仕えた主(あるじ)だったのだが、そんなことは関係ない。たとえ誰が殺したのであろうと、両親と友達が理不尽にも命が奪われたのはその国が愚かな矜持を賭けて起こし、何の罪もない国民をも巻き添えにした戦争が要因であることに違いない。たかがつまらないことで長い戦争を起こすことなく、平和が続いていたら、両親も友達も、それどころか大勢の人たちが命を奪われる恐怖に臆することなく、貧しくても愛する人たちとともに生きるささやかで幸せな暮らしを過ごすことができたはずだ。
だが、人はたかだか肌が黒い、宗教が違う、国境が違うといった差別や偏見という狭量な考えでいがみ合い、憎しみ合い、遂には殺し合う。たとえ勝利してもそれで終わりではない。憎しみの中からまた新たな憎しみが生まれ、永遠にその連鎖は続いていく。人が数多く存在する、ただそれだけで人は人と殺し合い、他の生命をも不

甲斐なく奪って、戦争という愚かで滑稽な遊戯（ゲーム）を永遠に続けていくのだ。こんな遊戯が永遠に続き、世界を腐らせていくというのなら、世界など滅びてしまったほうがいい。全ての生命が失われ。最初から何もなかったように。ただ闇だけが存在する滅びの世界だけが混沌に満ちた全世界を救済する理想の世界ではないだろうか。

だが、一度は契りを交わした雨牙真夜（キュアセイバー）は契約を破棄し、全てをもうひとりの雨牙真夜（キュアリベリオン）に押し付けた。ともに世界を滅ぼし、理想の世界を作ると約束したのに裏切ったのだ。その罪は深く、そして痛い。ひとり残された真夜（リベリオン）は自分の中に存在する怨念から解放されるためにも全世界の破壊を急いでいる。それだけが自分を捨て、幸せになろうとした真夜（セイバー）に罪の重さを思い知らせるための復讐だった。

一緒に世界を壊そうと誓ったのに、他に１９人もいたプリキュアの言葉に惑わされやがって。

所詮は、雨牙真夜（キュアセイバー）も「人間」だったと真夜は理解した。

怨念が集結し、体を得た自分とは違う。

だから、だから私は、人間が・・・。

「人間が・・・嫌いよ！」

真夜がそう呟いた時だった。

ふわっ、と突然布か何かを後ろからかけるように。

ウェンディが真夜の背中から前に両腕を伸ばし、優しく身体を抱き締めた。

## 友達

「え？ちょっ・・！？」

自ら過去を語った真夜にとって、ウェンディの行為は予想外だった。しかし、ウェンディは真夜の反応にも構わず、背中から首へ回した両腕をそのまま胸に降ろしていく。

「何やって・・？」

「苦しかったんだね、ずっと・・・・・」

「！・・・」

その台詞に、何も言葉が出なくなる。ウェンディは上半身が露になっている真夜を背中から抱き締めたまま続けた。

「大切な人を目の前でなくして・・・・ずっと辛いのを我慢して生きてきたんだね。凄いよ。本当に凄い。普通だったら、発狂してその人の後を追ってもいいかもしれないのに・・・・強いんだね、マヤは。強くて・・・・優しい」

「優しい？私が？」

「うん・・・・」

真夜が再び左眼だけを飛ばすと、ウェンディは微笑みながらうなずいた。

「・・何言ってるの。私は少しも優しくなんかないわよ。ノヴァと戦っているあなたを邪険に見たし、何より私はこの手で島民のアンデッドを目の前で次々に引き裂いていったのよ。少しも躊躇することなく」

「でも、おかげで島民はあなた一人にしか憎まなくなった」

「は？どういうこと？」

ウェンディはようやく彼女の身体から両腕を解いた。

「私たちはずっとアンデッドと戦ってきたけど、正直言うとみんな本当は戦いたくないんだ。もちろん、死ぬのが怖いって理由もあるけど、敵の兵隊はあろうことか一緒に暮らしてきた島の仲間たちな

んだよ。その中には家族や恋人・・・・大切な人がたくさんいた。それが醜い化け物になったからって、目の前に現れた大切な人に向かって引き金を引ける？仮に引いたところでその人は自分や誰かにとってとても大切な人を殺してしまったという大きな罪悪感を背負うのよ。全て悪いのはノヴァなのに、こんな非情なことってある？しかも実験という名のもとで人々の命を弄ぶなんて、えげつない以外の言い方はないでしょ？私は医者としてもこんな横暴は絶対許せないの・・・・！」

ウェンディは話しているうちに怒りで興奮してきたらしく、握り締めた拳が震えていた。

だが、「でも・・・・」と言葉を呟いたところで震えは止まった。

「でも・・・・マヤがプリキュアに変身して、何の躊躇いもなくアンデッドたちを倒していったおかげでみんながノヴァとアンデッド以上の恐怖と憎しみ、怒りをマヤに向けるようになった。はっきり言って、みんな昨日まで複数のアンデッドを倒してきた罪悪感と恐怖に苦しみ、絶望していたの。でも、マヤが憎しみの対象になったおかげで、みんな自分への罪悪感と恐怖の呪縛から解放されたの。皮肉に聞こえるかもしれないけど本当にマヤのおかげなんだよ。ありがとう」

ありがとう。

闇の戦士として覚醒してから、おそらく初めて伝えられたであろう感謝の言葉に真夜は初めて戸惑う。返答に困り、しばし思案した挙句、こう返す。

「べ、べつに単に邪魔だったから、始末しただけよ。それにあなたたちのためじゃない。そんなのは優しさじゃないわ」

「確かにそうだったかもしれない。でも、あなたはそう選んだことで、みんなを少しながらも苦しみから救ってくれたんだよ。きっと、あなたは心のどこかで私たちの苦しみを見抜いてたはず。だから、私たちを救うための最善策として無意識にそう選択したの。だから、それは『優しさ』なのよ」

「・・・強引な理屈ね」
ウェンディの答弁に真夜は、ふぅっ、と吐息を吐くと、話題を変える。
「・・私は島民から憎まれてるのよね？なのに、私を助けて大丈夫なの？私なんかを助けたら、あなただって恨まれるかもしれないのに」
「心配してくれてるの？やっぱり優しいね♪」
「！・・だから、そうじゃなくってっっ！！」
ウェンディは極めて明るく返事した。
「大丈夫。みんなには一応あなたを助けることは伝えてあるから。まあ、もの凄く反対されたから結局ジャン以外内緒でやっちゃったんだけどね。でも、ま、助けちゃったんだから、みんなこれ以上はうるさく言わないよ♪」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
行動力はあるが、とんだ食わせ者だな。
なんとなくだが、どうして余所者の彼女がレジスタンスのリーダーに選ばれたのか理解できた気がした。
そう感想を思い浮かべていると、「ねえ」とウェンディが声をかけた。今度は何だ？と真夜が再び振り返ると、ウェンディはほんの少し躊躇った後、こう言った。
「マヤ・・・・私たち、友達になれないかな？」
「・・・は？」
真夜の思考が突然止まった。
今、何て言った？
「えっと・・それ、どういう意味？」
「そのままの意味だよ。マヤ、私はあなたと友達になりたい。・・・・ダメ？」
「え？ええっと・・・・・ど、どうして突然そんなことを？」
返答に困り、仕方なく質問に質問で返す。ウェンディは少し寂しげな微笑のまま口を開いた。

「マヤの力になってあげたいの」
「は？」
「マヤ、一緒にいたスズちゃんから聞いたけど、あの娘の他にも仲間がいるみたいね。もしかしたら、あなたにとってはその人たちは大切な仲間でともに支え合ってきたかもしれない。でも、その人たちはあくまで『仲間』という関係なんだよね？たとえどんなに信頼した仲間でも心から信じて全てを任せるには限界がある。でも、『友達』ならそうでもない。心のうちをさらけ出し合える『親友』になれたら、きっとどんなことでも心から信じて全てを任せ、お互いがお互いを支え合って未来を生きることができるはずだと思うんだ」
「未来を・・・生きる？」
真夜が復唱すると、ウェンディはうなずいた。
「そう。『親友』同士なら、きっとどんな苦難も力を合わせて乗り越えて、明るい未来へ繋ぐことができる。きっと、そうだと思う！だから・・・・マヤ、友達になろう。力を合わせてこの地獄から一緒に出よう。・・・・ダメ？」
「・・・・・いいよ」
「！・・・・本当に？」
「う・・うん」
ぱぱぱっ、とウェンディの寂しげだった微笑がまぶしく輝いた。
「ありがとーっ！マヤ、大好きっっ！！」
「ちょ、だから抱きつかないでよ！」

「それじゃあマヤ、次の患者を看てくるから、もう休んでて」
「いいの？このままジャンのベッドで寝ても？」
「ジャンは床で寝るって言ってるから心配しないで。あ、でも、スズちゃんは入れてあげて。あの娘、誰よりもあなたのことを心配していたから・・・・」
「・・・分かった」

「じゃあ、おやすみ」
「おやすみ」
背中が拭き終わり、毛布に包(くる)まった真夜はウェンディが部屋から出て行くのを確認した後で仰向けになって、天井を眺めた。
「友達・・・か」
ふと、その言葉が口に出る。
そういえば、私がまだ憎悪として真夜の中に存在していた時、同じ言葉を伝えたプリキュアがいたな。
確か名前は花咲だ来海だと言ってたっけ？
考えてみれば、真夜が私を裏切った一番の要因はその言葉に惑わされたからな気がする。一年も闇に仕え、闇の力を最大限にまで扱えることが可能となった彼女だったが、やはり目の前で両親と友達を失った心の闇が大きな隙となった。その隙を突け入れられた彼女は闇を捨て、もう一度光になりたいと願い、結果、神様は願いを叶えてくれた。心の闇を捨てられず、完全に冷酷非情になれなかったのが元凶といえよう。
でも、それは自分も同じかもしれない・・・・・。
真夜は友達になりたいと言ってきたウェンディに少しずつ好意を持ちつつあるのを認めていた。そして、彼女からの言葉を素直に嬉しいと感じていた。
確かに、自分は人間が嫌いだ。それは変わらない。
醜く、我侭で、自己中心的なことばかり考えてて、とても生きる価値があるとは思えない種族。
でも、ウェンディという人間もいた。
もしかしたら彼女だけが自分のことを理解してくれた人なのかもしれない。理解してくれたうえで彼女は私に友達になろうと誘ってくれた。心からまっすぐ。純粋で曇りの一点もない気持ちをぶつけてきた。こんな人間に会ったのは闇の戦士として再び覚醒してから初めてだった。それでいて、自分だけでなく、他人にも精を尽くしてともに戦っている。

彼女も人間だ。
でも、綺麗だ。
醜いと思っていた人間の中にこんなにも純粋な心の持ち主が彼女の他に少ないながらもまだ存在するのだろうか。
だとしたら、壊さなくていいかもしれない、世界を。
無駄に多い人間の中から彼女という希望が多く存在し、その希望が世界を変えていくというのなら、今の世界もまんざら捨てたものではないかもしれない。
でも、私は全世界を破壊するために生まれた怨念の集合体。私の手で世界を滅ぼすというのなら、いずれ希望もこの手で殺すことになるのか。
私は、今、迷っている。
世界を破壊するために存在する死神が、世界を破壊するか否か決定を下すことを。
こんなに思い悩むのは初めての経験であり、感情の変化だった。
額に幾重のしわを寄せ、ぎゅっ、とシーツを強く握り締めたその時。
悲鳴。それもすぐ近く。
「ウェンディ！？」
悲鳴の主の名がすぐに浮かび上がり、真夜はベッドから跳ね起きた。外に出て、すぐにジャンとスズの姿が視界に入る。
「スズ！ウェンディは？」
「キュアリベリオン・・・あ、あれ！」
スズが震えながら背後を指差し、真夜が振り返ると、
「！・・・ノヴァ！？」
闇の中でノヴァがおぞましい笑みを浮かべながら、目を閉じているウェンディを両腕で抱えて立っていた。
「ノヴァ、ウェンディをどうする気！？」
「知れたこと。『実験室』でアンデッドに生まれ変わらせてあげるのですよ。私の玩具を勝手に持ち出した罰としてね。ついでにこの

女は島民たちのリーダーのようですし」
「や・・やめろっ！」
つい、声が出た。
何の邪気もない、ただ出会ったばかりのわずかな希望を失いたくない一念の叫びだった。
「あら？どうしたのですか？闇の力の持ち主であるあなたが珍しい・・・・」
真夜の変化にはノヴァも気づいたらしい。一瞬呆けた表情をしたが、すぐにしたり顔で言う。
「あなたの相手は私でしょ！ウェンディを返して！」
「ウェンディ？あらら～・・・・名前を言うなんて、どうやら、あなたにとってこの娘は大切なお友達のようですわね～・・・・」
しまった。真夜は舌打ちし、失言をひどく後悔したがもう遅い。もはや交渉の余地なしと判断して真夜は
「返す気がないのなら・・・っ！」
片足に力を込めて跳躍を試みようとするが、
「小賢しいっ！」
瞬時にノヴァが魔術で起こした強力な突風を受け、背中から地面に叩きつけられた。
「がっ・・！」
「キュアリベリオン！」
スズが駆け寄ろうとするが、真夜は膝を立てながら「来るな」と片手で制した。立ち上がるのも無様な姿勢を見せる真夜にノヴァは嘲り笑う。
「本当に愚かですね。変身しても勝てなかったこの私に性懲りもなく挑もうとするなんて。あなたはもう誰も守れませんのよ。どうしてもこの娘を助けたいのなら、一人で私の城に来るがいい。それでは、ご・め・ん・あ・そ・ば・せ♪」
ノヴァは最後にウインクをすると、気絶しているウェンディを抱えたまま闇の中に溶け込むように消えた。

「う・・・う・・・うあああああああああああああああっっっっ！！！」
地面に拳を何度も叩きつけ、真夜が夜空を見上げて吠える。
スズもジャンも一言も声をかけられなかった。
空に向かって吠えている真夜が、本当は泣いていることに気づいたから。

## 復讐

翌日の朝。
ウェンディがノヴァにさらわれたことはジャンを介してすぐに島民全員に知れ渡った。彼らにとってはいよいよ最悪の事態に全員顔色が蒼白にならざるをえなかった。
「そんなウェンディが・・・・！？」
「う、嘘でしょ？嘘って言ってよ、ジャン！」
「ウェンディは俺たちに残された最後の希望だったのに・・・・っ！」
絶望に暮れ、沈黙で項垂れる島民（レジスタンス）。彼らの表情に希望は一縷もなかった。ジャンもスズも何の言葉も出ず、立ち尽くしているしかできない。
「全部・・・・あの女のせいだ！」
ふと、無精髭の男が両目を血走らせ、苛立った様子で呟いた。全員が男に視線を集中させると、男は怒りを発憤させて狂ったように喚き散らす。
「あのプリキュアなんかを助けに行ったから、ウェンディはノヴァにさらわれたんだ！あの女が来たせいで俺たちは全員死ぬんだ！あの女は疫病神だ！！」
「その疫病神って、私のこと？」
すぐ背後から声が聞こえ、瞬時に振り返る。雨牙真夜が黒の左眼を男に向けたまま、そこに立っていた。いつの間に後ろに立っていたのに男はひるむが、すぐに表情を戻し、強気の姿勢で返す。
「あ・・・・ああ、そうだよ！おまえ以外に誰がいるって言うんだ！？なあ、みんなだってそう思うだろ？そもそもおまえが仲間を殺して、ノヴァ相手に一人で戦おうと勝手な行動を取ったから、ウェンディはおまえを助けに行ってノヴァに連れさられたんじゃねぇか！！」

「そ、そうだ！なんでウェンディが代わりにアンデッドにされなきゃならん！？」
「死ぬんなら、あなたが死んじゃえばよかったのに！」
「仲間を殺し、最後の希望を見捨てておいて、よく俺たちの前に顔を出せたもんだな！」
「そうだ！おまえはこの島の疫病神だ！」
「今すぐ私たちの前から消えて！」
「つか、死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね・・・・！
男の言葉に同調（シンクロ）して島民たちが怒りに我を忘れ、ありとあらゆる呪詛を吐き続ける。まるで嵐だ。スズは傘も差さず、レインコートも着ずに嵐の真っ只中に立つ真夜を胸の詰まる想いで見つめていた。真夜は何も言わないまま少しだけ項垂れて、呪詛の雨をその身に受け続けている。その雨を一身に受けながら、彼女の心は大切な友達を助けられなかった後悔で今も泣いているのだろうか。もし、自分だったら、きっと耐えられずにその場から逃げ出してしまうに違いない。
だが真夜は逃げなかった。一歩も動かずに左目も前髪に隠して、沈黙のまま雨を浴び続けている。
何も言わない真夜に怒りが収まらず、無精髭の男がとどめを刺すように呪詛を耳元で浴びせた。
「どうした？何も言わないのか？はん、そりゃそうだよな。たとえ今すぐにおまえがここで死んだとしても、俺たちも同じだ。すぐにアンデッドに殺（や）られて、みんな死ぬ。・・・・どーせ、俺たちは生まれた時から理不尽に殺されちまう運命と決まっている世界一哀れ

な民族なんだよ！！」
「・・・い・・・てみ・・ろ・・・」
初めて真夜の唇が動いた。何か呟いている。男は耳をすましたが、よく聞き取れなかった。仕方なく男は直接聞く。
「おい、今なんて言ったんだ？」
「『もう一回言ってみろ！』と言ったのよ、この腰巾着がっ！！」
空間が大きく揺れた。鈍音が響く。
無精髭の男は右頬に強い衝撃を受け、身体が宙に浮いた。殴られたと理解したのも束の間、すぐに男の身体は地に叩きつけられた。
「ごおっ・・！？」
男をはじめ、島民全員が驚きに言葉を失う。ジャンもスズも一瞬何が起きたのか分からなかった。だが、彼らの視界にはしっかりと握り締めた拳を真っ直ぐ（ストレート）に伸ばしていた真夜が映っていた。
「な、何しやがんだ、この女（アマ）ッ！？」
殴られた右頬を抑え、驚愕半々の表情で腰を上げた男が言うが、真夜が次に言い放った一言で彼も言葉が出なくなった。
「うるさいッッッ！！！」
その一言に大気中に電気が迸り、誰も彼もが圧倒され、何も言えなくなる。真夜は全員が沈黙し、左眼をさらに細めて見渡したうえに眉間にしわを寄せた表情で言葉を続ける。
「さっきから聞いていたら、呆れてものも言えないわ。ウェンディがいなかったら、あなたたちは何もできないの？不死身の傭兵に対して、少しも戦えないの？メーメーと悲鳴をあげて逃げ回るだけ？だとしたら・・・」
真夜は腕を組み、吐息を吐いた。
「羊ね、あなたたちは」
「「「「「何だとっ！？」」」」」
真夜の台詞に、ようやく島民の半々が声を出す。だが、島民の反応にも構わず、真夜は話を続けた。
「じゃあ、もう一度聞くけど、今のあなたたちは敵を前にして戦え

ると断言できる？答えはノーよ。私が断言してあげるわ。・・・・・あなたたちは羊よ！人に頼るだけしか能がない臆病な存在だわ。ウェンディを見てみなさい。彼女はあなたたちの想いを背負ったうえでずっと戦ってきたのよ。その想い（プレッシャー）はかなり重かったはず。それなのに、あなたたちはたった一人の少女に自分たちの願望を自己中に背負わせておいて、ウェンディの気持ちを少しでも考えたことがあるの？思いあがるのもいい加減にしなさいよ！」

話しているうちに真夜は怒りが身体の中で沸騰していることに気づいていた。だが止めようとは思わなかった。島民たちを圧倒し、憎々しく煌いている左眼を一人一人に飛ばしながら彼女は止められない最大級の怒りを込めて吠える。

「この、腰抜けの羊どもがっ！！」

その言葉に彼女自身の怒りがどれほどのものかを感じ取り、全員が生唾を飲み込んだ。いつの間にか額から汗が一滴流れていた。

なんという強烈な誇り。

なんという強大な自信。

魔女の恐怖と残酷さをその身を以て知ったというのに、どこからその「強さ」が来るのだろうか。

すると、真夜は小さく口を開いて解答を語った。

「・・・私はどうしてもこんな所で死ぬわけにはいかないの」

再び、全員の視線が真夜に集中した。

「私にはどうしても復讐したい憎い敵がいる。その敵は、この島を支配する魔女なんかよりもずっと大きくて、強い。でも、あきらめるわけにはいかない。今の私にとっては、それが『生きる』目的になっているのだから。だから、絶対に生き抜いてやるのよ。どんな手段を用いてでも。・・・あなたたちはどうなの？絶望の中で足掻こうともせずにただ流されるままに存在しているのは『生きている』なんて言えないよ。死人と同じ。何もできずにただ死のみを待つことを選ぶというのなら・・・」

真夜は無精髭の男に接近し、片手で首を？むと、そのまま身体を

宙に浮かせた。
「がっ・・・・あああっ！？」
口から泡を吐き、顔の色が失われていく男。島民たちはみな真夜の行為に驚きながらも彼女に恐怖を抱き、誰も動けなかった。そんな臆病者たちを無表情で見つめながら、真夜は続ける。
「今すぐに全員殺してあげるわよ、この死神の私がね。すでに死人のあなたたちには生ける屍（アンデッド）に生まれ変わるよりもずっと幸せなはずよ。死人は死人らしく、土の下で永遠に眠ってなさい・・・・！」
ぎりりり、と男の首を絞める片手の握力が強くなる。
血の気を失い、男は白目を剥いたが、真夜は目の色も表情も変えることなく、絞め続けた。
だが次の瞬間、視界がぐらりと揺れる。
頭に強い衝撃を受け、真夜は手を離した。
解放された男とともに真夜の身体がゆっくりと地面に倒れる。
倒れた瞬間、すぐ近くに誰かが呼吸を荒げながら立っているのに気づいて、視線を少しだけ動かして見上げた。
ジャンが先端が赤黒く変色した鉛パイプを両手で握り締めていた。

## 決起

ジャンは息を荒げ、握り締めていた鉛パイプを手から離した。カラン、カラン、と音をあげ、パイプが地面に転がる。彼の行為に島民も、そしてすぐそばにいたスズも大きく目を見開いて立ち尽くしていた。

「お・・・・俺たちは、俺たちは死人なんかじゃないっ！！」

喉から搾り出すようにして、ジャンはようやく声を出した。

「俺たちは、人間だ！生きている！死人なんかじゃないっっ！！！」

ジャンの目頭にはじわりと涙が溜まっていた。血という血が高速で流れて紅潮している顔を真夜に向けている。彼の言葉が、想いが、島民たちの間を駆け巡った。

ズキッ、と上半身を起こした真夜の頭の中で激しい痛感を感じた。右手をやり、ぬるっとした液体に触れる。しばらくして視界に赤黒の液体が染み付いた右手が映った。やがて、ふ、と真夜は少しも変化しなかった唇の口角を少しだけ上げて不敵に微笑し、裾で拭って立ち上がる。そのままジャンに歩み寄った。

「う・・・・あ・・・・・」

殴られた仕返しをされると思い込んだジャンは怯え、身体が後退りするが、真夜は彼の前で腰を降ろすと、血が付いていない左手でジャンの頭を優しく撫でた。「え？」と予想外の反応をするジャンに真夜はさらに、にこ、と優しげな笑顔で返す。

「それでいいのよ。よく言ったわ。たった今、あなたは羊でも死人でもなくなったわ」

「キュアリベリオン・・・・・」

ジャンが呟くと、真夜は笑顔をすぐに無表情に戻して毅然とした態度で島民たちを再び見据える。

「腰抜けの羊ども、耳の中をほじくってよく聞きなさい。はっきり言わせてもらうわ。私はあなたたちがこのまま死に絶えようとべつ

に何とも思わない。そんなに死にたいんなら、さっさと死ねとさえ思っているわ」
「「「「「「！！・・・・」」」」」」
ふと漏らした真夜の本音に島民たちは衝撃に衝撃が重なり、一人として「あ」の声も出なくなる。だが真夜は「でもね・・」と続けた。
「私は戦いを否定しない。つまらない矜持を賭けて関係のない人々を理不尽に巻き添えにする戦争は醜いと思うけれど、己の命を賭けてまで大切なものを守り、明日という希望を求めて生き抜くための戦いは必要だわ。私は今初めてそのために戦おうとしている。たとえ見苦しく見えようとも私は最後の最後まで足掻くわ！ウェンディは私が必ず助ける。そして、あなたたちを死と恐怖で縛り付けてきたノヴァを倒してみせる。それが私の決意であり、選択よ。・・・あなたたちはどうする？何もしないまま最後まで恐怖に怯えて死ぬか、それとも死ぬかもしれないとしても希望を手に入れるために反抵抗組織として最後まで戦うか、二つに一つよ。よく考えなさい・・！」
真夜が差し出した二択に島民は顔を見合わせたり、苦悩の表情を見せたりするものの決心に至らない。真夜はしばらく島民たちの反応を窺っていたが、誰一人も声を出さないのに失望したのか無言で振り返り、魔女の城を目指して歩み出そうとするが、
「キュアリベリオン、待って！」
スズに呼び止められ、足を止めた。振り向くと、スズは引き締まった表情で真剣な眼差しのまま真夜を見つめている。
「スズ・・・？」
「キュアリベリオン・・・お願い、私も連れてって！」
「え・・・？」
思わず真夜が反応すると、スズは表情が少しばかり沈んだ。
「私も・・・同じ。ずっと怖くて、逃げていた。少しも戦おうとしなかった。でも、今は違う。私も戦いたい。一緒にウェンディさん

を助けたい。お願い、連れてって！」
「・・・ダメよ」
真夜は少女の哀願を拒んだ。
「ど、どうして？　やっぱり、私は足手纏いなのっ！？」
「そうじゃない・・」
真夜は再び体勢を低くしてレインコートで覆っている頭に左手を置くと、スズと目線を合わせた。
「スズ、あなたの決心は買うわ。よく決めてくれたと思う。でも足手纏いだからという理由じゃない。あなたにはここで島民（みんな）を守ってほしいの」
「私が・・？」
真夜はこくりとうなずいた。
「たとえ不死身（アンデッド）の傭兵でもあなたの力なら一度に燃え散らすこともできるはず。あなたの力は今までずっと人を傷つけてきたけれど、本当は大切なものを守るために戦う力として存在していたのよ。今こそ、あなたの本当の力が発揮される時だわ。自信を持って、島のみんなを守って」
「キュアリベリオン・・・・・分かった」
スズはうなずいたが、真夜は目線を合わせたまま言葉を続けた。
「でも一つだけ約束して」
「？」
「絶対に死なないで。危ないと思ったら、どこでもいいから逃げるなり隠れるなりして何が何でも生き延びなさい」
最後に一呼吸置いて、伝える。
「あなたは、私が殺すんだから」
「・・・・・分かってる」
スズの返事を聞くと、真夜は立ち上がった。途端に何かが彼女に軽く飛んでくる。真夜は左手で受け取り、それがバイクの鍵（キー）と知る。
「俺の家の裏に黒いバイクがある。それからこれ、使ってくれ」
鍵を投げたのはジャンだった。ジャンは手に持っていた刀と拳銃、

おまけに予備弾倉を渡す。刃毀(はこぼ)れしていない美しい刀身と弾の数を確かめて真夜はジャンに聞く。
「なんであなたがバイク持ってるの？」
「俺のじゃない。俺の父さんのだ。・・・・ノヴァに殺されてしまった」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・仇を討ってくれ」
「・・約束するわ」
真夜は刀を腰に差し、拳銃を片手に持つと、敵地へ走り出した。すぐに見えなくなり、残された者たちの想いだけがその場を交錯する。
スズは真夜が見えなくなった後もしばらく見送り続けていたが、口元を引き締め、強い眼差しで島民たちに振り返り、必死の想いを込めて伝える。
「み、みなさん、私の話を聞いてください！」
スズの声に、島民全員が彼女に視線を向ける。
「キュアリベリオンは、確かに残酷で、ひどい人にも見えると思います。で、でも、キュアリベリオンはたとえ無茶だと思われても少しもあきらめずにまっすぐ自分の信念を貫いていく強い人でもあるんです。キュアリベリオンがノヴァを倒し、ウェンディさんを助けると言うのなら、きっとやってのけてみせるはずです！・・・だから、みなさん、キュアリベリオンを信じて、一緒に戦ってください！最後の希望(キュアリベリオン)が最悪(ノヴァ)の絶望を倒す時まで・・・・明日を手に入れるその時まで！！」
スズの想いが、言葉となって島民たちに伝えられていく。その言葉に嘘偽りのない純粋な想いが込められているのを感じながらも島民たちはまだ戸惑いを表情に隠せずにいたが、
「俺は、信じる！」
ジャンが叫び、隣に立った。
「ジャン・・・」

「俺もキュアリベリオンは何かを持っていると思う。ノヴァを超える何かを。一応伝説(プリキュア)の戦士なんだろ？だったら、信じてみたいんだ。これが最後の戦いになるんだったら、最後の一瞬まで足掻いてやりたい！」

ジャンの言葉と表情から、彼の決意と覚悟が伝わる。

１３歳の少年とは思えない「強さ」が決め手となって、遂に島民全員に腹を括らせた。

「分かった・・・戦おう、俺たちも！」

最初に無精髭の男が声をあげる。

「俺たちのしぶとさ、ノヴァに見せつけてやるぜ！」

「こうなりゃヤケだ！とことん戦(や)ってやろうじゃねえか！」

「私たちの本気を思い知らせてやりましょ！」

「そう簡単にくたばってたまるかってんだ！」

続々と声とともに武器を持つ手が挙がる。全員が全員、これから起こるであろう最後の戦いに己の命と覚悟を賭けた。

そして、その時はすぐに来た。

「実験」の名のもとでノヴァが嗾(けしか)けた不死身(アンデッド)の傭兵軍が至る影から姿を現し、一斉に襲撃を仕掛けてきたのである。

喚声をあげ、反抵抗(レジスタンス)組織も最後の戦いに身を投じた。

城ではノヴァが自室に籠って水晶玉を覗いていた。水晶には島民がアンデッドを相手に決死の死闘を繰り広げているのが映っている。ノヴァはしばらく水晶玉を冷ややかに見つめていたが。

轟音。

突如、鼓膜を突き破る衝撃に反応し、すぐさま映像を変えた。次第に水晶に映像が映し出されていく。完全に映し出された刹那、ノヴァは両目を限界にまで見開いた。

城の入口を塞ぐ鋼鉄製の扉。ちょっとやそっとでは開かない扉が破壊され、粉塵が濛々と蔓延している。やがて粉塵が掻き消され、

一人の少女の姿が露になる。それがヘルメットを被り、バイクに跨った雨牙真夜（アマキマヤ）なのは言うまでもなかった。真夜はヘルメットを取り外すと、ちょっと顎を上げて無表情で一定方向を見つめる。その方角を見つめている真夜の左眼が水晶から自分を完全に捕捉（キャッチ）していたことにノヴァは一瞬たじろいた。

なぜ？どこから私が見ているかは知らないはずなのに・・・・。

ノヴァの胸のうちがわずかな不安に侵され始めたのを知ってか知らずか、突然の侵入者に対し、護衛用の傭兵が複数現れても、真夜はその方向から目を逸らさずに一言呟いた。

「再挑戦（リターン・マッチ）に来たわよ、ノヴァ」

## 死演舞

あの女、本当に来た・・・・。

ノヴァは少し驚いていた。実を言うと、いくら絶大な闇の持ち主とはいえ変身する力がない彼女が本当に一人で来るかどうか些か疑念を抱いていた。だが彼女は今、確かに敵地の真っ只中に立っている。しかも左の瞳は少しも怯えていない。ノヴァは見開いていた両目を瞬時に細くし、ニヤリ、と口角を上げた。

ここまでは、計画通り・・・・。

おぞましい笑みを消さぬまま、ノヴァは水晶玉に映る真夜に語りかけ、その声は水晶を通して直接彼女に伝えられていく。

「よく来たな、キュアリベリオン・・・・」

ノヴァの声に真夜はバイクに跨ったまま即座に反応して左眼で周囲を見回すが、声は聞こえど姿は見せない彼女にやや失望のため息を吐く。

「せっかく望みどおり一人で来てやったというのに、自分は高みの見物？お客様に対して無礼じゃないかしら？」

「あなたが私の所まで来たら、お茶ぐらい出してあげましょう。私は最上階にいます」

「もちろん、あなたの所へは何が何でも行ってやるわ。でも、その前にウェンディはどこ？どこにいるの？」

「ウェンディ？・・・・ああ、昨日の女ですか？どうやら、あなたにとってよほど大切な方のようですわね。一体、何なんですの？」

「彼女は・・・」

一旦開いた口を閉じ、はっきりとした口調で真夜は答えた。

「・・私の友達よ！」

「友達？あらら～・・・・？」

小馬鹿にしたノヴァの声が響く。

「闇の力を持つあなたに人間のお友達なんて、冗談にしては笑えま

せんわね」
「おまえが笑おうが笑うまいが、そんなことはどうだっていい。もう一度聞くわよ。ウェンディは今どこにいる？答えなさい。これ以上、あなたとお喋りする気なんてさらっさらないんでね・・」
虚空を睨み、凄みを含めた真夜の声が返される。ノヴァはしばし無言の後、返答した。
「あなたのお友達は私の『実験室』にいますわ。地下一階です」
「何・・！？」
真夜は左眼をカッと開いた。
「まさか・・・ウェンディを・・・もう・・・・・？」
途端にノヴァの笑う声が響いた。
「ふふふふ・・・・どうでしょうね？答えは自分の足で辿り着いて見つけてください。それでは、お茶を準備してお待ちしています」
そこでノヴァの声は切れた。
真夜の左目は一向に焦点を結ばずに宙を見つめていた。胸のうちを不安が駆られ、全身が脱力して倒れてしまいそうになる。
まさか、まさか、まさか・・・・。
嫌でも最悪の想像をしてしまう。真夜は思わず両手で頭を抑え、叫んでしまいそうな衝動に駆られた。だが、侵入者を包囲する者たちが次々に咆哮をあげ、真夜は寸前で我に返った。
バイクに跨った状態のままで真夜は眼前に立ちはだかる傭兵軍団（アンデッド）を見据える。彼らも「実験」の名のもとでノヴァに殺された島民たちなのだろう。一切の感情がない黒い二つの空洞。だらしなく開け、涎（よだれ）が垂れた口。纏っている衣服はほぼボロボロで、血が黒く染み付いている。死んでもなお主人の命令に従い、殺しだけを続ける哀れな魂。
けれども、闇の存在である真夜に彼らを救えない。浄化させて、安らかに天国に逝かせる力はない。
彼女にできるのは、たとえ非道な方法を用いてでも彼らを魔女の呪縛から解放してやることだけだ。即ち、二度目の「死」を迎える

ことで。
あなたたちに恨みはない。でも邪魔をするならこっちも遠慮しないわ。
私のことはいくらでも憎んでもいい。あなたたちの憎しみも私が永遠に背負うから。
「だから・・・・もう一度死ね！」
即座にエンジンを吹かし、真夜は高速回転する前輪を浮かした。そのまま後輪で発進し、前輪をすぐ目前にいた一体の頭にぶつける。瞬時に頭部が破裂し、血飛沫（ちぶき）が舞う体を真夜は前輪を降ろして轢き潰し、大量の肉片と化せた。
一体に二度目の死を与えたバイクに別の一体がナイフを振りかざして襲撃を仕掛ける。だが、それよりも早くバイクは今度は後輪を浮かして奇襲を仕掛けた一体の体を撥（は）ね飛ばした。壁に激突し、床に転倒する一体。真夜はすぐに視線を前方にのみに向け、バイクを飛ばす。
べちゃべちゃべちゃべちゃ・・・・っ！
広い城内を疾走しながら次々に襲ってくる傭兵たちを轢き殺し、真夜は必死で地下室への入口を捜す。城内は複雑な通路が続いていたりしたが、しばらくして真夜は下の方向へ続く階段を見つけた。あそこか、と確信し、バイクの向きを変えるのも束の間、
「うっ・・！？」
突如後輪が破裂（バースト）し、バランスが崩れる。さすがにとっさに対応できず、真夜は横様に転倒し、身体を嫌というほど打った。バイクも転倒し、滑走しながら壁に直撃して止まる。急いで身体を立たせ、振り返ると、傭兵の一体が握る拳銃の筒先から煙が噴いていた。さらに地下への階段に続く通路もわらわらと現れた傭兵たちに埋め尽くされ、再び包囲される。
真夜は再度傭兵たちを見据えると、ジャンから渡された日本刀を静かに鞘から抜いた。すらりと美しい刀身がほんの少しだけまぶしい微光を滲み出していた。これから新たな血液を求めて塗られてい

くであろう刃を、真夜は躊躇うことなく、ちゃき、と鍔を鳴らした。
「・・・・どいて」
そして一瞬のうちに一体二体を頭から斬り伏せる。さらに二体。胴から首が離れ、転々と跳ねた。次々に斬られ、昇天していく命と魂。さすがに二十体以上斬ると、美しく煌いていた刀身も朱の血で塗ったくられ、斬れ味が鈍くなってきた。ここまでか。真夜は柄を片手で握ると、眼前に向かってきていた一体の額に刀身を深く突き刺し、さらにそのまま二体三体も巻き添えにして串刺しの状態のまま刃先を壁に押し入れる。犠牲になった三体は脳内に刀身の侵入を許し、壁に磔となって動かなくなった。真夜は三体と一緒に壁に深く突き刺さった刀の柄を離すと、すぐに拳銃を取り出し、弾丸を続々と放った。
ドン！ドンッ！！
刃物や棍棒などの武器を持ち、攻めてくる傭兵たちの頭部を破壊していくも数が多い。すぐに一体一体が真夜の目の前に現れ、爪や牙を曝す。
「があっ・・・！」
遂に一体が隙を突き、真夜の脇腹に強力な蹴りを入れた。悲鳴をあげ、真夜は倒れるが、すぐに身体を起こし、無数の毒牙から逃れる。真夜は？みかかってきた傭兵の額に筒先の照準を合わせると、
「引き金（トリガープル）を、引く！」
一発を打ち込み、頭を吹っ飛ばした。二体を右足で蹴飛ばし、さらに五体を銃弾で倒すと、真夜は空になった弾倉を捨て、すぐに予備の弾倉を装填した。即時に不死身の傭兵たちに銃弾の雨を浴びせる。
すでに真夜は５０体以上の傭兵（アンデッド）を昇天させていた。赤黒のシャワーを浴び、制服も、肌も、髪もどろどろとした赤黒い液体で染まっている。けれども彼女は血まみれになろうとも、最後まで傭兵と戦い続けた。たとえ何度傭兵に殴られて倒れようとも、爪で切られて傷を負おうとも、呼吸が激しさを増して見苦しく見えようとも彼女

は少しも眼光から一縷の光を消すことなく立ち上がり、足掻き続けていく。血で染まった制服もボロボロ、身体の至る箇所に傷を負いながらも真夜は銃弾を撃ち続けた。

残り三体。二体の頭を吹き飛ばした時点で弾丸は尽きた。武器を失ったと思った今なら勝てると思ったのか、最後の一体は地を蹴って駆け出してきた。ところが真夜はまだ武器を持っていた。彼女は拳銃を捨てると、殴りかかってきた片腕を左手で受け止めた。骨が砕け、ひしゃげる音。真夜の五指に捉えられた腕が血を噴き出してひしゃげた。指の骨が皮膚を破り、露になる。しかし、すでに死に、痛みを感じない傭兵は悲鳴をあげず、せいぜい虚ろな目で首をかしげる程度だった。真夜はそれが気に入らなかったのか、瞬時に傭兵の顔面を右手で鷲？みした。

「はあああああああああああっっっっ！！！」

ドッジボールでも扱うように傭兵の頭を振りかぶると、超高速で顔面を壁に叩きつけた。

衝撃に、その場の空間が大きく揺れる。

ぱらぱら、と漆喰（しっくい）がこぼれたが、傭兵はこぼれなかった。壁に貼り付いていた。後頭部と背中の肉は平らに潰れ、飛び出した眼球が、視神経で眼窩（がんか）からぶら下がり、振り子の如く左右に揺れている。

最後の一体を剛力で磔にした真夜は大量の屍たちに向かって黙祷を捧げることなく、すぐに地下への階段へと傷ついた身体を走らせた。

救済ではなく破壊の力を持つ私にできるのは、これが精一杯だ。

すみやかな死を与えること。彼らの想いを背負って前に進むこと。

ただ、それだけだ。

## 費えた光

ウェンディ。
ウェンディ。
どこ？どこにいるの？
・・・・地下通路を走りながら真夜は一つ一つ扉を蹴破り、中を確かめる。けれど、まだ見つからない。
先ほどのノヴァの言葉が耳元に蘇る。信じたくない。生きていてほしい。
だって、彼女はただ一人、醜い人間たちの中に存在する数少ない希望の光だから。
彼女が存在するだけで、世界はまだ変われるかもしれないから。
私は世界にほとほと絶望しきっていた。
光となり、いらないと闇である私を簡単に捨てた自分（セイバー）が憎くて、悲しくて、こんな世界など壊れてしまえばいいと思っていた。
でもウェンディ、あなたのおかげで私はやっと気づけた。
人は弱くて脆（もろ）い。
でも弱くて脆いからこそ、人は見苦しく足掻いてもがいて絶対にあきらめないという強さを持っている。そう信じてみたい。
ウェンディ、私はあなたと生きてみたい。一緒に人々を助けて世界を回って行きたい。まだ世界にはあなたのような希望がたくさんあるかもしれないから。もし、そんな人たちと出会い、ともに過ごしていけば、私の中に存在する怨念たちももしかしたら理解してくれるかもしれない。今まで破壊を行い続けてきた私だけど、あなたとならきっと大丈夫な気がするよ。根拠のない自信だけど、それでもＯＫと言ってくれたらどんなに嬉しいと思う。
だから・・・・だからお願い。死なないで！
「ウェンディ！！」
木製の扉を真夜は思いっきり蹴飛ばした。だが、視界に飛び込ん

できたものに一瞬で愕然となった。
「・・・・ウェンディ？」
ウェンディは、いた。
だが、遅かった。
仰向けに寝かされ、手足を拘束された彼女は腹部から何度も刃物で刺されたのだろう、朱血でじわりと染まっていた。だらんと開いた口からは涎(よだれ)が垂れている。開いた両目からは涙が跡を残し、生気を完全に失っていた。
「ウェンディ！」
真夜はすぐに駆け寄り、身体を激しく揺らした。脈まで測った。
嘘であってほしい。まだ生きててほしい。それだけの想いを切に願って。
だが、どんなに願っても彼女が動くことはなかった。
脱力し、真夜はその場で膝を着く。
うっ、うっ、と嗚咽が漏れ、左目から水の粒がこぼれた。
一生懸命走った。一生懸命戦った。
けれども、時は、運命は、希望の光が長く生きるのを許さなかった。
全部、私のせいだ。私が勝手なことをしたから、ウェンディは殺されてしまった。私を助け、友達になってくれたのに・・・・。
もう、私がウェンディにしてあげられるのはただ一つ。彼女の命を残酷に奪った魔女をズタズタに引き裂くのみだ。
真夜は涙を拭いて立ち上がった。
「ごめんね・・・・ウェンディ」
真夜は開いていた両目をそっと閉じ、手足を縛っていた拘束具を解いた。
魔女を倒したら、すぐにあなたを外の世界へ連れて行くから。
真夜は永遠の眠りに着いた最後の光にそう告げると、表情を引き締め、「実験室」を出て行った。

町では島民（レジスタンス）と傭兵（アンデッド）の死闘が続いていた。
銃弾を頭に受け、次々に倒れていくアンデッドだが、島民も一人二人と毒牙の餌食となり、新たな死人（アンデッド）となる。地獄を連想させる光景の中で、スズは本領を発揮して全身から電撃を飛ばして奮戦していた。
「こっちに来ないでえええっ！！」
襲いかかってくるアンデッドに次々と電撃をぶつける。まともに電撃を受け、火達磨になりながらもゆらゆらと蠢（うごめ）く呪われた者たち。怖いと思いながらもスズは生き残るために必死で身体から電撃を放つと同時に唇を痛いほど噛み締める。
目を逸らしてはいけない。この者たちの死を見届けるのも自分の使命だ。死を疎んじてはならない。死は、生と同じ意味を持つ、大切な存在なのだから。
「ぼーっとしてんじゃねえっ！」
ジャンの声に、スズは我に返る。即座に銃声が響いた。スズの真横で頭を飛ばされたアンデッドがゆっくりと横様に倒れた。
「馬鹿野郎ッ！何が何でも生き残るとキュアリベリオンと約束したんだろ？も少しで噛まれるトコだったんだぞ！」
「ご、ごめんなさい・・・って、ジャン！後ろ！」
「え？・・・・うわあっ！？」
振り返った瞬間、ジャンはアンデッドに抱きかかえられた。必死で抵抗するもアンデッドは彼から手を離さない。毒気を含んだ牙がジャンの首に忍び寄る。
いけない、ジャンを助けないと。スズはすぐに相手がひるむ程度に電撃を飛ばそうとするが、
「あうっ・・！？」
突如、別の一体が爪を振りかざし、スズの右肩を傷つけた。悲鳴をあげ、転倒する。急いで上半身を起こして右肩を見ると、幸いにも血が滲み出た程度の軽傷だった。しかし、立ち上がる頃にはすで

に三体が彼女の前に立ちはだかり、牙と爪を怪しく光らせていた。右肩を抑え、怯えながらスズは少しずつ身体が下がっていく。
「逃げろ！俺のことは構うな！！」
アンデッドに抱きかかえられながらジャンが必死で叫んだ。
「そんな！？できないよ！！」
「バカ！このままだとおまえも殺(や)られちまう！どこでもいいから、逃げて隠れるんだ！」
「で、でも・・でも・・・っ！」
すでに三体はスズを標的に走り出していた。唾を飛ばし、牙と爪が眼前まで迫ってくる。もう間に合わない。
ごめんなさい、キュアリベリオン・・・・ッ！
スズは目頭に涙が溜まった両目を、ぎゅっ、と瞑った。
次の瞬間、スズはアンデッドの牙と爪に身体を切り裂かれた・・・・・はずだった。
スズは生きていた。目を瞑った彼女の耳に聞こえてきたのはアンデッドの悲鳴だった。「え？」と思い、閉じていた両目を開く。しばらくして、スズは満面の笑顔が咲き誇り、歓声をあげた。
「みなさん！！！」
「よく頑張ったな、スズ」
銀に煌くサーベルを片手で握りながらキクが笑みを返した。彼女のほかにミチ、ヨツバ、ツバキ、カノン、アキラもいる。真夜に永遠の忠誠を誓った仲間、マイナス七人衆が再びここに揃った。さらにヨツバが開発した自動人形(オートマトン)・ヤミも駆けつけ、寸前で首を噛むところだったアンデッドを蹴りで吹っ飛ばし、ジャンを救出した。
「ヤミ！」
「助ケニキマシタ。無事デナニヨリデス、スズ」
「何だ？おまえの仲間なのか？」
ジャンが聞くと、スズは首を何度も縦に振った。すぐに救急箱を持ったヨツバが腰を降ろして姿勢を低くし、スズの右肩の怪我を診た。

「さ、診せて。大丈夫。私が治してあげるから。ヤミちゃん、治療の間、私たちを守りなさい」
「了解シマシタ、ドクター」
「よ～し、じゃあ行くとしますか」
アキラが暴れたくてうずうずしている感情を抑えながら、少しずつ身体から触手を出していく。
「これはとんだ清掃作業となりますわね」
ミチが両手に水球を召喚しながらほくそえむ。
「死んでもまだ命を奪おうとする醜い存在・・・嫌い」
フランス人形を抱き、花吹雪を巻き起こしながらカノンがぼそっと呟く。
「やれやれ、どうやらあなた方とお茶を楽しむことはできそうにありませんね」
首を左右に振って音を鳴らしながらツバキが余裕たっぷりに言い放つ。
「私たちの仲間を傷つけた罪は重いぞ。その重さを存分に知るがいい！行くぞ！」
サーベルの刀身を輝かせ、キクが不敵に微笑し、彼女の声を合図に一斉に傭兵軍団（アンデッド）へと走り出した。
「凄え！よし、俺も負けてらんねえっ！」
ジャンも機関銃を構えて後に続く。血気盛んな連中だが、こういう時は本当に頼りになるとスズは心から安堵した。
「ところでスズ、キュアリベリオンはどこです？姿が見えませんが」
右肩の怪我を治療しながら、ヨツバが聞いた。スズは答えた。
「キュアリベリオンは魔女の城に行ったよ。ウェンディさんというお医者さんを助けに・・」
ピタ、と治療する手が止まった。
「・・・今、何て言いました？」
「え？だから、ウェンディさんという人を助けに魔女の城に・・・」
「何ですって！？そんな・・・そんな・・・っ！？」

ヨツバは明らかに動揺していた。顔や手の筋肉が痙攣(けいれん)を起こしている。ぐるぐるメガネを掛けているためスズには見えないが、瞳は焦点を失っていた。
「そんな・・それは・・それは大変です。一刻も早く、私たちも城へ向かわないと・・・！」
「そ、そうだよね。早く助けに行かないと、もしかしたら危ない目に遭っているかもしれないし・・」
「ち、違う！そうじゃない！」
「え・・・？」
珍しく、ヨツバは混乱していた。彼女のこんな姿を見るのは初めてだった。
「『そうじゃない』って、どういうこと？」
「いいですか、スズ。よく聞いてください。あの城は、あの城はですね・・・っ！」
だが、ヨツバの声は次の瞬間に突如聞こえた咆哮に遮断される。
巨体と俊敏さが自慢のノヴァの用心棒、グロウリーとレベッカが棍棒と双剣を武器に遂に出陣したのである。

## 漆黒の鎌

ノヴァは最上階の自室にてソファに腰掛け、優雅に紅茶（ティー）の香りを楽しんでいた。壁には過去に多くの伝説の戦士を苦しめた悪魔の兵器「希望狩（ウィッシュ・ハント）」が飾られている。数々の希望を刈り取ってきた死神の鎌を見つめながら香りを楽しんだうえで彼女はそっと口にしようとする。だが、彼女のわずかな楽しみは次の一瞬にして破られた。

バキィッ！

突如衝撃が起こり、扉が思いっきり吹き飛ぶ。飛ばされた扉はそのまま天井に激突して粉々になった。せっかくの紅茶（ティー）を飲む寸前で止められ、ノヴァは小さく吐息を吐いてカップをテーブルに置く。扉が吹き飛ばされた位置に雨牙真夜（アマキマヤ）が額にいくつもの血管を浮かばせた表情で立っていた。

「・・・ノヴァ！」

「あら？よくまあここまで来ましたね。約束どおり、お茶を御用意しておきました。あなたもいかがです？」

凄まじい形相で睨まれてもノヴァはあっけらかんとした態度で真夜に紅茶（ティー）を勧めたが、真夜は無視した。

「ノヴァ、答えて。どうしてウェンディを殺したの？しかもあんな無残に・・」

「殺した？それはとんだ勘違いですわ。私は彼女を実験に使用したまで。残念ながら、また失敗してしまいましたが。いやはや、最強の傭兵（アンデッド）を生み出すのは難しい」

少しも反省の色が見えないノヴァの態度に言葉に、真夜は怒りがふつふつと沸騰した。

「・・・・ですが、なかなか楽しい実験でしたよ」

「！！」

「誰も助けに来ることなく、死にいく恐怖に怯え、痛みに泣きながら『やめてぇぇっっ！！』と叫ぶ声・・・・あああ～っ、今思い出

してもたまらないですわぁ～っ・・・・」
　真夜は遂に怒りが頂点に達した。
「そう、それはよかった。もし少しでも罪に怯えていたら、後味悪いもの。でも・・・今のあなたなら、サクッと殺(や)る以上のことをしても、私はちっとも後悔しない自信は・・・ある！友達の仇、討たせてもらうわ！」
　真夜は瞬時に疾走し、地を蹴り、拳を振りかざしてノヴァに飛びかかった。
「愚かな・・・・」
　だがすぐにノヴァが金色の両眼を光らせて衝撃波を与え、真夜は背中から壁に叩きつけられた。
「がはあ・・っ！」
　壁に亀裂が入るほどの衝撃を全身に受け、床に倒れる真夜。が、表情が歪みながらも両腕を立てて身体を起こし、両脚をガクガク震わせながらなんとか立ち上がった。
「あら？頑張りますこと。しかし武器も持たず、挙句に傷だらけの今のあなたがこの私に本当に勝てると思いますか？この口紅を使用してプリキュアに変身しても勝てなかったのに・・・・」
　ノヴァは懐から光球に封じられた「怨恨口紅(グラッジ・ルージュ)」を再度真夜に見せる。掌に乗せながら、ノヴァは邪悪な笑みを表情から消さぬまま言った。
「申し訳ありませんが、口紅(これ)を渡すわけにはいきませんよ。口紅の秘密がまだ解明していませんからね。あなたという玩具を私から盗ったあの女も葬りましたし、今度こそあなたの体に時間をかけてじっくり聞いていくとしましょう・・・・」
「あまり私を侮らないほうがいいわ。くれないというのなら、奪い返すまでよ！」
　真夜は再び走り出し、跳躍した。今度は右足を伸ばし、蹴りを飛ばす。だが、ノヴァはもう片方の手に杖を召喚し、先端を真夜に向けると、

「ひれ伏せ（イメルジナ）！」
呪文を唱える。瞬間、先端から青白い光が一直線になって真夜に直撃し、即時に床に倒れたと思ったら、
「！？・・何これ？体が・・・重い！？」
突然全身にとてつもない圧力を感じ、上半身すらも上がらなかった。支える腕が痙攣（けいれん）を起こし、麻痺してしまいそう。ノヴァは全身に圧力を受けながらも耐え続ける真夜を心から嘲笑して言った。
「ふふふ、いかがです？私が放ったのは重力を操る魔術なんですの。今、あなたの周りだけ重力が重くなっております。・・・・とはいえ、このレベルの重力だと普通の女でしたらとっくに参っているはず。あなた、本当に一体何なんですの？」
ぶん、と杖を横薙ぎに払い、真夜を重力の魔法から解放する。激しく呼吸を繰り返す真夜を冷酷な目で見つめながらノヴァは彼女からの返事を待ったが、真夜は一言も喋らず、左目で下から睨み上げるだけだった。それが真夜からの返事だと理解したノヴァは瞬時に額にしわを寄せ、不機嫌に表情が醜く歪む。
「そうですか。でしたら・・・・じっくり痛みつけた後、死んだほうがまだマシと後悔させるほど料理してやるよ、この小娘がっ！！」
遂に激昂したノヴァが杖を振りかざし、次の呪文を唱える。
「存分に苦しめ（ヒッケルノ）！」
今度は緑の光が真夜の身体を捉えた。光に包まれた刹那、真夜は膝を着いたままの状態で次第に上半身を後方へ反り始めた。
「が・・がああああっ！」
すでに限界にまで反り、背骨が音を立てる。両腕両足の関節もボキボキ音を鳴らし、激痛が嫌というほど身に沁みた。これ以上はもう限界だ。背骨が折れる。真夜がそう思った時、ぶん、とノヴァが杖を払い、魔法を解除した。が、それも束の間。
「壊れろ（アグバルド）！」
黄の光を受け、杖が払う方向に真夜は次々に自らの身体を打ちつけていった。壁に。テーブルに。床に。戸棚に。頭から再度壁に衝

突した時にはもうめまいが起こり、傷だらけの身体はふらふらになっていた。魔法を解除し、ノヴァはまたも嘲笑する。
「もういい加減思い知ったでしょう？そろそろ楽になったらいかがです？ご安心ください。あなたが私の求めていた最強の傭兵（アンデッド）に生まれ変わりましたら、私の記念すべき実験成功体第一号として可愛がってあげますから・・・・」
だが、真夜の返事は決まっていた。目の前に立つ魔女にのみ焦点を合わせて彼女自身の想い・・・怒り、憎しみ、悲しみが詰まった全ての暗黒（マイナス）の闇を含めて激を放つ。
「何回言えば分かるの！？お断りよ！私は死人なんかならない。最悪の死神としての存在を私が全ての世界に残さない限り、絶ッ対に死ぬわけにはいかない！足掻いて足掻いて足掻きまくってやるわ！私が全世界の頂点に立つその日まで！！」
「・・・・そう。ではお望みどおり、嬲（なぶ）りまくってやるよ！」
さらに額にしわ寄せ、激怒したノヴァは杖を高く掲げた。その瞬間だった。
壁に飾られてあった大鎌「希望狩（ウィッシュ・ハント）」が突如刃から強大な闇の波動を起こし、そのままノヴァに浴びせたのだ。いかに魔女といえども、さすがにこれは予想していなかったノヴァはまともに波動を浴びて「ぎゃっ！？」と悲鳴とともに横滑りに倒れる。その拍子でノヴァは片手に持っていた「怨恨口紅（グラッジ・ルージュ）」を離し、口紅は光球を破って真夜の足元に転がる。真夜がそれを急いで拾いあげた途端、ザクッ！と、三日月形の黒い刃が目の前の床に深く突き刺さった。
「『希望狩（ウィッシュ・ハント）』・・・」
大鎌の刃には以前と同様に無表情だが壮大な憎悪を含んでいる真夜の顔が映っていた。真夜はゆっくりと手を伸ばして柄を？んだ。大鎌は嘘のように抜け、片手で持っているにも関わらず、少しも重たくなかった。
「そんな・・・・なぜ、あなたごときが！？」
立ち上がり、愕然とするノヴァ。真夜は漆黒に染まった刃にもう

片方の手で触れ、凄まじい闇の邪気を感じ取った。
そうか、あなたも暴れたかったのか。
死神と呼んだ私に共鳴を起こして。
いいわ、あなたを相棒（パートナー）と認めてあげる。死神に鎌は付き物だもの。
一緒に存分に殺（や）り合いましょ。
真夜は再びノヴァに視線を戻し、口紅の蓋（キャップ）を外して高く掲げ、唱えた。
「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」
口紅から闇が溢れ、真夜の全身を包んでいく。左目を閉じ、真夜は黒蝶を全身に集めた。
襟の立った二の腕までの袖の漆黒の衣装。
その下の無地の白シャツ。
首筋にぞんざいに掛けられた、締まっていないネクタイ。
蛇眼を思わせる腹部に描かれた紋様。
黒と白のチェックの短いスカート。
右腕に三本の鋼鉄製の鉤爪が装備される。
最後に髪を掻きあげると、二つの黒のリボンが施されてツインテールになった。
眼帯を覆っていない左目を静かに開き、大鎌を持つ両手を頭上で器用に回してそのまま縦に振り下ろし、禍々しい光を刃から放つ。
「全てを無へ誘（いざな）う漆黒の堕天使、キュアリベリオン！」
新たな相棒「希望狩（ウィッシュ・ハント）」を肩に担ぎ。
背後から大量の黒蝶を飛ばしながら。
少女の姿を借りた死神が、再び降臨した。

## 惨殺

ノヴァは愕然となっていた。

自身ですら扱えなかった悪魔の兵器が、目の前にいる少女によって容易く片手で持ち上げられたのである。やむをえず怪力自慢の用心棒（ロウリー）に譲ったが、彼でさえも大鎌を扱うのはできなかった。だが、目の前に立つ漆黒の衣装を着た少女は平然と鎌の柄を握り締め、びゅん、びゅんっ、と禍々しく煌くその刃を曝している。まるで彼女こそが我が主と認めたかのように。

ノヴァの思惑を読み取ったのか、リベリオンが三日月形の刃を眺めて言う。

「グロウリーと言ったっけ？彼が手離し、私たちが初めて出会ったあの時・・・」

初めて相棒と出会ったときの記憶が蘇る。

不死身（アンデッド）の傭兵の手から離れ、刃に映った自身の憎悪の表情。

あの時、相棒は訴えていたのだ。血が欲しい。この世界全てを地獄に変えていきたいと。

相棒に蓄えられていた強大な闇の力が同様に世界を憎むリベリオンの闇（マイナス）に共鳴を起こしたのだ。

「あの時、私との運命を感じ、『希望狩（ウィッシュ・ハント）』はおまえに使われるのを拒否したようね・・」

今度はリベリオンが嘲り笑う。ノヴァはリベリオンの言葉に反応し、愕然としていた表情を戻し、金色の瞳を持つ両目を細め、睨んだ。

「そんな・・・・馬鹿なことがあってたまるものかあああああっっっ！！」

すぐさま杖を向け、「壊れろ（アグバルド）！」と魔術を飛ばす。

びゅっ・・・・！

彼女の魔術は即座に横様に振り払われた大鎌の刃で一瞬で粉々に

分散した。
「何っ！？」
「はあっ！！」
驚き、目を見開いたノヴァに向かい、リベリオンは三度目の跳躍をして一気に大鎌を振り下ろす。
「うっ・・！」
ノヴァは回避したが、衝撃で身体が思わず吹き飛ばされそうになる。すぐに両眼を光らせ、衝撃波を飛ばしたが、死神の鎌の前では何もかも無力に等しかった。
「感じる・・・感じるわ。この鎌は全てを凌駕し、地獄に変える最凶の兵器・・・もう誰にも私を止められない！」
ぶぅんっ！と、大鎌を横薙ぎに振り払い、強力な突風を放つ。部屋全体に風の刃（カマイタチ）が発生し、全身に浴びたノヴァは初めて悲鳴をあげ、次の瞬間には背中から壁に激突し、直径五メートル程度のクレーターを作り上げた。

城外では島民たちとマイナス七人衆が生ける屍（アンデッド）を相手に善戦していた。
アキラは全身から生やした黒の触手をムチの如く操り、次々に敵の頭を破壊していく。
「弱っちいやつは引っ込んでろ！」
さらに一体の体に束縛したまま持ち上げ、そのまま背後から襲撃を試みようとしたもう一体の頭に思いっきり衝突させた。
ミチは直径１０メートルもありそうな巨大水球を四個五個作り上げ、剛速球で敵に飛ばす。強力すぎる水圧をそのまま全身に受けたアンデッドは宙や地に撃墜した途端に体が分散した。
カノンは無表情のまま、アンデッドの牙と爪を容易にかわすと、冷ややかな視線を送り、彼らの全身に多彩な花を咲かせていく。体中から花が咲くという現象に、すでに死んでいる者たちは別段驚き

はしなかったが、さすがに鬱陶しく感じているらしく、爪で次々に切り裂き、散らしていく。だが、それが反撃を与える隙となった。カノンは今度は敵の足元から図太いツタの触手を生やすと、躊躇うことなく横薙ぎに操作したツタの衝撃で首を刎ねる。ぽとっ、とこぼれた首をカノンは冷酷な視線のままツタで破壊し、一言だけ静かに言い放つ。

「花を楽しむ感情も失った化け物・・・・・嫌い」

一方でツバキは得意の運動神経で敵の攻撃をかわし、時には蹴りを飛ばして応戦するかと思えば、

「申し訳ありませんが、お茶を楽しむこともできない哀れなあなた方といつまでも相手している暇はありませんのでね・・」

パチン。パチン。

指を鳴らし、突如現れたクリスタルの形状の物体で敵の頭のみを封じ、ボンッ！と爆発させる。頭部を失った体は血飛沫（ちしぶき）を噴きながら仰向けに倒れた。さらにツバキは指を鳴らして四、五体もの敵の頭を破壊する。

ヨツバが開発した戦闘型の自動人形（オートマトン）、ヤミも主と治療中のスズを守りながら手刀で次々にアンデッドの頭を深刺しにして破壊し、隙を突いて右肩に噛みついた一体には、

「ヤミちゃん、あなたに噛みついたその馬鹿を思いっきり殺（や）っちゃって！」

「ハイ、ドクター」

ヨツバの命令に応えて強大な闇の光球を片手に召喚し、顔面にぶつけて吹っ飛ばした。

キクも相棒のサーベルを振りかざして、右から左から前から後ろから襲いかかってくる傭兵たちを続々と斬り裂いていった。頭どころか腕も足も指も血を噴いて飛散し、五体不満足以上の状態で魔女の呪縛からやっと解放される。

「少しは学習しろ。そんな殺気ばかり放っていれば、どこにいようと私には格好の的だ」

相手の心や思考を読める力を持つキクは瞬時に背後を振り返り、「うおおっ！」の叫びとともに奇襲を仕掛けた一体の全身を斬り裂いた。
だがサーベルを、びゅっ、と振り下ろした刹那、もの凄い殺気を察知してすぐに首を横に向ける。
「ぐっ・・！」
ノヴァの用心棒がひとり、レベッカが俊足を活かして鋭い爪でキクの腕を切り裂いたのだ。表情が歪むものの、すぐに不敵に微笑む。
「へえ、少しは骨のありそうなやつがいるじゃないか。面白い。受けて立とう！」
レベッカは爪を曝し、風のように疾走した。目では追いつけず、次々に鋭利な爪で身体を刻みつけられる。呼吸が激しくなり、思わず膝を着いたキクの様子にレベッカは動きを止め、とどめを刺そうと背後から跳躍を試みようとした。
「そこだあっ！」
だが、キクがありったけの声を飛ばし、振り返り様に握っていたサーベルを投げ飛ばした。
ドスッ！
レベッカの額に銀の刀身が貫通し、どろどろと血が流れた。
「一瞬でも動きを止め、攻撃を仕掛けるタイミングを待っていた」
瞬時に相手の思考を読んだキクの勝利であった。
サーベルを引き抜くと、自分が敗北したのも気づかなかったであろう呆然とした表情を浮かべながら、レベッカの身体が倒れ伏した。
一方、ツバキはグロウリー相手に苦戦を強いられていた。棍棒を片手で振り回し、次々に攻撃を仕掛けるグロウリーにツバキはかわしながらも指を鳴らして頭を爆発させるが、ほとんど効いてないらしく、咆哮を轟かせて棍棒を振り下ろした。
「頑丈な体ですね・・」
さすがに疲労が限界に近づき、かわすのも困難になる。振り下ろされた棍棒を回避したツバキは突然足を滑らせて地面に倒れ、背中

を打った。
「うっ・・！」
さすがに余裕たっぷりだった表情に苦痛が走る。グロウリーはその隙を見逃さず、しめたとばかりに棍棒を振りかざし、まだ起き上がっていない彼女に思いっきり振り下ろした。
かわせない・・・っ。
ツバキは思わず歯噛みした。だが次の瞬間、巨大な水球が激突し、グロウリーの巨体が少しだけ揺れた。
「大丈夫？ツバキ」
水球を飛ばしたミチがツバキに駆け寄って手を取り、立ち上がらせた。「申し訳ありません」とツバキは心から謝った。
「けど、こいつは厄介だな。どうやって倒すんだよ？」
水球をまともに受けたにも関わらず、揺れる程度で倒れなかったグロウリーを見上げながらアキラが聞いた。カノンも同様の考えを抱いているらしく、眉間にしわを寄せ、わずかに表情に変化が出ている。ミチに支えられたまま、ツバキはしばらく考えた後、三人に伝えた。
「ミチ、カノン、アキラ。なんとかやつを倒れるようにしてくれませんか？私に考えがあります」
「どうするつもりですの？」
ミチが尋ねると、ツバキは拳を握り、
「この手に私の全力を込めます。だからお願いです。協力してください」
しばし後、三人はうなずき、再びグロウリーを見た。何とか巨体を立て直したグロウリーは再度棍棒を振り上げるが、
「ただ乱暴するだけしかできない人は・・・・・嫌い」
カノンがグロウリーの全身に花を続々と咲かせ、敵を困惑させる。胸や背中にまで咲いてきた花を毟り取るグロウリーだが、
「はあっ！」
そこを狙って、ミチが再び巨大水球を発射し、衝突させた。また

もや体に衝撃を受け、グロウリーはよろめく。そこへアキラが身体から伸ばした触手で両足を思いっきり払った。遂にバランスを崩し、巨体が粉塵を起こして倒れる。何とか倒れた体を起こそうとするグロウリーだったが、

「申し訳ありませんが、これまでです」

パチン。

ツバキが指を鳴らした。途端にグロウリーの全身を巨大なクリスタル状の物体が封じ込める。閉じ込められたグロウリーは全く何が何だか理解できなかっただろう。意識のない両目を白黒させた。

パチン。

再度指を鳴らす。物体が一瞬で破裂し、爆発した。通常の二倍三倍以上の威力にさしものグロウリーも耐えられなかった。肉体が膨張し、全身の血管が空気を吸収したかのように膨れ、破裂した。眼球はぽんと飛び出し、耳も腕も剥がれ飛び、裂かれた体の中からは大量の肉の塊が飛び散った。

原型を留めることなく夥(おびただ)しい血と肉の粒子と化したグロウリーは、その後風に巻かれ、空へと四散していった。

## 本当の敵

キュアリベリオンとノヴァの死闘は魔女の部屋から広く絨毯(じゅうたん)が敷かれた廊下へと移っていた。だが死闘といっても大鎌「希望狩(ウィッシュ・ハント)」を手に入れたリベリオンの前にノヴァはほとんど反撃することができず、窮地に迫られていた。呪文を唱え、杖から飛ばしても彼女の大鎌の一振りで魔術は容易に砕け散る。

「ひいっ、ひいっ・・・・・」

よもや絶対絶命となり、ノヴァはゆっくり、本当にゆっくりと歩み寄ってくる死神から逃げるしか術はなかった。

「逃げろ逃げろ・・・・あなたが逃げれば逃げるほど、お楽しみは増すんだから」

今やリベリオンは笑っていた。まるで子供のように無邪気に。何の邪悪性もなく。

彼女にとってはこれは戦いではなく、一種のお遊戯(ゲーム)に捉えていた。一番近いものでいえば、「鬼ごっこ」。

当然リベリオンが鬼で、ノヴァが逃げる人。ただし、この「鬼ごっこ」で鬼に捕まった人はその場で処刑されるのだ。この「鬼ごっこ」が終わるのは鬼に捕まった時か鬼の目を霞んでトモス島(エリア)から逃げ出せた時。だが後者の可能性は限りなく低い。

絶対に逃がすものか。せっかくの獲物を逃がしてたまるものか。

相手が逃げれば逃げるほど、捕まえた時の快感は素晴らしく気持ちいい。

そして、捕まえた獲物をどうグシャグシャにしてやろうかと思うと、もう楽しくて楽しくて仕方がない。ゾクゾクする。早くこの手で捕まえて滅茶苦茶に壊してしまいたい。

やがてふたりは広い空間に出た。ノヴァは壁際に背中から貼り付くように迫られ、逃げ場を失っていた。リベリオンは大鎌を肩に担いだ状態のまま、少しずつ歩んでいく。

「どうやらここまでのようね。どう？立場が逆転した気分は？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
ノヴァはただリベリオンを見据えたまま動かない。反論する気力さえ失せてしまったのか。
「今まで散々人を殺しては人形にして生き残りゲームを楽しんできた。もう十分楽しんだでしょ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・もう終わりよ（ゲームオーバー）！」
「・・・・・それは、どうかな？」
「！・・・・・・・・・・・・・」
肩に担いでいた大鎌を振り上げた刹那、ノヴァの口元が邪悪に笑った。
いつの間にかリベリオンの足元の床に直径２０メートル程の巨大な円が浮かび上がり、同時に複雑な文字や記号も描かれる。魔法円だ。強力な魔術発動を目的に使用するもので、彼女の周囲に浮かび上がった次の瞬間、ノヴァは両手を合わせて目を閉じ、呪文を唱えた。
「骨の髄まで燃え散れっ！！（アルメルヴォンインフェル）」
魔法円全体から赤黒の炎が噴き出し、轟々と燃え盛る。限界というものを知らない火炎地獄にリベリオンはあっという間に身体が包まれた。全身を焼かれた彼女は数秒後にはたちまち消し炭となって砕けていくだろう。ノヴァは安堵の息を吐き、再びおぞましく微笑んだ。
危機一髪だった。もし、リベリオンが少しでも罠の可能性を考えて接近せずに遠距離から攻撃を仕掛けてきたら、きっと死ぬのは自分のほうだっただろう。だが形勢逆転したと慢心が仇（あだ）となり、彼女は罠に気づくことなく、こうも簡単に引っかかってくれた。
本当に危なかったが助かった。だがこれ以上長居はできない。一刻も早く、あの方に伝えなければ。
ノヴァはそう結論に至り、その場から離れようとして、まだ燃え

続く炎を一瞥した。だが、その一瞥が彼女の足を止める結果となった。
赤黒の炎が、突然弧を描いたのである。しかも一つだけではなく、二つ三つ四つも。まるで生き物のように蠢く炎は次第に小さくなって消えていく。最後の一つが宙で大きく弧を描いて・・・大鎌の黒々とした刃に吸い込まれた。ノヴァは両目を大きく見開いた。
「お・・・おまえ・・・・な、なぜ！？」
炎が消えた跡にはキュアリベリオンが大鎌の柄を握り締めたまま平然と立っていた。しかも漆黒の衣装は少しも焦げていなかった。驚愕するノヴァにリベリオンは不敵な笑みを返す。
「残念だったわね、地獄は私の専門分野なの。だって、私は死神なんだから！」
「ぐっ・・・・おのれえっ！」
再び手を合わせようとするノヴァ。だが彼女の両手は瞬時に大鎌で起こした旋風（カマイタチ）で切られて血が飛び散り、悲鳴をあげた。
「ひ・・・・ひいっ、く、来るな来るなあっ！」
恐怖に発狂し、涙を流し、腰を抜かして後退りするノヴァ。あまりにも無様な姿にリベリオンは少し失望した。こんなやつに一度は私は負けたのかと。こんな醜いやつが仮にも世界の支配者として降臨しようと考えていたのかと。こんなどうしようもないやつがあんなに強く生きていたウェンディをあっけなく殺してしまったのかと。
真剣に考えてみよう。ノヴァの命に価値はあるのだろうか。
いや、ない。
全ての命に生まれてきた意味があるとか、命の重さは平等で尊いといった心優しい大嘘を、彼女は信じていない。
あんなに美しく強いウェンディと、醜く卑しいノヴァの命が同等であるものか。
判決を言い渡す。死刑。
死神は今ここに、ノヴァの基本的人権と命の価値を認めない存在として決め、処刑準備にかかった。

大鎌「希望狩（ウィッシュ・ハント）」を大きく振りかざす。三日月の刃に赤黒い炎が灯り始めた。それは勢いを増し、刃全体に燃え盛っていく。ガチガチと恐怖で歯を鳴らし、泣き続けるノヴァ。
「地獄を少しだけ味わいなさい・・・・プリキュア！リベリオン・ヘル・ファイア！！」
炎を灯した漆黒の刃が一気に振り下ろされた。
地獄の炎が頭から呑み込み、魔女の身体を焼き尽くしていく。炎を全身に浴びながらノヴァは絶叫をあげた。あっという間に腕がぽろと取れ、灰にしていく。ノヴァの身体も灰と化するのも時間の問題だろう。
「これで島民たちは自由ね・・」
リベリオンはそう呟き、振り返ってその場を後にしようとした。ノヴァの最期を見届ける気など少しもなかった。
「ふ・・・・ふふふふふふふ・・・・っ」
だが突如聞こえた笑い声に足を止め、リベリオンは振り返った。炎の中で片方眼窩から眼球が取れた状態のノヴァがおぞましく笑っていた。リベリオンが訝しげに見つめていると、ノヴァは笑い声を響かせながら言い放った。
「ふ・・・・ふはははははははっ！キュアリベリオン、これで終わったと思ったか？終わってない。まだ終わっていないぞ！」
「？・・・・・どういうこと？」
「教えてやる。キュアリベリオン、島を支配する魔女は私ではない！このノヴァではないのだ！本当の魔女は別にいる！」
「おまえじゃない？じゃあ・・・誰なの？」
「・・・・もう、おまえは会っている」
「は？今何て・・？」
だが、ノヴァはその質問に答えなかった。彼女は炎に全身を包まれながら邪悪に満ちた笑い声でその場の空間を震わせた。
「今に分かる。だがその時こそ、おまえは本当の地獄を思い知ることになる！ざま見ろ！ふはははは！はーっはははははははは

ははははっ・・・・・！」
笑い声を最後まで響かせながら、ノヴァは赤黒の炎の中で消し炭となって消えていった。やがて地獄の炎も勢いが衰え、消え始める。しかし、リベリオンの頭の中にはノヴァの残した言葉だけがぐるぐると回り続けていた。
島を支配している魔女がノヴァではない？本当の魔女は別にいる？
しかも私はそいつに会っている？一体どういうことなの？全部終わったんじゃないの？
その時だった。
「・・・・・・・・・・・・・・・っ！」
混乱が入り混じっている脳内に衝撃が走る。
そうだ、あの時。
リベリオンは“あの時”の記憶を掘り返す。
“あの時”彼女はどうやって私の所まで来た？
ここは生ける屍（アンデッド）たちの巣窟であり、うじゃうじゃいるというのに。
“あの時”彼女はどうして私の居場所が分かった？
ノヴァに聞くでもしないと、分かりそうにない。でも彼女は容易に私の所に辿り着いた。
まるで最初から知っていたかのように。
行き着くべきではない解答に、行き着く。
辿り着くべきではない解答に、辿り着く。
けれども、これが「真実」なのだとしたら・・・。
ふと、背後から足音が聞こえた。リベリオンはゆっくり、ゆっくりと首をねじり、振り返る。
数秒後、小さく絶望のため息を吐いた。
「あなただったのね・・・」
彼女は返事に代わりに笑顔を返した。いつもと同じ、優しい笑顔だった。
「でも・・・でも、どうしてあなたなの？」
リベリオンは悲しみの目で見据え、その名を口にする。

「ウェンディ」

## 現実

「おはよう、マヤ。その様子だと気づいたみたいだね、私が本当の魔女だということに・・・・」

相も変わらず笑みを浮かべたまま、ウェンディはリベリオンに語りかけた。にこにこ微笑みながら彼女は続ける。

「いつ気づいたの？」

「・・・・・・・っ」

信じたくなかった真実から目を逸らさず、彼女は目の前の現実を受け止めて口を開く。

「たった今よ。でもよく考えてみれば不審な点があったわ。あの時・・・私がノヴァに敗れて『実験室』に監禁されていた時、あなたはたった一人で『実験室（アンデッド）』を突き止めて私を助けに来てくれた。でも、ここは魔女の城で生ける屍の巣窟よ。あんなにたくさんもいる連中の目を霞んで私を助けに来るのはかなりの至難の業。この私でさえも手間取ったんだから。それに・・・」

リベリオンはここで一息吐き、続ける。

「『実験室』の場所・・・あなたがノヴァにさらわれた時も私はノヴァに聞いて『実験室』が地下だと知ったのよ。でも、あなたはあの時『実験室』に悠然と辿り着いた。それで思ったの。あなたは最初から知っていたんじゃないかって、『実験室』の場所を。つまり・・」

「ご名答。そう、ここは私の城だよ♪」

ウェンディは笑いながら乾いた拍手を響かせた。

「マヤも聞いたよね？この城に住み、魔女に殺された領主のことを。その領主はね、私のパパなの。そして領主（パパ）を殺した魔女が私♪」

「！・・・・・・・・・・・・・・」

「五、六年前だったかな？ママを早くに亡くして島を管理する領主の一人娘として育っていた私はある日、西洋黒魔術に手を触れたの。

死者の蘇らせ方や呪殺の方法などあらゆる黒魔術の魅力に虜(とりこ)となった私はパパに内緒で自分でも黒魔術を日に日に行うようになったの。すると、自分でも信じられないくらい見る見るうちに上達していってね、一、二年後には黒魔術を完璧に習得(マスター)してしまったの。今ではこんな人形まで簡単にできちゃった♪」

パチン。ウェンディが指を鳴らすと、突然リベリオンの前に何かが降ってきた。突然降下してきた物体を間近で見た途端、リベリオンは思わず息が詰まった。

ウェンディだった。だが腹部が紅の血で染まり、少しも動かない。突如現れたもうひとりの彼女に見覚えがあり、リベリオンは瞬時に記憶を呼び覚ます。

「これは、さっき『実験室』で見た・・・」

「そう。これは私が魔術で生み出した人形なの。よく精巧にできてるでしょ？どっちが本人なのか分からないぐらい・・・・」

道理で脈がなかったわけだ。

「どうやら私には黒魔術の才能があったみたいね。でもある時、私が黒魔術を行っているのを遂にパパに見られたの。パパは怒って無理やり黒魔術をやめさせ、私が苦労して集めた毒薬や魔術書を捨てたの。私はそんなパパが邪魔に感じてきて・・・・」

ウェンディの優しかった笑顔がおぞましく歪んだ醜い微笑へ変わった。

「パパを呪い殺してやったのよ！」

「なっ・・・！？」

リベリオンは左目を大きく見開き、驚愕した。

あんなに美しく輝いていたウェンディが実の父親を殺したというのか。反抵抗組織(レジスタンス)の主導者(リーダー)であり、最後の希望として島民たちを率い、ノヴァやアンデッドと勇敢に戦っていたあの姿は全て嘘だったのか！？自分を友達と呼んでくれたあの優しささえも。

「パパは娘の私に殺されるのに気づいて一度は逃げたけど、魔術を完璧に得た私の前ではどこまで逃げようと無駄よ。私の呪術であっ

けなく殺してやったわ。少し手間取ったけど、これで邪魔者もいなくなって私も存分に黒魔術に打ち込められたわ」
殺人を犯したことについて少しも罪悪感のない表情でウェンディは邪悪に笑い続けた。ここに至って、リベリオンはウェンディを友達ではなく今の今まで事態を裏で操っていた黒幕と認識した。だが、まだ分からないことがある。リベリオンはその疑問を口にした。
「質問していいかしら？」
「どうぞ」
「あなたが本当の魔女で黒幕だったというのは分かった。でも、どうして反抵抗組織（レジスタンス）の主導者（リーダー）として戦っていたの？そもそも私が相手にしていたノヴァは何？」
「ん～・・・・先に二番目の質問から答えようか」
ウェンディは両目を閉じて人差し指で額をトントン軽く叩きながら言った。
「ノヴァは私の唯一の弟子よ。彼女も私と同じ黒魔術の魅力に囚われた一人だった。私のもとでしばらく修行して上達していったんだけど、どうも不死身（アンデッド）の傭兵生誕魔術などは苦手で、いつも失敗していた」
「何？じゃあまさか、あのアンデッドを生み出していったのは・・・・」
「そう、私よ♪」
「！・・・・・・・・・・・・・・・・」
衝撃に衝撃が重なり、愕然とする。
「な・・なんで・・・・そんなことを？」
そう問うと、ウェンディは平然と答えた。
「暇潰し、よ」
「はぁ！？」
今の状態のまま鏡を見たら、きっと彼女はあんぐりと口を開け、左目は虚ろに映っていただろう。それだけ今のウェンディの台詞は衝撃的だった。

暇潰し？
一体どういうこと？
彼女が言葉の意味を理解しかねていると、再びウェンディが言った。
「そう、暇潰し・・・・マヤの言うお遊戯（ゲーム）と一緒よ。私はそのお遊びに参加した。ただそれだけ。最後の希望と崇められ、反抵抗組織（レジスタンス）の主導者（リーダー）に選ばれたこの私が本当の魔女だと知ったら、島民はもっともっと絶望するでしょ？私は島民たちに希望と絶望を同時に与えるためにこの自ら考えた暇潰しを楽しんでいたのよ。みんなにつまらない希望を与えて弄び、そして絶望の淵へと追い詰めて『現実』というものを思い知らせるためにね！“化ける”のは魔女の十八番（オハコ）だからね♪弟子（ノヴァ）も面白そうと喜んで敵の王様になってくれたわ。これが一番目の質問の答えよ。満足した？」
「そんな・・・！？」
そんな、そんなくだらないもののために自分は今まで振り回されていたというのか。
たかだか暇を潰すためのお遊びのために島民たちは無残にも命を奪われ、挙句に死んでもなお人形として弄ばれてきたのか。
「マヤ、あなたの登場はもちろん予想外だったよ。あの伝説の戦士プリキュアだなんて誤算もいいところだと少し焦ったわ。でも光じゃなく闇のプリキュアだったのは幸運（ラッキー）だった。おかげでスリリングな暇潰（ゲーム）しを楽しめたよ。あなたには本当に感謝している。ありがとう」
リベリオンが絶句していると、ウェンディは衣服のポケットから金色の懐中時計を取り出して、時刻を確認した。そしてにんまりと、卑しく微笑した。
「でも、そろそろゲームオーバーね」
「・・・何？」
瞬間、リベリオンの身体が崩れた。全身が痺れている。もの凄い吐き気を感じ、即座に口を抑えた。握り締めていた大鎌が音を立て

て横に倒れる。
「が・・・がはっ！」
出てきたのは真っ赤な液体だった。
胸がどうしようもなく痛くて、苦しい・・・・・っ！
「な・・何をした！？」
胸を抑えながらリベリオンは目前に立つウェンディを見上げた。
邪悪を通り越して狂気に満ちた笑みを浮かべたまま、ウェンディは返事した。
「マヤ、忘れたかな？ジャンの家まで運んだあなたを治療したのは誰だっけ？」
「！・・・・まさか」
ふふ、と魔女は笑みを絶やさない。
「そう、治療中に密かにあなたの身体に時間をかけてじわじわと効く毒を射させてもらったわ」
「き・・貴様ッ！」
立ち上がろうとするも、毒に侵された身体はもう言うことを聞かない。すぐにバランスを崩して前に倒れ伏した。はぁ、はぁ、と激しく呼吸を繰り返す彼女にウェンディはゆっくりと近づき、耳元にそっと囁く。
「マヤ、もう一つ教えてあげる。あなたに射した毒はね、島民全員にも一週間に一回、少しずつ射しているのよ。そろそろ効果が出始める頃ね」
「！・・・・・・・・・・・・」
「これが『現実』よ、マヤ。あなたには誰も救えない。・・・・私が見つけてきた『希望狩（ウィッシュ・ハント）』はあげるわ。せめてもの結納品として持って逝きなさい。それじゃね♪」
段々と、魔女の足音が遠のいていく。
リベリオンは歯噛みする気力さえなかった。
絶望が、少しずつ彼女に訪れようとしている。

城の外では島を包んでいた濃霧が薄くなりつつあった。やがて灰色の霧は完全に消え、青空が見える。残りわずかになっていたアンデッドと戦っていた島民たちは次々に気づいて、喜びの歓声をあげた。
「霧が！ということは・・・・」
「魔女が遂に死んだんだ！」
「俺たちは自由だぁーっ！！」
両腕を挙げ、抱き合い、涙を流す島民たち。
「やった！キュアリベリオンがやったんだな！」
「うん！そうだよ、ジャン！お姉ちゃんがノヴァを・・」
「お姉ちゃん？」
「あ、つい」
「ま、いいじゃねえか。もうそれで呼んでやれよ。案外喜ぶかもしれねえぞ」
「そう・・かな？」
「そうそう。でも、ま、今は自由になった喜びを・・・・」
その直後だった。ごほっ、と咳き込むと同時にジャンが口から血を吐いたのは。
「え・・・？」
即座に歓喜の表情が停止するスズ。
「な、何だ・・・・これ？」
手に付着した吐血を呆然と見つめた後、ジャンはそのまま斜めに倒れた。
「ジャン！」
すぐに駆け寄るスズ。ジャンだけではない。七人衆を除き、島民全員が吐血し、喘ぎながら次々に身体が倒れていく。
「ど、どうした！？」
最後のアンデッドを倒したキクが声を飛ばす。急いでヨツバが一人に手を触れ、毒物による症状と気づいた。

「一体誰が毒を・・・まさか！？」
「く、苦しいよぉ・・・・・」
胸を左手で鷲？みし、目から鼻から紅い液体を流しながらジャンが右手をスズに伸ばす。スズは泣きながら徐々に冷たくなっていく彼の手を握るしかできなかった。
「助け・・・・て」
直後、彼の手から力が抜けた。ジャンは剥きだしていた眼窩を静かに閉じた。
「ジャン？・・・・・ジャン！ジャン！ジャァァァァッッンッ！！」
彼に縋り付き、号泣するスズ。他の七人も涙しなかったものの、やるせない表情でしばらく立ち尽くしていたが、
「！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
キクが遺体だらけの町に何者かが訪れたのに気づき、彼女をはじめスズ以外の全員が瞬時に一定方向を見据えて両目を細めた。
「！・・・ウェンディさん！」
たった一人で歩いてくるウェンディの姿に、スズがすぐさま駆け寄ろうとする。身体に抱きついて泣きじゃくろうとした彼女だが、即座にヤミに腕を引っ張られ、制止された。
「きゃっ！・・な、何するのヤミ？離して！」
「申シ訳アリマセンガ、ソレハデキマセン」
「どうして！？」
すると、ヨツバが彼女の前に来て、両肩を？んで衝撃の告白をした。
「スズ、よく聞いて！あの人があなたのいうウェンディという人なら、絶対に近づいちゃいけません！彼女が・・・彼女こそが、この島を支配して島民を苦しめていた魔女なんです！」
「えっ・・？」
一瞬、スズはヨツバの言った意味が理解できなかった。しかし、今の彼女の台詞を頭の中で復唱し、ようやく衝撃が全身を走った。
「う・・嘘。嘘でしょ？な、なんでそんな嘘吐くの？」

「残念だけど本当よ、スズちゃん♪」
「！」
彼女にしてみれば信じたくない真実だったし、嘘だと思い込みたかった。
だが、その嘘をウェンディ本人が容易く壊した。嘘で作り上げた虚像（ウェンディ）が細かな破片と化して散りばめられていく。虚像の向こうには狂気に微笑む最悪の魔女が佇んでいた。
「島民に少しずつ毒を盛っていたんですね？」
宙を見据えたまま何も言わないスズから目を離してヨツバが尋ねる。ウェンディは彼女に振り向き、首を小さく縦に振った。
「あなたたちはさしずめマヤの仲間といったところかな？なかなかの観察眼ね。・・・・で、どうして私が本当の魔女と気づいたの？」
「これです」
魔女の問いに対し、天才科学者は一冊の書物を見せた。出した途端、初めてウェンディの表情がわずかに反応したのを確かめ、ヨツバは続けた。
「森の中の洞窟で眠っていた白骨死体のそばから見つけました。遺体の名前はアルフレッド・ゲイナー。この島の前領主にしてあなたのお父様ですね？この日記には今まであなたの黒魔術のことやご自身の命の危険性について遺書として詳しく書き残されていましたよ」
「・・・・そう。パパ、そんなの残していたんだ。ちゃんと調べとくんだった」
ひょっ、と肩をすくめたウェンディにスズは堪えきれずに叫ぶ。
「ウェンディさん！どうして？あなたが魔女だというのなら、なんでこんなことを・・？」
「また説明しなきゃいけないの？面倒くさいなぁ・・・・」
ぶつくさと本音を呟いた後、ウェンディはリベリオンに聞かせた同じ理由を語った。全員が全員衝撃を受けて動かなくなったのを確認し、ふぅ、と息を吐く。
「おまえ・・・・・・・・・・・・本当に人間かよ？」

衝撃に震えるアキラがようやく声を出す。ウェンディは余裕の笑みで返した。
「キュアリベリオンが言ってたよ。人間は心の奥底に『快楽』や『欲望』といった化け物を飼っているとね。私は今、自信を持って言えるよ。私も心の中に化け物を飼う“立派な”人間だとね！」
「キュアリベリオンは今、どうしているんです？」
「死んだよ♪」
「「「「「「なっ・・！？」」」」」」
ツバキの問いに答えたウェンディの台詞に全員が愕然となる。彼女たちの反応を見て、あはは、とウェンディは心から愉快そうに笑った。
「いくらプリキュアでも毒が体に沁み込めば太刀打ちできないでしょ？もう地獄に招待されたんじゃない？」
笑いを止めない魔女に七人衆は少し間をおいた後に怒りと憎しみに揺らめく眼光を飛ばす。
「・・あの人がそう簡単にくたばるなど、私たちは信じちゃいない。だが、あの人を守るのが私たちの役目。貴様の言うことが本当かどうかはともかく、あの人を傷つけたのならその痛みの責任取ってもらおうか」
「それって、私を殺すってこと？ふぅん、だったら・・・・殺(や)ってみなよ！」
狂気に満ちていた両目が邪悪に変わった。
ウェンディの身体の周りを黒い闇が集い、彼女の衣服を変えていく。
地に届くほど裾の長い暗黒のスカートに胸元に黒薔薇の装飾が付いた肌着風の黒の上着。
両肩には羽衣に似た肩掛け(ショール)が施される。
栗色の髪は腰まで伸び、目元には古代爬虫類を思わせる鱗に似た紋様が描かれた。
今まで姿を隠してきた最凶にして最悪の魔女が完全に姿を見せ、

邪悪に満ちた唇を異常なまでにんまりとさせた。

## 怨念

リベリオンは毒に身体を侵されながらも必死でもがいていた。
「ぐっ・・・・・！」
血を吐き、はぁ、はぁ、と呼吸を繰り返しながら、それでも腕を立て、身体を起こそうとする。だがすぐに耐え難い激痛にその身体はすぐに床へ戻った。
「はぁ・・・・はぁ・・・・」
苦味を磨り潰したような血の味を噛み締め、リベリオンはなんとか身体を仰向けにさせる。霞んだ視界に薄暗い天井がなんとか見えた。
私は、このまま死んでしまうのか・・・・。
それだけが頭に思い浮かぶ。事実、毒は少しずつ全身を回り、否が応でも侵していく。激痛を感じて「くっ・・」と声が出た。
もう彼女の左目には、一縷の光さえも見えていなかった。
友達（ウェンディ）を失ったと思った時にも絶望が襲ったが、それでも友達を殺したノヴァを倒すことで気持ちだけは晴れると思ったし、助けれなかったが彼女という一人の人間が存在していたという事実からまだ世界には彼女のような人間が多くいるかもしれないとわずかながらの希望を捨てずにいた。
ところが、その希望だと思っていた彼女こそが最悪の絶望だった。
強く、美しいと見えていた姿は全て嘘で塗り固められた虚像だった。
本当の彼女は醜くて卑しい、腐りに腐ったまさに大嫌いな“人間”。
そんな人間に自分は少しでも希望を託し、未来を求めていたのだ。
「う・・っ・・く・・・・っ！」
いつの間にか、左目からは涙が流れていた。頬を伝い、血を含んだ口の中に入る。苦味にしょっぱさが混じった。

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ。
馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ。
悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい・・っ！
叫ぶ力がなくても、歯噛みする力がなくても、どうしても感じてしまう自らの無力さ。けれども、もうどうしようもない。もうどうにもできない。
毒に侵された身体に、入る力は微塵もない。全てを忘れ、このまま永遠に眠ってしまいたいとさえ思い込むようになっていた。
そうだ、考えてみればいい機会かもしれない。
雨牙真夜の闇の心（マイナス）から生まれた自分は自らの存在を否定し、死への身投げ（ダイブ）をしようと思い悩み、苦しんだことさえある。でもできなかった。身体の中に巣食う数々の怨念たちが無理にでも制止し、世界を破滅させろと言い聞かせた。この怨念の呪縛から解放されるには本当に全世界を破壊するしかない。そう結論に至り、彼女は世界を壊すというそれだけのために数々の腐敗した国を仲間とともに滅ぼしていき、地獄に変えた。
でも、もういいよね？もう終わりにしていいよね？
もう力が少しも出ない。それに眠くてたまらないの。
おしまいにさせて。お願いだから。
「かっ・・・・・」
そう発し、リベリオンは霞んでもう見えない視界を閉じようとした。
ふぅん・・あきらめるんだ？
「！・・・・・・・・・」
突如聞こえた声。しかもとてもよく知っている声。

誰？
閉じようとした左目を開け、瞳を天井から前方へ移す。
少女が一人、立っていた。黒い長髪をなびかせて少しずつ歩み寄ってくる。少女の顔がはっきりと見えた時、薄目になっていた左目が大きく見張った。
私？いや、違う。
少女（こいつ）は、雨牙真夜（キュアセイバー）だ。少女（こいつ）は眼帯をしていない。
「きっ・・・！」
貴様、なんでここにいる！？
遂に会えた最大の敵に疑問を飛ばすも声にならない。真夜（セイバー）の姿をした少女は無表情のまま腰を降ろし、腕を伸ばすと、そのままリベリオンの首を絞めた。
「がっ・・・！？」
ぎりり、と強い力に呼吸ができなくなる。酸素を求めようとする口がぱくぱく動く。
こいつ、本気で私を殺す気か・・・・！
途端に絶望しかなかった左目の瞳に激しく憎悪が増す。
ふざけるな。この私に全てを押し付けて捨て、幸せになろうとしているおまえにだけは殺されてたまるか。たとえ世界全ての人がおまえの行為を許したとしても私だけは絶対に許さない。おまえそのものを壊すその時まで絶対に死ぬものか。死んでたまるものか。
だから、だから、だから、その手を離せっ！！
「うあああああああああああああああああっっっっっっ！！！！」
咆哮が全てを押し返す。少女の手を握り締め、力ずくで首から離した。
「ああああああああああああああああああああああっっっっっっ！！！！」
急いで身体を起こし、同時に立ち上がった少女に必死の形相で衝突する。身体が傾いた少女に、リベリオンは毒に侵されてよろめきながらも全身にまだ残っている力を込め、拳を振り上げた。刹那、拳が少女の顔面に衝突し、勢いよく跳ね飛ばされる。はぁ、はぁ、

と血を吐きながら呼吸を繰り返すリベリオンに壁に激突した少女はふらつきながら身体を起こして振り返ると、ようやく口を開く。

・・・やればできるじゃないか。

明らかに少女の声ではない、むしろ男性の声が三重に重なっているような声にリベリオンは瞬時に警戒した。

「誰？真夜じゃないの？」

自分と同じ顔を持つ少女はそのままリベリオンを見据え、再度口を開いた。

私はおまえの知る雨牙真夜（キュアセイバー）ではない。私はおまえの記憶から彼女のイメージを作り出した怨念だ。

「・・やっぱり。でも何のつもり？冗談だったら、少しも面白くなんかないわよ」

冗談ではない。私たちはおまえに生きていてもらわないと困るのだ。死なせるわけにはいかない。私たちには悲願がある。この混沌とし、憎悪にまみれた世界を永遠に終わらせるという願いを託している今、おまえこそが私たち怨念にとっての“希望”。願いが叶うまではおまえの命は私たちが預かっている。悲願も果たさぬまま、こんな小さな島で死なすことなど許さない。生きろ。たとえ見苦しかろうと、生きて生きて生き抜け。

「何それ？私を励ましているの？」

おまえは言っただろう？どうしても復讐したい敵がいると。私がこの姿で現れて首を絞めた時、おまえは瀕死の状態にも関わらずに足掻いてみせた。それは、おまえにまだ生きなくてはならない目的

があるからだ。そうだろう？

「・・・・・・・・・・・・・・・」

力が欲しければ私たちが貸そう。おまえが求めるのなら、私たちは喜んで手となり、足となり、牙となり、爪となり、盾となり、剣となろう。おまえの命じるままに従い、憎悪を最大限に放とう。だから、足掻け。足掻いて全てを壊せ！

真夜の姿を借りた怨念が漆黒の闇に変化し、リベリオンの身体に纏った。

「何っ！？」

訳が分からず、困惑していると今度は身体に激痛が襲い、思わず抱え込んだ。毒ではない。身体の中で数多の怨念が暴れている。

牙が疼き、血が騒いでいる。

理由もなく突き上げてくる衝動のはけ口を求めて身体の芯から数えきれないほどの憎悪が吠えている。

貪（むさぼ）るように。急くように。

震えている。

「うあああああああああああああああああああああああああああああっっっっっ！！！！」

毒に侵された時よりも激しすぎる痛みに、苦しみにリベリオンは膝を着き、顔をあげて咆哮した。

次の瞬間、彼女は無意識のうちに眼帯を取り外し、紅に染まった瞳のない右目を露（あらわ）にした。

城の外では七人衆が苦戦していた。

魔女ウェンディの黒魔術により、町の至る所から全身が泥で形成された土人形（ゴーレム）が現れ、襲撃を仕掛けてきたのである。なんとか能力

を駆使して奮戦するも、倒しても倒しても次々に出現し、きりがない。やがてヤミ以外疲労が限界に達してきた七人衆を幾多のゴーレムが包囲する。戦いで傷ついた身体を抑えながら、それでも目の前の敵に向けて眼差しと構えを忘れない。

「まだ頑張ろうとするなんて、根性だけはあるみたいね。でも、もうここまでよ。観念して大好きなご主人様のもとに逝ったほうが幸せなんじゃ・・・・」

口角を上げながら言ったウェンディは、ふと、背後から強い視線を感じる。振り返ると、彼女の邪悪な微笑みは一瞬にして消えた。

「あなた・・・・まだ死んでなかったの？」

その台詞に、七人衆も同方向を注視する。

「キュア・・・リベリオン？」

スズが呆然とした表情で呟いた。他のみなも同じ表情を浮かべていた。

全員の視線の先、そこには彼女たちが忠誠を誓った主（あるじ）・キュアリベリオンが立っている。しかし、彼女は明らかに今までと違う異様な雰囲気を醸し出していた。

まず、周囲。彼女の周囲の地から黒く、巨大な「手」が数本生え、手首をうならせて揺らめいている。「手」は開いたり閉じたりしてこれから捉えるであろう獲物を今か今かと待ち構えているようにも見えた。次に犬。黒い毛に覆われ、狼に似た数匹の犬たちは、はっ、はっ、と舌を出しながら呼吸を繰り返して鋭利な牙を光らせる。鋭い眼光はただ一点、目の前の獲物（エサ）のみに集中していた。

そしてキュアリベリオン。彼女は両目とも真紅に染まっていた。普段は眼帯で隠している右目もオープンにしている左目も瞳はなく、血のように真っ赤に染まっている。その紅い両眼に籠っているのは、怒りと憎悪のみ。

邪悪を超え、狂暴性を発揮したリベリオンはただ一人、ウェンディのほうに振り向いて言葉を漏らす。

「殺す。皆殺し。一人残らず、全員・・・・殺す！」

## 狂気

複数存在する土人形（ゴーレム）の兵士にまず凶犬たちが動いた。疾走、地を蹴って跳躍し、牙で兵士の頭を根こそぎ噛み切る。ゴーレムも応戦するが、闘争心で両眼を光らせた凶犬は目が追いつかないほどの速度で翻弄し、あっという間に泥で形成された体をその牙で、爪で粉砕する。半数が倒された時点で凶犬たちは後ろに下がった。と思うと、今度はリベリオンの周囲でぐんにゃりと手首をうねらせていた悪魔の「手」が伸び、人の背ほどの長さまである五指で残党を捕らえ、一気に握り潰す。中には真上から叩き潰すものもあった。

兵士をものの数秒で倒したリベリオンの新たな力に仲間である七人衆もしばし棒立ちになる。だがウェンディは不快極まりない表情で立っていた。両眼が紅いリベリオンは、パチン、と指を鳴らす。凶犬たちも悪魔の「手」も瞬時に漆黒の闇と化して彼女の身体を纏った。憎悪と邪悪、そして狂気が入り混じった形相を再び向ける。

眉間がピクピクと微動している額を人差し指で抑えて魔女は小さなため息を吐いた。

「死に損ないが、まだ遊び足りないと言うの？」

リベリオンは答えない。ただ片手に握り締めた大鎌を禍々しく煌かせているのみだ。

「・・・・いいわ。相手になってあげる。気が済むまで楽しみなさい。もう生き返（リセット）ることができないように！」

途端にウェンディは呪文を素早く唱え、右手から火球を飛ばした。リベリオンは素早く回避し、飛び退る。すぐにブーツを履いた両脚を折り、疾走した。

次々に迫り来る火球をかわし、大鎌で粉砕し、距離を縮める。魔女の眼前にまで肉薄し、リベリオンは横様に跳び蹴りを放った。辛くも風を切る結果に終わる。瞬時に反応したウェンディは上半身を素早く沈めることによって、彼女の蹴りをかわした。惜しくも敵に

一手を与えるのに失敗したリベリオンはなんと両手で着地し、反動を利用して再び長い両足を勢い任せに浮かす。魔女の顎を目がけ、逆立ちの姿勢で腰を回転させるように捻った。が、これも相手は回避し、不発に終わった。跳ね上がり、着地し、足を前後に広げて体勢を低くし、身構える。

一瞬、ウェンディは躊躇したかに見えたが、すぐに動いた。呪文を静かに唱える。彼女の周辺の飛礫（つぶて）が無数に宙に浮かんだ。尖端に鋭さが増し、刃物という凶器に変わった飛礫（つぶて）は魔女が人差し指で差した途端に高速移動を開始、リベリオンに一斉襲撃を仕掛けた。

リベリオンはかわそうとしなかった。迫ってくる無数の刃物に対し、何点かは大鎌で払うもののほとんどを肌身に受け、鮮血が迸った。それでも紅に染まった両眼だけはウェンディのみを捕捉し、ひるまない。全ての刃物を受けたリベリオンは倒れることもなく、即時に地を蹴って駆け出したかと思うと、姿を消して一瞬で彼女の目の前へと急迫し、大鎌を高く振り上げた。

「甘い！」

が、大鎌は振り上げられた状態のまま急停止された。いや、リベリオンの全身が止められていた。彼女の身体にはいつの間にか無数の糸が絡みつき、動きを束縛していた。糸は針金のように硬く、その先端は住宅の壁や電灯など至る所に貼り付いている。まるで蜘蛛の巣だ。絡まれば絡まるほど糸は食い込み、肉体に傷を負わせ、その傷口から赤の液体が吹き出す。

「どう？私の呪術で生み出した蜘蛛の糸のお味は？この糸はそう容易には切れはしないよ。動くこともできないあなたにもはや私に勝つ術はない。いい加減にくたばっちゃいなよ♪」

ウェンディはそう言うと、右手に短剣を召喚し、閃光の動きを見せた。ひゅん、と尖端が動けないリベリオンの左胸に吸い込まれた。一瞬だ。漆黒の衣装の下に着服していた白地のシャツの胸に赤黒の薔薇が咲いた。リベリオンは紅い両眼を引ん剥き、咆哮を青空に轟かせた。

魔女は薄ら笑いを浮かべたまま、さらに短剣の刀身を奥深くまで突き刺そうとした。ずぶずぶと、赤黒の液体が左胸から溢れてくる。
「あのまま安らかに眠っていればこんな痛い思いをすることもなかったのに・・・・死ね！」
刃を身体の内部への侵入を試みようとして、ウェンディは突然視界が暗くなり始めたのに気づいた。
何・・・・？
真っ暗で何も見えない。右も左も、上も下も闇。一筋の光も射していない。音もなく、全てが静寂の世界にウェンディは握っていた短剣を離し、慄(おのの)いた。
一体、どうなっている・・・・？
ウェンディがそう疑念を感じた時、突如ありとあらゆる声が怒涛に押し寄せてきた。憎悪、悲哀、怒り・・・絶望(マイナス)にまみれた声が彼女の身体の中を駆け巡り、心臓を、肺を締めつける。一気に吐き気を感じ、めまいが起こる。次の瞬間、彼女は絶叫した。
「あああああああああああああああああああっっっっっ！！！」
絶叫が轟いた刹那、闇が掻け消え、青空が覗く。視界は再び戦場に戻り、目の前に短剣が左胸に突き刺さったままのリベリオンが映る。自身に何が起きたのかも分からず、呼吸を繰り返すのも束の間、信じられないことが起きた。
ぶちっ。
大鎌を捉えていた糸が切れたのである。それだけではない。大鎌を持ち上げていた片腕を縛っていた糸も突如切断し、少しずつリベリオンの身体の自由が解放されようとしているではないか。
そんな馬鹿な・・・・！？
ウェンディは魔女として初めて驚愕していた。自慢の蜘蛛の糸がこうも簡単に破られようとしている。いくらプリキュアといえども、一体はこいつの力はどれほど未知数なのだ！？
遂に両足を縛っていた糸も切れ、リベリオンは赤い両眼を曝して左胸から短剣を抜き取り、歩み出した。だが完全に束縛から逃れら

れたわけではない。腰や肩、腕に絡みついた糸が食い込み、次々に血を噴いているのだが、リベリオンは憎悪の形相のまま歩行を止めない。身体から次々に血が噴こうが、糸の先端が貼り付いていた外壁がバキッと音とともに取り外れようが、一歩ずつ魔女のみを狙って確実に近づいてくる。

こいつ、もはや私を殺すこと以外に何も見えていないのか・・・・・!?

狂気がその場の空間を支配し、紅の両眼で睨まれたウェンディは初めて恐怖を感じ、いつの間にか後退りしていた。

キュアリベリオンの変貌に慄(おのの)きながらも、七人衆はただ戦いの行方を見ているしかできずにいた。しかし、リベリオンが自らの身体を傷つかせながらもウェンディを追い詰めていく様子に堪えきれず、悲痛の面持ちでスズが仲間に尋ねた。

「ねえ！お姉ちゃんは一体どうしちゃったの！？」

「お姉ちゃん」というのがキュアリベリオンと理解したうえで全員は顔を見合わせ、ミチが答える。

「私たちにもよく分かりません。おそらく、キュアリベリオンの中にある闇の力が暴走したのでしょう・・」

「闇の力？」

「ええ、膨大な闇がキュアリベリオンを支配し、見境をなくしているのです。きっと相手を倒さぬ限り、止まらないでしょう。たとえどんなに自分が傷つこうとも・・・」

「そ・・そんな、止めなきゃ！」

「無理だ」

キクが言った。

「私たちには止めることはできない。迂闊に止めようとしたら、キュアリベリオンが私たちに牙を剥く可能性もある。キュアリベリオンが傷つくのを見ているのは心痛いが、ここはおとなしくしている

のが懸命だ。それに暴走であれ、魔女が倒されれば、それで・・」
「それじゃ、きっと、ダメなんだよおっっ！！」
スズが涙ながらに訴えた。大気がピリピリとなり、全員が一瞬、彼女の気迫に押されてしまった。
「スズ・・・？」
「キクさん、私たち七人衆は何ですか？私たちの願いを叶えてもらう代わりにお姉ちゃんを守ると誓い合った忠実なる僕なんでしょう！私たちはその時点で命をお姉ちゃんに預けているんじゃないんですか？私たちはただ外敵からお姉ちゃんを守ればそれでいいんですか！？」
「「「「「！・・・・・・・・・・・・・・」」」」」
スズの言葉一つ一つに全員が何も言えなくなる。
「私は臆病です。人のこと言えないかもしれません。ジャンや島の人たちを殺した魔女のことも許せません。でも、だからといって、お姉ちゃん一人に全てを背負わせたくないんです！きっと、これは私たちみんなで背負わなきゃいけないんです！私、怖いんです。お姉ちゃんがこのまま遠くに行ってしまいそうで。壊れてしまいそうで・・・・・これ以上、傷つくお姉ちゃんを見てられないんです！！」
「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」
スズの悲痛の叫びにみな再度リベリオンを見やる。
糸が食い込んで身体中に傷を負い、血まみれになろうとも、彼女は大鎌を片手に歩みを止めずに魔女を次第に追い詰めていた。

「あっ・・・・！」
小石に躓(つまづ)き、ウェンディは転倒した。腰を強く打ち、すぐには立てない。そうしている間にもリベリオンは接近してくる。傷だらけになってもなお歩みを止めない彼女にウェンディは心の底から恐怖した。

正気じゃない。
狂っている。
自分を傷つけてさえも私を殺そうとするとは。
一体何が彼女の原動力となり、動かしているのだ？
疑問に思うも解答に辿り着く余裕はもはやない。リベリオンは再び彼女の眼前にまで迫り、足を止め、大鎌を振り上げた。三日月に曲がる漆黒の刃が禍々しく光る。ウェンディは、ぎゅっ、と両目を閉じた。
「「「「「「やめてくださいっっっ！！！」」」」」」
声が七人分聞こえた。
今、漆黒の刃を振り下ろそうとした少女の腕に、足に、腰に、数人の少女が抱きついた。

**悪**

彼女の身体を抑えたのは三人の少女だった。ミチが腕を、キクが腰を、ツバキが足に抱きついて離さない。憎悪と邪悪、そして狂気に満ちて傷だらけ、血まみれのリベリオンの身体を三人は必死の表情で制止し、懸命に言葉に出して伝える。

「おやめください、キュアリベリオン！もとにお戻りください！」

「闇の力に乗っ取られるな！目を覚ませ！」

「これでいいんですか？このまま魔女を殺しても満足できるんですか？暴走した力に負けないでください！」

ミチ、キク、ツバキの順で言うが闇の力が暴走し、両目が紅く染まった彼女に三人の声は届いていなかった。すぐに力任せに振り払い、三人の手から逃れると、

「・・・邪魔を、するなああっっ！！」

闇の力を込めた拳と蹴りを浴びせ、三人を吹き飛ばした。地に倒れ、呻き声をあげる三人を一瞥し、スズやカノン、アキラとともに離れた位置で見守っていたヨツバはすぐに隣に立つヤミに命令を下した。

「ヤミちゃん、キュアリベリオンを止めて！」

「ハイ、ドクター」

と、ヤミは弾丸の速さで瞬時にリベリオンの背後に回り、羽交い締めにして動きを止める。容姿こそは十七の少女でありながら全身緻密に構成された機械の体で人間の倍の握力と筋力を発揮するが、信じられないことにリベリオンはこれも力任せに解き、振り返りざまに腹部に手をかざして波動を放ち、ヤミを塀の壁へと吹っ飛ばした。轟音と同時に粉塵が舞い上がり、ぐたりとなったヤミが姿を見せる。機械の体だからこの程度で大きな痛手（ダメージ）を受けてはいないが、それでも起き上がるには少々手間がかかるようだ。

ヤミを吹き飛ばしたリベリオンの全身に今度は黒の触手が何重に

も絡みつき、縛り上げる。アキラが顔以外全ての肌から数えきれないほどの触手を生やして彼女を束縛していた。だが魔女が仕掛けた蜘蛛の糸を破った力の持ち主だ。この程度では不安は拭えない。アキラは隣でフランス人形を抱いて立っているカノンに声をかける。

「カノン、おまえも手伝え」

「言われなくても・・」

と、カノンも自身の能力を発揮してリベリオンの足元に数十の多彩な花を咲かし、細かな胞子を浴びせる。彼女が咲かせる花の胞子には強力な神経毒が含まれ、死に至らぬが一瞬にして相手を痺れさせ、動けなくなる。触手による拘束と身体を痺れさせる毒の胞子。強力な二重の仕掛けを受けた相手は普通ならその場で参るはずだった。だが、今の相手は存在そのものが絶望の闇。普通であるわけがなかった。

「それで私を封じたつもりかあっ！」

毒の胞子などどこ吹く風。リベリオンは大鎌でいとも容易く切り裂き、縛っていた全ての触手をバラバラに細かく分解した。

「う、嘘だろ！？」

驚くアキラ。カノンも分かり難いが眉が吊り上がり、動揺している。拘束を解いたリベリオンは即座に疾走、ふたりに肉薄し、大鎌をかざすが、

「ぐっ・・！」

寸前でキクがサーベルの刀身で振り下ろされた刃を制止した。

「キク！」

「ふたりとも、早く離れろ！」

彼女の言葉に従い、ふたりは急いでその場を離れた。

凄い力だ・・・っ。

刃を交えていたサーベルが徐々に押されていく。いくら闇の力が暴走しているとはいえ、こんな巨大な鎌を容易に操り、なおかつ鍛錬に鍛錬を重ねてきた私を押し返すとは。

さすがは・・・・私の主人だ。

今まで能力を駆使して数々の相手の心や思考を読んできたが、今自分の心は能力を使わなくても分かる。まあそれは相手が他ならぬ自分自身なのだから当然といえば当然なのだが、今自分の心は皮肉にも喜んでいるのだろう。自身が認めた主人がこんなにも強いことを曲がりなりにも再確認できたのだから。

「何がおかしいっ！？」

いつの間にか表情に笑みが出ていたのだろう。リベリオンは交えていた漆黒の刃を離し、隙を突いて脇腹を強く蹴りを入れ、彼女を再び飛ばした。

「やむを得ません・・っ！」

パチン。ツバキは指を鳴らす。リベリオンの周囲を透明なクリスタルに似た物体が素早く形成され、彼女を全身ごと封じ込めた。ツバキの能力はそれで相手を封じた後に物体ごと爆破するものだったが、爆発を起こすのは二度目に指を鳴らした時だ。二度鳴らさなければ爆発は起きない。闇の暴走が静まるまでリベリオンには硬度に形成された檻の中でおとなしくしてもらった後で物体を解除する魂胆だった。

ところが、リベリオンはこれもあっさり破ったのである。大鎌の刃による内側からの一撃で彼女を閉じ込めていた檻は亀裂が広がって砕け、崩壊したのだ。破片が飛散する中をリベリオンは悠然と歩む。

「本当に、今日はとことんお茶の時間が楽しめそうにありませんね・・っ！」

思わず苦笑いを浮かべるも、彼女も次の瞬間波動を腹部に受け、住宅の外壁に叩きつけられた。

「あ・・ああ・・・あああああ・・・っ！」

スズはただただ立ち尽くしている。みな暴走したリベリオンを制御できずに吹き飛ばされていく。仲間が倒されていく様子に彼女はただ唖然としていた。

今やリベリオンに孤独だった自分を助け、優しくしてくれていた

面影はどこにも見えない。狂気にまみれ、全てを見境なしに暴れ回る破壊者に彼女は豹変していた。仮にも特別な存在だと想いを寄せていたウェンディに裏切られた心の傷が相当痛むのだろう。いや、心などとうに捨てているのかもしれない。それでもきっと、彼女は本当は深い悲しみに暮れている。ウェンディだけを標的にし、仲間であろうと邪魔する者を容赦なく払い除ける行為こそが彼女の悲しみがこのうえなく深いのを物語っている。

だから、だからスズはリベリオンを止めたかった。泣き叫ぶ彼女を心から助けたかった。どう助けたらいいかは分からない。だけど、リベリオンは自分を助けてくれた。だから、今度は自分がリベリオンを助ける番なのだ。

巨大水球を粉砕し、ミチを殴り飛ばした隙を見つけ、スズは勇気を振り絞り、リベリオンの背中にしがみついた。

「てめっ・・！」

「お姉ちゃん・・・・・もうやめてぇぇぇっっ！！！」

振り返ったリベリオンがわずかな呪詛を吐いたのとしがみついたスズが心の底から叫んだのと同時だった。激情のスイッチにオンが入り、帯電体質の身体から強烈な電撃が迸る。当然電撃は彼女にしがみつかれていたリベリオンの全身にも流れ、身体中を縦横無尽に駆け巡る電撃に彼女は絶叫をあげた。リベリオンの暴走を制止しようとした七人衆もスズの行為に驚き、注視している。しばらくした後、電撃は止まり、スズはリベリオンの身体から後退して離れる。まだわずかに電気が肌の上を走り、リベリオンは、すとん、と脱力したのか両膝を着いた。両目がまだ紅に染まっている彼女にスズは表情が一瞬申し訳なさそうになったが、すぐに引き締まり、口を開いた。

「ごめんなさい、お姉ちゃん。こんなことをして・・・。でも、聞いてほしいの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

神妙な面持で顔を上げたリベリオンにスズは言葉を続ける。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんの気持ちは分かるよ。すっごく分かる。私もそうだったから。でも、自分を見失っちゃダメ。暴走したまま相手を倒しても、それはお姉ちゃんの力じゃないんだよ。お姉ちゃんが本当になすべきことは一体何？こんなやつ相手にお姉ちゃんは全てを投げ打っていいの！？」

「！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

リベリオンの表情にわずかだがハッとしたような反応が出る。スズの声が届いている証拠だ。目頭に涙を溜め、スズはありったけの想いを込めて伝える。

「お願い。もとに戻って！本当の目的を思い出してよ、お姉ちゃんっっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

すっ、とリベリオンの左手が動いた。左手は泣いているスズにゆっくりと伸び・・・ぽん、と頭に置いた。

「！・・・・・お姉ちゃん？」

「ありがと、スズ。心配かけたわね」

右目は紅いままだったが、左目は黒い瞳が見える、無表情だがいつもの優しさを帯びたキュアリベリオンがそこにいた。

「お、お姉ちゃん！」

歓喜に溢れ、笑顔になるスズ。リベリオンは彼女に目線を合わせたままくりくりと頭を撫でる。

「あなたのおかげよ。やっと思い出したわ、自分が本当にやるべきことが・・」

「「「「「キュアリベリオン！」」」」」

ふと気づくと、七人衆全員がふたりに駆け寄っていた。みな表情に笑みを浮かべている。いつも無表情なカノンとヤミまでも口元がわずかに綻んでいた。リベリオンはスズから目を離し、立ち上がると、

「みんな・・・怪我させちゃって、本当にごめんね」

深々と頭を下げる。初めて見る彼女の謝罪にみな一度は驚いたが、

「なーに言ってんだ。この程度、どうってことねえよ」
「私たちは、別段怪我してない・・」
と、アキラとカノン。
「あなたこそ、怪我だらけじゃないですか。少し診せてください」
「ドクタート同意見デス。診察シテモラッタホウガヨロシイカト・・」
と、ヨツバとヤミ。
「お戻りになって何よりです」
「少々肝を冷やしましたが・・」
「還って来てくださり・・・本当によかった」
ツバキ、ミチ、キクが笑顔で返す。
リベリオンは頭を上げ、全員の笑顔を一人一人確かめる。スズが笑いながら顔を上げた。
「お姉ちゃん、たとえ世界が敵に回っても、私たちはお姉ちゃんを絶対にひとりにしないよ」
「お姉ちゃん?」
「あ・・・、やっぱり嫌?」
「・・いいよ。『お嬢様』と呼ばれるよりもずっといい」
「よかった♪」
安堵し、スズはまた笑みを見せた
ああ、そうか。リベリオンは理解した。
旅が長かったためにいつの間にか忘れていたけれど、自分にはこんなにも美しい仲間がすでにいたんじゃないか。どうして忘れていたのだろう。彼女たちがそばにいる。ただそれだけで自分はこんなにも心が満たされていたというのに。
ようやく仲間と“再会”できた喜びにみなしばし至福に酔いしれる。
だが、その時間は突然にして破られた。
「・・いつまでイチャイチャしている・・・・っ!」
「「「「「!・・・・・・・・・・・・」」」」」

おぞましい声に全員振り返る。両眼に激しく怒りを籠らせた魔女(ウェンディ)が立ち上がっていた。
「もう暇潰(ゲーム)しは終わりよ。殺す・・・・全員殺すわ！」
悪鬼の形相で呪詛を吐きながらウェンディは懐から小さな瓶を取り出す。瓶には桜色の液体が入っていた。蓋を外し、中身の液体を一気に口から喉の奥へ注ぎ入れる。液体を飲み干したウェンディはリベリオンを睨んだまま空になった瓶を捨てた。次の瞬間、強大な邪気が彼女の全身から放たれ、ウェンディは白目を剥き、この世のものとは思えぬ凄まじい叫び声をあげた。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっっっっ！！！！」
徐々にウェンディは身体が変貌を遂げていく。
美しく整いながらも邪悪に染まっていた顔は裂け、代わりに巨大で、尖端が光る長い二本の角を頭から生やした悪魔が幾千の毒牙が生えた口を広げる。全身は暗黒に統一され、至る所に眼球に似た不気味な紋様が次々に浮かび上がった。両腕は膝まで長くなり、五指からは一撃で身体を分散してしまいそうな鋭利な紅色の爪が伸びる。肉体も異常なまでに発達した筋肉が剥き出しになり、体長も二倍へと膨れ上がった。
醜い怪物に完全になりはてたウェンディが上空へ向け、凄まじい咆哮を飛ばした。
「ば、化け物！？」
瞬時に怯え、後ろに退いたスズに対し、怪物に変貌したウェンディが男とも女とも区別がつかない声を飛ばす。
「そうだ！化け物だ！だが、貴様らとて私と同じだ！どんなに叩きのめしても無様に何度でも這い上がる貴様らも化け物同然、私と同類に違いないのだ！」
「・・おまえと一緒にするな」
だが、怪物の声にリベリオンが黒の眼帯を右目に戻しながら冷ややかな左目を静かに返した。

「何でもかんでもゲーム感覚で寝ぼけたことを口にするおまえと、私たちを同じにするな。虫唾が走る、いえ、腸が煮えくり返る・・っ！」
「何だと？じゃあ、貴様は何だ？絶大な滅びの力を持ち、人間が嫌いと言っては躊躇することなく邪魔する者をことごとく潰してきた貴様は『悪』ではないと言うのか！？」
「『悪』・・ね」
そのたった一文字に、リベリオンはしばし自嘲してから返す。
「確かに私は『悪』よ。『極悪』かもしれない。でもね、『悪』じゃない・・・！」
「・・・・何？」
「おまえは暇潰しで人々に淡い期待を持たせ、何人もの命を弄んだ末にゴミのように捨てた。・・・・そんなおまえは悪でもない。悪の下を行く『悪』よ！」
「だとしても、私と貴様と何が違う？貴様ははっきりと『悪』ではないと胸を張って言えるのか！？」
「ええ、言えるわ。分からないんだったら、教えてあげる。『悪』と『悪』の違いを」
「何？」
違い？違いなどあるのか？だとしたら、何だ？
ウェンディが二つの眼球をギョロリと曝して答えを待つ。リベリオンは醜い姿を見据えたまま、再び口を開いた。
「それはね、『覚悟』よ！」
「『覚悟』？」
「そう、『覚悟』。たとえ残虐に見えたとしても、本当の悪はいつだって覚悟ができているの。自分に歯向かう者、無関係の者の命を容赦なく奪う覚悟。幾千もの幸せを壊して絶望をもたらす覚悟。そして・・・世界を敵に回してでも野望を果たす覚悟と世界中から憎しみを受け入れる覚悟。私たちは色々な覚悟を背負ったうえで、今までずっと足掻き続けてきた。でも、おまえに『覚悟』は少しもな

い。あるのは安い『欲望』と『快楽』だけよ。もし違うと言うのなら、今から証明できるわよね？・・・・今から私たちに壊される覚悟を！」

いつの間にか、リベリオンを含め、全員が並び、ウェンディを見据えていた。全員が全員、恐ろしいほど無表情で、しかし目に凄みが増していた。彼女たちから発される異常なまでの殺気にウェンディは一瞬ひるむ。

な、なぜこいつらは恐れていないんだ？

今や人間を超えた私に本気で勝てると思っているのか？

それともキュアリベリオンの言うとおり、こいつらはとうに決めているのか？世界を敵に回してまで抗う「覚悟」を。あんなまだ小さい娘までもが。

この集団は、一体・・・・？

相棒「希望狩（ウィッシュ・ハント）」の刃を煌かせ、リベリオンは無表情のまま、しかし、しっかりと視線は敵を捕捉したまま前に躍り出た。

「あなたは、私たちの中の『死神』を一気に眠りから覚ました。楽に逝かせるつもりなんて毛頭ないから。光栄に思いなさい」

「・・・・ふ、ふっっざけんな！死ぬのは貴様らだあっっ！！」

怒りと焦燥感が混じり合ったうえに衝動に駆られて魔女が毒牙を剥き、地を蹴り、走り出した。

漆黒の刃を曝し、死神も疾走する。

全てを「終わり」にするために、最悪と最悪が激突した。

## 死神

双方の距離が一気に詰まった刹那、怪物(ウェンディ)の長い爪とリベリオンの大鎌が同時に衝突した。衝撃に火花が散る。一瞬身を退いたリベリオンだが、すぐに振り向きざまに右腕の鉤爪の一撃を浴びせた。鼓膜を引き裂くような嫌な音が響いて怪物は悲鳴なのか奇声をあげる。だが瞬時に醜い眼球を向け、裂けた口から、びゅっ、と何かが飛び出し、それはリベリオンの左肩に食い込んだ。

「うっ・・・！」

舌、である。だが先端は針のように尖り、殺傷力を十分に持っている。深く刺さった左肩は瞬時に舌がもとの口に戻った途端に血が噴き出し、相手の表情を歪ませる。さらに再び右手の爪が迫り、危うく回避したものの、右頬を引っ掻かれ、わずかに鮮血が迸った。身を退いた瞬間、胸に膝蹴りを受け、抑えながら四、五歩後退する。ふふん、と怪物が嘲笑の声を飛ばした。その嘲笑に、リベリオンは左肩を抑えながら怪物を睨む。

全く、たいした女よ。

私を騙し、ここまで絶望を見せてくれたのは。

でも、おかげで吹っ切れたわ。お礼に私が教えてあげるよ、本当の地獄というものを。

リベリオンは抑えていた左肩から手を離し、疾走、再び距離を縮める。相手の行為に応えて怪物も走り出し、双方が急迫した時点で爪を横薙ぎに払った。が、リベリオンは身体をかがめてかわすと、一度折り曲げた両脚に力を込めて少し低めに跳躍、思わず見上げた怪物の顔の両端を？む。リベリオンは瞬時に呼吸すると、首を少し後方へと反らした。

ゴッ！

頭突き。鉄拳や蹴りよりも強烈な衝撃。よもや少女がこんな喧嘩技を使用するなど予想外だった怪物は奇声をあげて片手で顔を抑え

たまま後退した。顔面に食らい、激痛が治まらない怪物は当然回復が容易に追いつかず、
「リベリオン・デストロイド・ボール！」
剛速球で発射された漆黒の光球を腹部に受け、
「リベリオン・ソニック！」
さらに続けて赤黒の衝撃波を浴びて筋肉の体が遂に耐え切れずに吹き飛ぶ。一度は体を地面に殴打した怪物だが、すぐに体を横転させて立ち上がり、怒りの咆哮を轟かせる。
「調子に乗るなあっ！！」
両腕を頭上にかざす。それを合図というかのように先ほど身体を拘束し、傷つけた蜘蛛の糸が四方八方から再度リベリオンを束縛しようと奇襲を仕掛けた。
「二度も同じ手に引っかかるか・・っ！」
だがリベリオンは両腕に強い邪気を纏わせると、
「リベリオン・デモンズ・カッター！」
集約した邪気を刃に変え、無数に飛ばした。鋼のように硬かった糸が、一瞬で漆黒の刃に切り裂かれ、細かな塵へと変わっていく。驚き、固まった怪物にリベリオンは相手の視界から姿を掻き消すと、
「なあっ・・・・！？」
「この一撃は、かなり痛いわよ・・！」
一瞬で眼前に現れ、闇の力を限界にまで溜め込んだ右手を強く握り締めて顔面に思いっきり飛ばした。
今まで以上の奇声が轟き、怪物の体が青空へ上昇し、数秒後に地上に激突した。さすがにこれはかなりの痛手だったらしく、怪物は起き上がるも呼吸を激しく繰り返し、片膝を着いている。リベリオンは遠方から見据えたまま、再び姿を視界から消した。
今度はどこから・・・・っ！？
慌てて首を左右に振り、姿を捜す。背後を振り返ろうとして、
「がっ・・・・！？」
背中から胸にサーベルの刀身が貫通した。サーベルはすぐに引き

抜かれ、怪物の胸から血が噴出する。急いで振り返ると、キクが血塗られた刀身を素早く振り下ろした。今度は腹筋を十字に斬られ、どくどくと赤黒の液体が溢れる。
「お・・・・おのれえっ！」
裂けた口から舌を発射し、反撃に出るもすでに相手の思考を読み取っていたキクは尖端が身体に食い込むよりも素早く刃を閃光と化させ、舌を斬り裂いた。
「ぎゃあああああああああああっっっっっ！！！」
絶叫をあげ、後退した怪物に今度はヤミが仕掛けた。指示はヨツバが伝える。
「ヤミちゃん、まずは膝を狙って！」
「次にお腹を！」
「顎を蹴りなさい！」
ご主人様の命令に忠実に従い、自動人形（オートマトン）の少女は可憐に、そしてしなやかに身体を動かして怪物に強力な打撃を次々に与えていく。息吐く暇もないほどの殴打を受けた怪物は立っているのもやっとと思うほど体が左右に揺れ始めていた。
「ヤミちゃん、最後にその醜い顔をぶっ飛ばして！」
「ハイ、ドクター」
返事するやいなや、ヤミはがら空きの顔面に右腕を横に一閃させた。奇声とともに怪物の体は横様に飛んで倒れた。
それでも頑丈な体を持つ怪物はすぐに立ち上がった。立ち上がった途端にすぐ目の前にカノンが冷ややかな視線を向けたまま立っているのに気づく。
こうなれば、この小娘を人質に。
そう思ったのか、怪物は駆け出し、両爪を曝した。
「命を命とも思わない醜い人間・・・嫌い」
だが、即座に周囲に多彩な花が咲き誇り、大量の胞子を浴びた怪物は体が激しい痙攣（けいれん）を起こして動きを止めた。そこへ。
パチン。パチン。パチン。

両手両足をクリスタル状の物体が封じ、爆発を起こした。
「あああああああああっ・・・・・！！」
血の噴水が怪物の四足から巻き起こり、再び絶叫する。眼前にはツバキがカノンの隣に立っていた。
「申し訳ありませんが、私もあなたとは一緒にお茶を楽しめないようでしてね！」
そう言い終えた途端に怪物の視界からふたりの姿が揺らめく。しばらくして、自分が直径１０メートルもある巨大水球の中にいることに気づいた。ごばっ、と口から泡（あぶく）を吐き出してもがく。しばらくすると、水球の外でまたふたりの少女の姿が見えた。ミチとスズだ。
「スズ、本当にあなたがおやりになりますの？」
ミチが尋ねた。スズは水球の中にいる醜い怪物を凝視していた。その瞳には激しい憎悪と怒りが籠っていた。
「大丈夫。やれる。ジャンや島の人たちを弄んで殺した魔女を、私はどうしても許すことはできないから」
「分かりました。それでは存分に・・」
ミチが身を退くと、スズはレインコートを脱いだ。ピリリ、と身体中に電気を纏っている。１３歳の少女の視線は、ただただ水球に閉じ込められた怪物のみに向けられていた。
まさか・・・・や、やめろやめろやめろやめろやめろっ！
口から大量の泡（あぶく）を吐き続け、声にならない声を出すも届くわけがないのは目に見えていた。いや、たとえ届いたとしてもスズはやめる気などさらさらなかった。もはや、彼女に「躊躇」の二文字はどこにもなかった。彼女は全身に溜め込んだ電気を放電させ、それは怪物を封じた水球に直撃した。
「○×△◇◎・・・・ッッ！！」
声にならない絶叫を吐き出す。水を通して威力が倍増した電撃を全身に受けた怪物は水球が破裂したと同時に解放されるも、
「おっと、拷問（リンチ）はまだ続くぜ！」
全身から大量に生やしたアキラによる触手のムチを顔、腹部、膝

に受けた後で全身を何重に縛り上げられ、
「おりゃあっ！！」
力任せに投げ飛ばされてそのまま撃墜した。
「き・・・・貴様らあっ！寄ってたかって人を嬲(なぶ)りやがってえっ！！」
「あら？心外ね。お遊戯(ゲーム)は一人より、みんなで遊(や)ったほうがもっと面白いし、もっと楽しいじゃない？」
いつの間にか、目の前にはリベリオンが立っていた。彼女は大鎌「希望狩(ウィッシュ・ハント)」を片手に握り締めていた。
「こんな暇潰(ゲーム)しを堪能できたのよ。幸せに思いなさい」
「黙れ！殺してやる！今すぐ殺してやるっ！！」
赤く充血した両目で、それこそ火を噴くような勢いで呪いの言葉を喚き散らす。もう、そこにリベリオンが見た希望は少しも面影を残していなかった。彼女が始末した禿頭の大臣とノヴァと同等か、それ以上に醜く、汚らわしい屑の結晶があるだけだった。
怪物は最後の力を振り絞って、両掌に暗黒の光球を召喚させる。渦を巻き、少しずつ少しずつ力を膨大にさせていく光球はやがて最大級にまで膨れ上がると、
「死ねえっ！！！」
砲撃に変換して発射した。腹に響く重低音。周囲の土砂が煙幕のように舞い上がり、絶大な破壊力が光速でリベリオンに突き進んでいく。撃たれた途端に凄まじい衝撃波を肌で浴びたリベリオンは正直に感嘆した。おそらくよけられない。直撃したら、かなりの痛手を被(こうむ)るだろう。それどころか、死ぬかもしれない。最後の最後でこんな隠し玉を使用するとは、さすがは優秀な魔女というところか。
「でも、所詮は人間の力だわ」
リベリオンはそう呟くと、向かってくる光球に大鎌を高々に振り上げ、一気に降下する。衝撃に膨大な粉塵が舞い起こり、全員の視界が遮られる。息を呑み、事の行方をしばし見守る。しばらくして粉塵が漆黒の刃に掻き消され、リベリオンが無事な姿を見せた。七

人衆は歓喜の声をあげたに対し、怪物は驚愕と絶望の声をあげる。
「な・・・・な・・・・・な・・・・・っ！？」
ぱくぱくと、口の開閉を繰り返しては言葉にならない声を飛ばす怪物。リベリオンは大鎌を肩に担ぐと、ゆっくりと歩み出して接近を少しずつ試みた。途端に彼女の全身から例えようのない漆黒の闇が広がり、怪物の視界を支配する。現実感が遠のき、得体の知れない霊気が怪物の体の中へと侵し始めた。冷え冷えとした夜気と、肌にまとわりつく湿気が、陰影となって身に迫ってくる。息が苦しくなり、心臓の鼓動が一段と早くなった。気配が胸を圧迫し、唾液を何度も飲み込んだ。
闇が、恐怖が、近づいてくる。
ヒタヒタと、確かに近づいてくる。
私は、とんでもないのを相手にしてしまったのか・・・・。
今になって後悔が起きた。でも、もう遅い。死神は、すでに眼前に立っている。
１７歳の少女の姿をした漆黒の衣装の死神は、黒い眼帯に手をかけて取り外すと、瞳のない真紅の右眼を曝した。その右眼で怪物の両眼を奥まで覗き込む。
催眠。
呪われたこの右眼を見てしまった者はたとえ誰であろうと途端に自我を失い、深い深い催眠に囚われ、抵抗できなくなる。この右眼による催眠に囚われた者はリベリオンの命じるままに動いてしまう。たとえ「死ね」という命令でも、かかった者は忠実に「死」を実行する。
最強にして、最恐の武器をリベリオンは遂に使用した。
「あなたは多くの命を弄び、奪った・・・・今度は島民（みんな）との感動の再会を味わいなさい」
「な・・・・何？」
その直後だった。怪物の足元の地面が突然沈み始めた。ゆっくり、ゆっくり地獄へと沈没していく怪物にさらに信じられない現象が襲

う。周囲で息を引き取っていた島民たちが突然次々と起き上がり、よろよろと歩き出したのだ。だが島民たちはみな目は虚ろ、口からも血が流れた生気のない状態のままよろよろと歩み、怪物のみを目指して近づいていく。怪物は心の底から恐怖を覚えていた。ずぶずぶと沈んでいく怪物の体に、死人となったジャンが抱きついた。ジャンを筆頭に、島民たちが次々に怪物に縋りつく。

「ウェンディ」

「ウェンディ・・」

「ウェンディ・・・・・」

「ひ・・・・ひいっ！」

「一緒に」

「一緒に・・」

「や、やめろ！離せ！触るなあっ！！」

「一緒に・・・・」

怪物の体が、島民たちとともに地獄へと沈んでいく。

「助けて！体が沈む！沈むよぉーっっ！！」

実を言うと、本当は怪物の体には誰も縋っていない。体も沈んでいないのだ。全てはリベリオンが紅い右眼で見せた幻覚。だが効果は永遠に続く。本当に死人（アンデッド）と化して次々に抱きついてきた島民を殴り、恐怖に顔を歪ませる。リベリオンも七人衆もその様子をただ見つめていた。やがて、怪物の両眼が見つめているリベリオンを捉える。次の瞬間、怪物は醜い体を細かな破片と化して飛散させた。何をする気かと思うと、殻を剥いで中からゆで卵が白い球体を見せるようにウェンディの美しい表情が現れ、リベリオンに右手を伸ばして哀願した。

「お願い、マヤ。助けて。もう黒魔術なんてやめる。やめるから。・・・私たちは、“友達”でしょ？」

「「「「「「！！！・・・・・・・・・・・・」」」」」」

七人衆は絶句した。

なんて白々しい。無様な悪足掻きなのだろう。全てを嘘で固め、

本当のことなど一つもなかったくせに。今の今になって、リベリオンを「友達」と呼んで縋ろうとするとは。七人衆は主がその手を取るなど絶対にありえないと思っていた。

ところが、七人衆の予想に反して、リベリオンはウェンディの手を左手で？んだ。七人衆が驚くと同時にウェンディは安堵したような笑みをした。友達は、にこ、と微笑んでいた。

「マヤ、助けてくれるのね・・・・・！」

笑みを輝かせ、言葉をかけるウェンディ。リベリオンは優しく微笑んだまま、こう告げた。

「ウェンディ、あなたには本当に感謝している」

「？・・・・・・・・・・」

「あなたのおかげで、私、人間という生き物が本当によく分かったわ。もしかしたら、どこかでまだ人間に対して少しでも希望を抱いていたかもしれない。だから、ほんのちょっとだけどあなたに期待していたのよ。でも、今回のことでよく学んだわ。やっぱり人間って、バカなんだって。馬鹿は死ななきゃ治らないんだって。これもあなたという“人間”に出会えたおかげよ」

「・・・・マ、マヤ？」

「ありがとう。あなたのこと、本当に好きだった。・・・・ウェンディ、左手の握手は別れの挨拶って、知ってる？」

「えっ・・・・・？」

そう声が返った時、リベリオンは彼女の手を離していた。瞬時に笑顔が憎悪と悲しみ、怒りが入り混じった形相に変貌し、赤黒の業火が漆黒の刃全体に集約した大鎌を高く振りかざす。冷酷な目線のままウェンディを見下ろし、リベリオンは静かに呟いた。

「おまえなんか、地獄へ逝け！」

刃が振り下ろされ、地獄の業火が一気に眼前に急迫した。

彼女の、おぞましい断末魔の絶叫が島中に響き渡った。

## 目的地

ちゃぷ、ちゃぷ・・・。

濃霧が消えた水面(みなも)に波紋が広がっていく中、ヨツバが浅瀬に透き通った色の機体を休めている宇宙船から離れた。再び水面上に波紋が広がり、ヨツバは陸の上で待機する主と仲間たちのもとへ急いで戻り、報告する。

「大丈夫です。スペースホークAはすでに自動修理・点検機能が完了しています。飛行は十分可能でしょう」

「そう。それはよかった。じゃあ、さっさとこんな島出ましょう・・・」

と、リベリオンは水面に足を着けようとする。

「待ってください、キュアリベリオン。一つだけよろしいですか？」

背後からキクに止められた。「何よ？」と聞き返すが、リベリオンはキクが何を言おうとしているかすでに分かっていた。

「なぜ・・・なんですか？なぜ魔女を殺さなかったんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

予想通りの質問だった。彼女だけでなく、その場にいる全員の目が解答を知りたがっている。

そう。あの時・・・別れを告げ、業火を刃に纏った大鎌を振り上げたリベリオンはその後勢いよく振り下ろしたものの、寸前で刃を止めたのである。ウェンディは白目を剥いて気を失い、リベリオンは漆黒の刃から業火を消すと、大鎌「希望狩(ウィッシュ・ハント)」をその場で破壊してしまった。全員が彼女の行為に呆気に取られ、疑問が募った。

なぜ、とどめを刺さなかった？

こんな生きる価値もない悪(クズ)をどうして殺さなかった？

今まで散々国を滅ぼし、権力を牛耳する悪(ゴミ)をその手で血祭りにあげてきた彼女が手をかけなかったのは初めてだった。

しばらく返答を待つ。ふぅ、と小さく息を吐いてリベリオンは口

を開いた。
「・・・殺す価値もなかったからよ」
「キュアリベリオン・・・？」
「魔女(あいつ)には弄んできた島民たちの姿が永久に見えるように催眠をかけておいたわ。これから先、彼女は現実でも夢の世界でもずっと地獄を見続ける。気が狂うほど。魔女(あいつ)は生きて苦しんだほうがいいのよ。・・・・死んだほうがマシと思えるくらいにね！」
「「「「「「！・・・・・・・・・・」」」」」」
全員絶句した。
確かにそれは地獄だ。彼女はこれからも自らの手を汚さずに殺してきた大勢の人々の幻覚を嫌でも見続けることになる。ありとあらゆる亡者たちの姿を見ながら、声を聞きながら、彼女の心はどこまで耐えられるのだろう。そんな生き地獄を永遠に味わうのなら死んだほうがマシかもしれない。
だが、たとえ「死」を選んだとしてもきっと彼女の逝き先は本当の地獄だろう。おそらく亡霊を毎日見るよりも恐ろしく、耐え切れない苦しみを経験することになる。・・・・そう思うと、少しばかり彼女が哀れに思えた。
けれど、本当にそれが理由なのだろうか。
スズは一瞬、リベリオンの、眼帯を覆っていない左眼から細かな光が弾けたのを見た。
涙・・・？
だったかどうかは分からない。でも、とスズは思う。
もしかしたら、リベリオンは殺さなかったのではなく、“殺せなかった”のではないだろうか。
リベリオンにとって、彼女は地球上でも数少ない特別な存在に違いなかった。「友達」と呼ばれ、心から許していた。もしかすると、彼女とともに世界で生きてゆきたいとさえ考えていたかもしれない。嘘で塗り固められていた偽りの友情。しかし、それでもリベリオンはかけがえのない宝石に見えていたのではないだろうか。

もし、そうならばリベリオンは今、自分には到底想像もできない、底すらも見えない絶望に囚われている。彼女を絶望の泥沼から救うことはできないのだろうか。
しばらく考え、自分には不可能と決める。
自身も絶望の闇に囚われている。光の欠片すら持っていない自分にリベリオンを救うことはできない。
それにこれはリベリオンが決めて実行したことだ。
これ以上言及するのは無粋だろうと、スズはそれ以上は聞かない。みなも同様にそれ以上は言わなかった。
やがてリベリオンは再び海面に向け、片足を水に着ける。二、三歩いたところで止まった。
「ヨツバ」
「は、はい！」
突然名前を呼ばれ、幾分緊張気味に返事するヨツバ。すると、リベリオンは彼女にこう尋ねた。
「・・今年の皆既月食はいつになるか分かる？」
「え？皆既月食・・ですか？ええと、確か前回が五ヶ月前の中旬でしたから、その六ヶ月後・・・来月の中旬ですね」
「間違いない？」
「まあ天文学は少々疎いですが、間違ってないはずです」
「そう・・・」
リベリオンは懐から何かを取り出した。魔女の城の地下、「実験室」の本棚に収納されていた魔術書だった。開き、ノヴァが見せた魔王召喚の魔法円が描かれたページを見つける。彼女はしばしそれを見つめていたが、ぱたんと閉じ、リベリオンはそれを地平線へと投げた。ぱしゃん、と水が跳ねる音が聞こえた後でリベリオンは今度は刃が砕け、使い物にならなくなった大鎌「希望狩（ウィッシュ・ハント）」を召喚し、これも水平線上に投げた。再び水が跳ねる音がし、死神の鎌は深い暗黒へと眠りに着く。
また、会いましょう。

声に出さず、リベリオンは相棒としばしの別れを告げた。
「みんな、私たちの目的地（ゴール）が決まったわ」
「！・・・どこなのですか？」
全員がどことなく緊張の面持をし、ミチが尋ねる。
「・・・ハピネスランドよ」
「「「「「！！！・・・・・・・・・・・・」」」」」
全員、息を呑んだ。リベリオンは再び振り返る。何の感情も籠っていない、いつもの無表情がそこにあった。
「４００年前にプリキュアたちに封印されたという魔王をこの手で蘇らせる。魔王が蘇れば、全ての世界は滅び、『無』へ還されるわ。あなたたちの願望も遂に叶う・・・・・さあ、どうする？」
「答えはすでに決まっています、キュアリベリオン。私たちはあなたについていきます・・！」
キクをはじめ、ミチ、スズ、ヨツバ、ツバキ、カノン、アキラ、ヤミが力強く首を縦に振る。全員の目に「覚悟」が籠っていた。世界を、自分自身すらも壊す「覚悟」を。僕たちの表情を一人ずつ確認したリベリオンは、ふ、とわずかに笑みを見せる。
「・・・行きましょうか」
召喚魔法円は完璧に覚えた。声をかけ、前を振り返り、歩を進める。
彼女に続き、僕たちも歩み出す。
彼女たちの表情に不安や心配は少しもない。
恐れのない自信と、ようやく叶えることができる願望。
そして、誰よりも強く、残酷になれる「死神」が一緒にいたから。

# 序章（アヴァン）

一ヵ月後。

暗黒に統一された巨城。その皇宮にて七人の少女たちが集まっている。少女たちの前には悪魔が大きく掌を開いた形状に見える玉座の上に、漆黒の制服を着、右目を黒の眼帯で隠した長髪の少女が優雅に腰掛けている。玉座の傍らには、小さな円形のテーブルがあり、そこに鋼鉄製の鉤爪と漆黒に染まる三日月形に曲がった刃を煌かせた大鎌が置いてあった。

ふいに、少女が眼帯を覆った右目を抑えた。

「疼く・・疼くわ、この目が」

「・・どうかしましたか？」

「ん・・・？」

彼女の動作に、軍服を纏った背の高い少女が声をかける。

「普段笑わないあなたが珍しく笑っていたものですから」

「・・・そう。私、笑ってたの？ふぅん・・・」

そりゃそうよ。私には分かるもの。笑わずにはいられないわ。

彼女は口角を上げて、笑みを広げていく。

ようやく、ようやく会えるんだから。

ずっとずっと会いたかった人に。

その時が来るのを、私は楽しみで楽しみで仕方がない。

「早く来て・・・真夜」

幸せの国を支配した彼女が三つ首の魔王を蘇らせ、全世界を地獄に変えたのはそれから約１７時間後のことである。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6028w/

CureRebellion Episode:Blood

2011年10月14日01時56分発行